

松浦百英講述

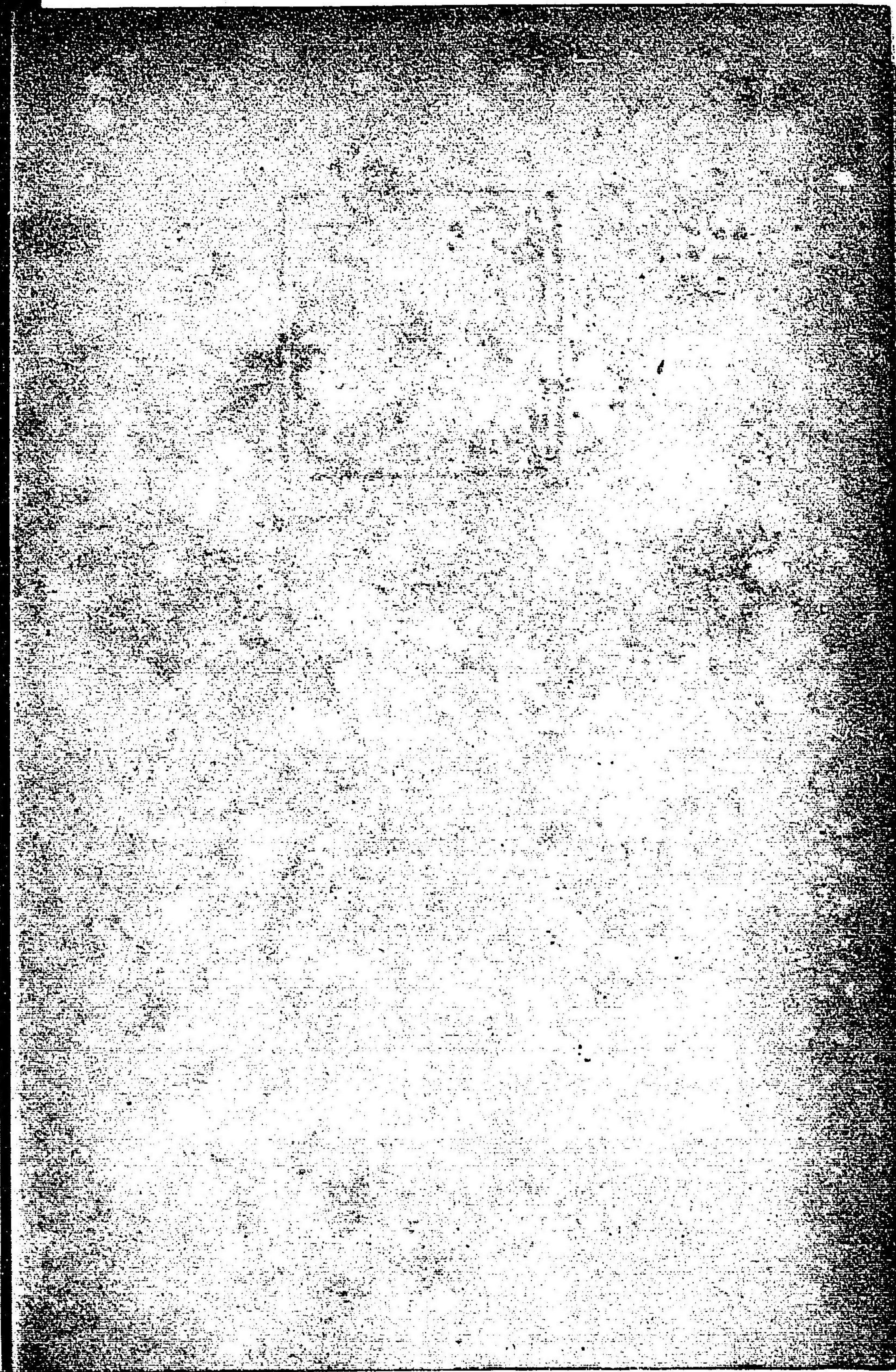


連座說教

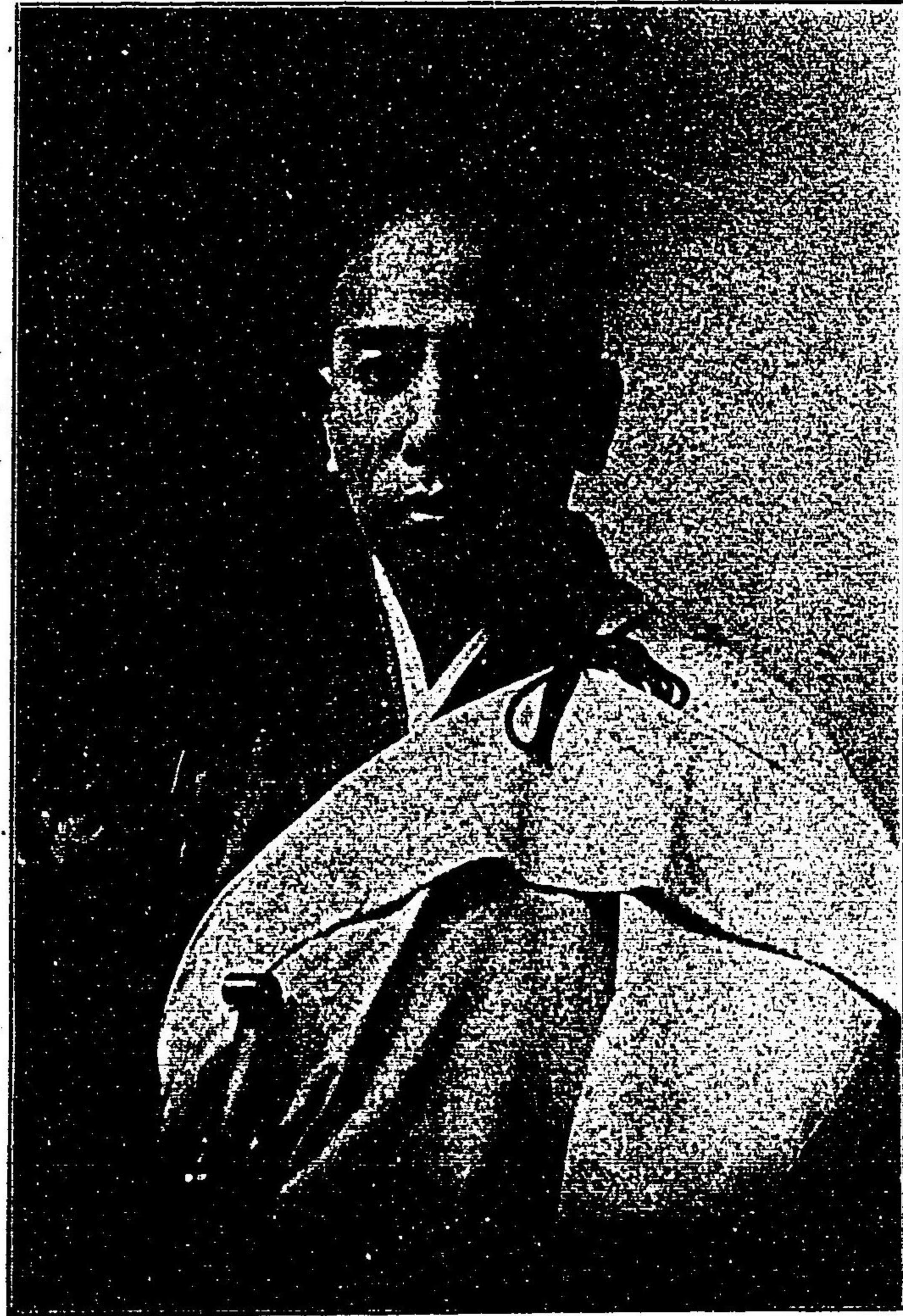
東京佛教團本部蔵版

明治  
41 4 15  
丙午









松浦百英講師肖像



## 序

原るに夫れ如來在世には全く二教無く二師無し。大師釋尊  
たゞ無上妙道を以て衆生を誘引したまひしのみ。然れども  
衆生の類不同別異なるが爲め利生の法門同じきこと能は  
ず。或は向上向下婆心片々。或は單復縱横言端語端其の拳と  
爲し掌と爲すもの廣略淺深幾箇萬々涯際を知るべからず  
佛滅後代代の賢聖番番の大士其の遺教を類別して或は大  
小兩乗と爲し。顯密二教と爲し。或は權實半滿聖淨二門と爲  
して其の判教を異にすと雖も皆其の幽致を探り玄妙を開  
いて普く衆生界を利するに在り  
然るに後代の法子法孫相互に自己所見の一法のみ黨護し  
て全體の佛教を大觀せざるに由り其の未だ知らざるを疎



序  
むじ其の未だ信ぜざるを輕むじて之を誹譏するに至る  
或は徒に法執法慢の魔境に入る者なきに非ず。是に由て求  
法の男女淨信の機類初めて如來の大法を聽かむとするも  
の孰れか其の正法にして信すべきものなるかを知るに困  
むもの滔々たる天下概ね然らざるはなし。然れば則ち是等  
の衆生をして無上の佛道に誘引するには宜しく宗見我執  
の塵埃を超脱したる中正不偏の眞實義を唱道せずむばあ  
るべからざる也

然り而して佛教の社會に必要なるは蕤直に人生の歸趣を  
示して實踐躬行せしむるに在りとす。其の歸趣たるや教門  
多種なりと雖も。縑素に通じて常恒不可缺の要綱を舉示す  
れば則ち安心起行二十種の信仰箇條を出でざる也

是故に余は往年此の箇條を拈擧してより之を講じ之を論  
ずること日も亦足らず。然れども未だ説法の原則たる法譬  
因の三段法に基きて優に連座の講録と作すの暇を得ざり  
き。是に於て乎。心友英公を慫慂して此の筆講を託したるに  
夙に我意を得たる公は喜て之に應じ。諄々として稿を草し  
二十席四十餘座に及びて首尾一貫す。其文平易。其義甚深。其  
の古に泥まず亦今に流れず。古今を折衷して長短其の宜し  
きを得。麤に入り細に入りて巧みに人情の機微を穿ちたる  
ところ。或は人をして笑はしめ或は泣かしむるの妙趣ある  
を見る。故に之を讀むの善男女は飽かず苦まずして通佛教  
の要義を領會し。通佛教の安心を知得するならむ。又佛教演  
説に従事するの士には即ち之が腹案となり参考となりて



四無礙辯才の資料となるもの多かるべき也  
 蓋し此種の講録は豈啻此篇のみに止まらむや。余も亦暇を得ば他時異日重ねて稿を起すことあるべく。或は他を勞して筆講せしむることあるべしと雖も。今茲に初めて此篇を廣宣流布するに至りしは。廻ち余が本誓の發現にして。我が佛教團活躍の健兒たらずむば。仍て歡喜の餘り一言を卷頭に添ふ

維時明治四十一年戊申之春三月東都佛教團本部に於て

牆外道人 高田道見識

### 說教式文

牆外道見沙門撰

#### 懺悔

諸の善男女等。掌を合せて至心に唱へたまへ。われ今先佛懺悔の文を唱へむと欲す。經に云く小罪を輕じて以て殃なしとすること勿れ。水の滴り微なりといへども漸く大器に盈つ。刹那に造る罪殃も無間に墮るなり。一び人身を失へば萬劫にも復らず。壯なる色の停まらざること猶奔る馬の如し。人の命の無常なることは山の水よりも過ぎたり。今日は存すといへども明るまで亦保ち難しと。故に自から罪ありと知りなば當に懺悔せらるべし。懺悔せらるれば即ち安樂なり。安樂なるが故に各各正念に住し度て佛前に懺悔せらるべし

我昔所造諸惡業 皆由無始貪瞋癡



從身口意之所生 一切我今皆懺悔

酒水

(三返)

悲體の戒は雷のごとくに震ひ 慈意の妙なること大いなる雲のごとし 甘露の法雨を澍いて 煩惱の絨を滅除す

三歸

諸の善男女等。各各佛陀の證明に依り。無始生死の罪過を除滅して。身口意の三業清淨なることを得られたり。然あれば則ち直に須く難値難遇の想ひに住して。同體現前住持の三寶に歸依せらるべし。歸依三寶の功德は誠に是れ甚深不可思議にして亦不可稱量なり

南無歸依佛 南無歸依法 南無歸依僧 (三返)

諸の善男女等各各三寶に歸依し奉りて已に尊貴最勝の身となりたまひき唯願くは今身より佛身に至るまで。此事よく信受奉行

せらるべきもの也

發願

諸の善男女等。已に身口意の三業を淨め。佛法僧の三寶に歸依し奉り無上甚深の妙法を聽聞するに堪へたり。仰ぎ冀くは娑婆世界の教主釋迦牟尼如來及び盡十方法界の諸佛諸菩薩諸天神。今この道場に降臨して化縁の善男女を擁護し。所説の講演に對して慈愍大悲の照鑑を垂れたまはむことを

回向

如上の講演は僅に泰山の一塵。法海の涓滴にして。未だ其の幽玄を盡すに足らずと雖も。見佛聞法の行持を具して成佛得道の勝因に回向せしことは誠に是れ曠大劫の良縁にして。朽つべからざるの功德たり。願くは諸の善男女等千生萬生所々同じく法偈と爲りて。自他同じく無上正等菩提を圓かにせむことを





例言

- 一 大師釋尊金口の説法四十九年重巻末軸積ひて棟に充つと雖之を結縛すれば則ち願國の衆生をして心生滅の迷界より心真如の悟境に到達せしむるに外ならざる也
- 二 今其が到達の方法を大別して二門と爲し二門各十條を具して二十種の信仰首條を別し以て安心起行の綱領を顯示せし者は即我が通佛教の根本義なりとす
- 三 既に我が通佛教の根本義なるが故に昔く十方有縁の士をして齊しく一味の法樂に飽かしめむには我が高田團長先づ之が解説の任に當る可きものなり
- 四 然りと雖單に其綱領を行義せる者には既に團長が自著せし『正信無常觀』『通佛教一夕話』『通佛教安心』等のあるあり是を以て本篇を撰述するに當りてや團長は唯式文と序言のみを撰して之を証附するに止め他は皆松浦講師をして其任に當らしめたり
- 五 松浦講師は現代の教界に於て雄辯の名聲高く爲に終歲南船北馬殆と席授まるの暇なきを見る本篇は講師が多年實證修得の餘瀝として言文一致の筆端に迸出せし者なれば明ゆる詩人坐して名勝と探る底の空談と自ら其撰を異にするは編者の深く信じて撰はざる所なり





## 例言

- 一 大師釋尊金口の說法四十九年黃卷朱軸積むて棟に充つと雖之を結歸すれば則ち顛倒の衆生をして心生滅の迷界より心眞如の悟境に到達せしむるに外ならざる也
- 二 今其が到達の方法を大別して二門と爲し二門各十條を具して二十種の信仰箇條を類別し以て安心起行の綱領を顯示せし者は即我が通佛教の根本義なりとす
- 三 既に我が通佛教の根本義なるが故に普く十方有縁の士をして齊しく一味の法樂に飽かしめむには我が高田團長先づ之が解説の任に當る可きものなり
- 四 然りと雖單に其綱領を衍義せる者には既に團長が自著せし「正信無常觀」「通佛教一夕話」「通佛教安心」等のあるあり是を以て本篇を撰述するに當りてや團長は唯式文と序言のみを撰して之を添附するに止め他は皆松浦講師をして其任に當らしめたり
- 五 松浦講師は現代の教界に於て雄辯の名聲高く爲に終歲南船北馬殆と席煖まるの暇なきを見る本篇は講師が多年實驗修得の餘瀝として言文一致の筆端に迸出せし者なれば謂ゆる詩人坐して名勝を探る底の空談と自ら其撰を異にするは編者の深く信じて疑はざる所なり



六 本篇に蒐むる者は嘗て通俗佛教新聞紙上に連載せしを更に講師をして少しく改竄添補の勞を取らしめたるなり其筆講時に或は控泥滯水の言文中所々佶屈聱牙の點あり或は高談幽玄に走る裡亦自ら隨類各得の妙解を發揮したるに於て泪と遺憾なきに庶幾からむ歟

七 本篇の髓頭として連座毎に小註を掲げたるは讀者をして容易に其要點を知らしむるに便ならしめたるのみ

八 本篇をして四號活字と爲したるは徒に紙幅を厚かしむるが爲にはあらで或は初學者をして實地應用に便ならしめ又は老眼の翁媪をして閱讀に便ならしむるが爲なるにあり

九 卷首に其肖像を挿入すること固より講師の痛斥せし所なれども現在未來に於て講師の容貌を知らざる幾千萬の愛讀諸士が本篇を繕くに當り開卷先づ講師の風丰に接して之を腦裡に印寫し而して後徐に本文を閱讀せむ乎恰も教筵に列りて自から其説法を聽聞するの想ひ無くむばあらず於康幸にして本篇が漸く三摩提の妙境に入るの一助ともならば豈嘗編者の本懐のみに非らざらむや

明治四十一年三月

編者 細川道契識

目次

初 度

通佛教根本義(上)

○各宗の安心 ○佛教の原理 ○信仰箇條圖解 ○諸派の融會 ○人位成佛 ○法位成佛

通佛教根本義(中)

○一心法界根本義 ○平等門絕對界 ○不二門佛境界 ○差別門相待界 ○相待と絕對の融合 ○宗教は心の産物 ○智的宗教心 ○情的宗教心 ○意的宗教心 ○三方面に安慰を與ふ

通佛教根本義(下)

○智情意の目的は眞善美 ○眞善美の極點は絶待界 ○心生滅門より心眞如門に入る ○一心萬法 ○元曉大師 ○蔡君謨 ○生死輪廻の大海原 ○難破船救助 ○自利利他圓滿具足 ○二世安樂の素懷を遂ぐ

第一度



觀念無常(上).....二六

- 通佛教の信仰箇條に入る ○無常は事實なり
- 存覺法語 ○他人の死は雜談の裡に野邊送り ○自ら生死岸頭に立つ時 ○正信無常觀
- 有限世界の無常を觀して無限絶對の大安心に到る ○我身知らずの榮螺 ○托鉢僧大名の廣間に睡る ○天地は萬物の逆旅光陰は百代の過客

觀念無常(下).....三五

- 世尊無常を觀して宮中を出て給ふ ○見真大師 ○承陽大師 ○死は經驗なし ○漢軍の譬喩 ○身の無常 ○心の無常 ○人生の岸より絶望の淵に陥る ○平清盛の侍女祇王と祇女——佛御前 ○正信無常觀——心常住不變身も亦常住不變

第二度

三世因果(上).....四三

- 因果は佛陀の所造に非ず ○善惡の報に三時あり ○既往を懐ひ將來を想ふ ○野蠻昧の人 ○文明開化の人 ○兒童智識の發達に徴す ○未來の果を知らんと欲せば現在の因を見よ ○來年の曆は今年に於て作製す ○木戸孝允先生の未來談

三世因果(下).....五二

- 三世通貫の生活 ○輕躁なる下婢 ○過去の追憶は樂みの源泉なり ○初戀の成就
- 空想と現實と適當の調和 ○今世の身心は過去善惡業の影 ○蠶の虫 ○小池の魚
- 歩兵少尉杉本秀造君寫眞の血痕 ○正信無常觀三世に亘りて相續不斷なること疑はず

第三度

十界依正(上).....六三

- 業報相續の道理——時間的には三世因果空間的には十界依正 ○依報正報 ○第一地獄界 ○第二餓鬼界 ○第三畜生界 ○第四修羅界 ○第五人間界 ○第六天上界 ○六凡は迷の境界

十界依正(下).....七三

- 悟の境界 ○第七聲聞界 ○四念住 ○四諦 ○第八緣覺界 ○十二因緣 ○回心向大
- 第九菩薩界 ○四弘誓願 ○六波羅蜜 ○第十佛界 ○三身 ○三德 ○人間界を定位とし一心より十界となる ○仙臺の石工の後妻繼子を慘殺す ○十萬億土は心を出發點として測量す



第四度

至心懺悔(上)

○三信の理論 ○三行の實際 ○懺悔の解 ○貪瞋癡の三毒 ○身口意の三業 ○樞木の勘定 ○呼吸の力 人間の相場附け 鎖の譬喩 ○空気に包まれて空気を知らず ○罪の解脱 ○真興大徳獵夫を戒む

至心懺悔(下)

○罪の自覺 ○性の善惡 ○本心は水の湛へたるが如し ○過つて毒を嚙下すれば吐くべし ○一億圓の延長 ○恐人我子を殺して捨ふ ○煙管掃除の譬喩 ○七里恒順上人強盜を改心せしむ ○正信無常觀——無始生死の罪過を消滅す

第五度

歸依三寶(上)

○完全なる者に便らんとす ○杖と眼鏡及び醫師 ○三寶に歸依せざる可らず ○自分の經驗 ○妙義山に登る ○心の奥底より三寶無礙の光明を生み出す ○左右の道が迷悟正邪の分岐點 ○南無の釋 ○十七箇條の憲法

歸依三寶(下)

○佛法の大海は信を以て能入と爲す ○出曜經水泡を以て華鬘を作る ○三寶に三種の功德あり ○一體三寶 ○現前三寶 ○住持三寶 ○田川トク女の深信 ○感應道交 ○絶對平等の大解脱界に歸順す

第六度

受持五戒(上)

○眞に是れ佛子 ○佛子の自行 ○第一不殺生戒 ○廬山の惠遠法師 ○人見某の妻猫子を殺す ○蠅を撃つて己れの頭を傷く ○開遮持犯 ○義戰の功德 ○佛の慧命相續

受持五戒(中)

○第二不偷盜戒 ○泥棒の語 ○慈雲尊者の垂示 ○學校生徒朋友の筆を盗む ○偷盜の報 ○第三不邪淫戒 ○夫は船長婦は機關士 ○デスレリー夫人 ○邪淫の報 ○第四不妄語戒 ○天地間は此戒の露現 ○甜瓜甜瓜を喰ふ ○妄語の報 ○三業の妄語 ○延陵の季子 ○葉公の正直

受持五戒(下)



○第五不飲酒戒 ○諸經の戒め ○外道酒の功德を説く ○飲酒の爲めに壽命を短縮す  
 ○動物の發育年數と生命期限 ○優婆離尊者病僧の爲めに飲酒の總許を請ふ ○中島毒法居士 ○森勝次郎の話

第七度

社會悉檀(上)……………一六九

○衆生濟度は佛弟子の本誓 ○悉檀の釋 ○人の機根は千差萬別 ○消極的の制欲のみは賞するに足らず ○積極的の修善を要す ○善を爲すの手始

社會悉檀(下)……………一七八

○一切の婦人多くは是れ饒舌 ○孟子の言 ○他人の善事を認むるは恕の一字にあり  
 ○彌之瑕の話 ○親を撃つて不孝となり亦孝となる ○同情を以て公共の業を勸む

第八度

傳道悉檀(上)……………一八八

○物質的救済と精神的救済 ○五停心の例 ○他の性情を辨へざれば往々失態を演ず  
 ○世尊途中に難陀を救へ給ふ ○勸善懲惡 ○盤溪禪師賊僧を改悛せしむ

傳道悉檀(下)……………一九七

○善人の眼中には惡人なし ○佛の眼中には唯佛のみ映現す ○勝海舟翁外交の術 ○賢き婦人愚僧の説法に證悟す ○妻の貞操能く夫を改心せしむ

第九度

對治悉檀(上)……………二〇七

○貪瞋癡の三毒を對治す ○淫祠邪教 ○辨當箱大明神

對治悉檀(下)……………二一四

○身口意に従つて造罪す ○食欲 ○南都齒拔の名人 ○瞋恚 ○赤鬼青鬼 ○公憤と私憤の別 ○劉寬饒一生怒らず ○愚癡 ○盜賊三人の自業自得

第十度

入理悉檀(上下)……………二二六

○眞如法性の理 ○極樂へ豆腐買ひに行く ○佛波斯匿王に向つて無常の譬喩を説き給ふ  
 ○生死は佛の御生命 ○生佛不二 ○自利利他圓滿具足

第十一度



父母生養(上)……………二三六

○自身の回顧 ○一切の男子は皆我が父一切の女人は皆我が母 ○乃木大將の慈愛 ○心地觀經の御文

父母生養(下)……………二四六

○心地觀經御文の釋 ○母その子に食を與ふるの繪 ○親子一枚 ○佛孝道を説き給ふと無量無邊 ○大學講師某博士の不孝 ○孝子鎌田祐吉氏 ○孝順は至道の法なり

第十二度

衆人共存(上)……………二五九

○衆生の恩 ○無量無邊の衆生恩 ○千差萬別の現象界は平等の本體を離れず ○共命鳥の話

衆人共存(下)……………二六七

○行誠上人の話 ○陶器と米と我等の關係 ○因縁和合 ○一切の地水は是れ我が先身一切の火風は是れ我か本體 ○眞田伊豆守信之の衆生恩 ○佛心とは大慈悲是なり

第十三度

國王統治(上)……………二七八

○國王の恩 ○大恩は却つて難有味を感せず ○引業滿業 ○我日本の國跡 ○三種の神器を天位の御璽と定めさせらる ○忠孝一致

國王統治(下)……………二八六

○日本各宗の祖師は皆國王統治の恩を説く ○佛法篤信の文武百官 ○菅原道實公 ○廣丙號の沈没

第十四度

三寶教養(上)……………二九七

○十七箇條の憲法 ○大田錦城の三寶 ○彌蘭王と那先比丘の問答 ○實に六義あり ○歴代天皇の歸佛 ○光明皇后 ○自己の光明蓋天蓋地

三寶教養(下)……………三〇六

○當てにならぬ妄心 ○苦海を渡るの船 ○金満家の苦心 ○乞食の氣樂 ○飽食者を食を羨む ○暹羅の三歸戒 ○我等直に三寶の境界



第十五度

布施仁愛(上).....三二五

○波羅密の語 ○六度 ○六蔽 ○布施の意味 ○誠拙和尚の無欲 ○李之謙の陰徳

○福澤翁の布施論 ○牛乳を貯へて後悔す

布施仁愛(下).....三二七

○第一財施 ○野蠻と文明を測るの尺度 ○貧人も亦財施を爲し得らるべし ○淺草の救

療院 ○第二法施 ○佛の法施 ○祖師の法施 ○諸人の法施 ○第三無畏施 ○三輪

空寂

第十六度

持戒正念(上).....三四〇

○戒の本體は宇宙法爾個々圓成 ○十善と十惡との差別 ○一人にして四人の妻を畜ふるの譬喩

持戒正念(下).....三四八

○世間出世の善根は尸羅の大地に依る ○家庭の規律 ○家庭は兒童を中心と爲す ○買

喰罪惡論

○五戒 ○飲酒の爲めに五戒を犯す ○晋の陶侃

第十七度

忍辱宏量(上).....三五九

○忍の字義 ○違情の境に對して怒る ○瞋恚の害 ○輕躁なる男 ○釋の道乘法師

忍辱宏量(下).....三六九

○娑婆とは堪忍土 ○忍耐は處世の眞意義 ○忍辱仙人 ○永倉富子の話 ○木村長門守

重成の忍耐

第十八度

精進勇猛(上).....三七七

○精進の語 ○職務の神聖なることを自覺せよ ○怠惰なる夫婦の空想 ○呵雷兒の精進

○懈怠は衆行の累

精進勇猛(下).....三八四

○小事を積んで始めて大事となる ○愚人三重の樓を造る ○速成長養の藥 ○精進の眞

意義 ○レシップ氏の大精進



第十九度

禪定無念(上)

三九二

○禪學の流行 ○禪那の翻譯多種あり ○佛は說法するに當つて必ず先づ入定し給ふ  
○輕躁なる醫者 ○自己の散亂心を對治す ○五欲六塵

禪定不動(下)

三九九

○水も波を立つれば萬象の影を印せず ○正念を失へば善惡を識別すること能はず ○三  
毒と三惡道 ○大學の禪定 ○寒暑到來の話 ○散亂魔動を解脱して寂靜無爲を得

第二十度

智慧明鑑(上)

四〇七

○五度も智なければ愚盲に同し ○智を以て察せざれば非理を以て問ひらる ○馬鹿正直  
者橋下に溺死す ○定慧均等 ○蚊を撃つて親を殺す ○愚なる下婢

智慧明鑑(下)

四一四

○智慧の種類 ○邪見 ○猿智慧の例 ○野狐獅子に欺かる ○世尊の垂教 ○智慧とは  
人本有の靈光 ○長者の一子除障す ○眞實無漏の大智慧

連座說教



松浦百英筆講

通佛教根本義(上)

私に今日より、佛陀大悲の加被力を祈り、護法諸天の擁護を仰いて、通佛教の信仰箇條に就き、條を逐ひ座を重ねて、御談申すこと、致しました、不肖ながら、已に逐條說教を開いた以上は、教筵の設けらるゝ毎に、風は吹いても雨は降つても、身命のあらん限り、屈せず撓まず、箇條の終るまでは必ず御話申す覺悟でありますから、皆様方も何卒說教中に退座をなさらぬやうに相成るべくは始めから終りまで欠かさず御聽聞なさるやう、御願ひ申して置きます。



さて、この信仰箇條は、元より通佛教と申すのであるから、一宗一派に偏したる信條でないことはいふまでもありません。皆様は今日まで、勿論説教は度々御聽聞なされましたであらうし、また佛法の教理も御研究をされたこともありません。が併し乍ら、或は自力といひ、又は他力といひ、聖道門とか、淨土門とか、その法門の説き方や安心の示し方が種々に分れて居りました。眞宗の説教を聞けば、稱名念佛の外に往生淨土の道はないといひ、日蓮宗の説教では御題目を措いては成佛得脱の法はないと教へ、天台宗では一念三千、眞言宗では阿字本不生、禪宗には直指人心見性成佛といひ、華嚴宗には事々無礙法界と説き、各々その宗旨宗派で説き振りが違つて居りますが、わけ登る麓のみちは多けれどおなじ高嶺の月をみるかな

て何宗から這入つても何派から登つても、ツマル處は同じく眞如の月を眺めるに相違ないのでありますけれども、その信條が區々に別れて居りましたは

各宗の安心

佛敎の原理

自然疑ひが起り迷ひを生ずることを免れませぬ、今この信仰箇條は各宗に共通したる佛敎の原理を基として立てられたるものであります。

第一	觀念無常……身心如幻
第二	三世因果……生死去來
第三	十界依正……迷悟苦樂
第四	至心懺悔……改惡遷善
第五	歸依三寶……凡聖同體
第六	受持五戒……人道履踐
第七	社會悉檀……歡喜利益
第八	傳道悉檀……生善利益
第九	對治悉檀……破邪利益
第十	入理悉檀……入理利益

蓮座説教 初座の上、通佛教根本義



○起行		四恩		六徳	
第十一	父母生養……孝順報謝	第十三	國王統治……誠忠報謝	第十七	忍辱宏量……解脫忿怒
第十二	衆人共存……同仁報謝	第十四	三寶教養……恩德報謝	第十八	精進勇猛……解脫怠慢
第十五	布施仁愛……解脫慳貪	第十九	持戒正念……解脫非法	第二十	禪定不動……解脫亂心
第十六	智慧明鑑……解脫癡闇				

右の通り、通佛教の信仰箇條を大分けに分けると、安心門と起行門の二ツになり、その安心門の方に三信三行四檀の十箇條、起行門の方に四恩六徳の十箇條と、總じて二十箇條に分かれて居ります。この二十箇條の順を逐うて漸

次に御談申すのでありますが、今席はこの箇條に入る前に、佛教の根本義たる教理から生れて出でたるもので、最も肝要なる話であります。前以て御ことわり申して置きますが、御談する言は成るべく通俗平易にして俗耳に入り易く致す考へでありますけれども、今席は只今申しました通り佛教の根本義たる教理を説明するのですから、自然に専門語が多くなりました。或は皆様には餘り耳馴れぬ語などがあつて御解りにくい處があるかも知れませぬけれども、能く注意してお聞き下されたならば必ず了解は出来ますから、その積りで御聞きを願ひます。

全體同じ佛教の中で、自力門といひ他力門といへば全然教理が反對でもして居るかのやうに考へるのは、大いなる間違であります。そのことは、近來諸大家が禪と念佛と題して度々自力と他力との一致點を演べられたやうであります。皆様よく考へて御覽なさい、たゞ一方向きに他力々々とばかりいふて、自分を自分で罪業深き凡夫である、極悪深重の此身が何うして佛になら



れるものかと、自分と佛と天地懸隔して居るやうにのみ思つて居ては、佛様が、一切衆生悉く有佛性と云、一切衆生心性本淨とか、また奇哉々々此諸衆生云何具如来智慧德相云々などと、御説き遊ばされたる御文は何と解釋致しますか、そればかりではない、佛であるといふ時は、生きたるもの、みてはない木も佛である草も佛である、山色は清淨身と現れ溪聲は廣長舌と響き、雨竹風松皆禪を説き埵壁瓦礫も亦佛事を爲すとまで申すのであります。然るに自分は改めることの出来ぬ極悪深重の凡夫であつて、千生萬劫佛にはなられぬなどと思ふのは、草や木にも恥しいてはありませぬか、夫と反對に亦無暗に自力々々とばかりいうて、本來本法性天然自性身とか、釋迦彌勒は我が兒孫とかと、自分の外に佛を見ないで、破れ圓頓滅多大乘の空見識ばかりを吹き飛ばして、自分ばかりで得意になつて居るのも大いなる間違であります、他方々々とばかり云つて、如来を信する信心までも如来からいたゞいたものであると申したからとて自分に元來佛の性を具備して居ないでは、佛

を見また佛を信じ奉ることの出来る道理はありませぬ、また、本來本法性天然自性身などと言つて、自分はこのまゝ佛である、釋迦にも劣らず彌勒にも後へは引かぬなどと駄法螺を吹いた日には、殺生する佛様も現れ、偷盜を働く如来様も出来て、何が何んだか譯の分らぬことになつてしまひます、それゆゑ、祖師様は、自力々々と言つて破れ圓頓に陥る人を誡めて、この法は人々の分上にゆたかにそなはれりと雖も修せざるには現れず證せざるには得ることなしと仰せられてあります、それであるから、禪宗などで一超直入如来地とかまた直指人心見性成佛といひ、また、華嚴の法門で初發心時便成正覺などと言ふ語を丸呑みにして、外道の見解に落ちないやうに御注意を願ひたいのです、これを了解するには、六ヶしい語のやうですが、人位成佛、法位成佛といふことを區別して置いて貰はねばなりません、法位成佛の方からいへば、本來本法性天然自性身とも言ひます、從本以來自性清淨とても、擧足下足放光動地とても、松は吹く説法度生の聲、柳は染む觀音微妙の相、何ん



とても言へないことはありません、併しながら人位成佛の上から申せば、前に引證した通り、修せざれば現れず證せざれば得ることなしの御文言で分ります、初發心時便成正覺の文もさうです、初發心時とは人位の方面から見たもの、便成正覺とは法位の方面から申したものであります、この人位法位を區別して置かないと、修行もしないで直に佛ぢやなどと言つたり、また佛と自身と全然差別したるもの、やうに思ふ大間違が出来ますから能く御注意を願ひます、これから各宗各派を一貫したる佛教の根本義を御談申します

### 通佛教根本義 (中)

抑も、如來の御説き遊ばされたる教理の根本は、純一無雜なるものにしてその源は玲瓏皎潔たるもの、縁に赴き機に應じ一條の教源より滾々として流れ出てたるものでありますから、釋迦牟尼佛は、今私が申して居る所の通佛教の教理を御説き遊ばされたるものでありますけれども、その支派が段々と流

れて、十三宗三十餘派と分れて來たのであります、今私はその本源に遡つて通佛教の根本義を御談申すのでありますから、前におことわり申して置いた通り、自然難解しい言葉の出ることは免れませぬけれども、能く注意して順を違へず御聞き下さるやうに願ひます、この通佛教の根本義を圖に示せば

●心眞如門——平等門——絶對界

●一心界▲根本義 ●宗 本——不二門——佛境界

①心生滅門——差別門——相待界

右の通りで、通佛教の根本義と申しますれば、一圓相の一心法界であります三界唯一心、心外無別法と申しまして、この一心法界の一圓相の中には、一切萬法は残らず包まれてあるのです、佛もあれば衆生もあり、迷もあれば悟もあり、禽獸虫魚、草木國土、盡大地盡虚空、有りと有らゆる物柄事柄、この中に包まれぬものは一としてありませぬ、この宇宙間の事物を大別して見ますと、佛教の語では色心の二法と申します、色とは有形物質界のこと、



心とは無形心靈界のこととありますが、物質界のことは私共の専門でないから、それは世の學者に譲つて置きました、今は心靈界のことを御談申すのであります、圖の如くこの一心には、心眞如門と心生滅門の二義あつて、心眞如門は平等門、心生滅門は差別門、眞如平等は絶對界、生滅差別は相待界となつて居ります、佛教終局の目的は即ち心生滅門より心眞如門に入るのであつて、相待界と絶對界と融合した處が即ち佛境界と申すのであります、非常に難解しい言葉ばかりですが大切な處でありますから能くこゝを聞き分けて置いて下さい、この相待有限より絶對無限に入るのが宗教總體の目的であつて、これが宗教といふことの意義であります、相待といふことは、二物對待して並ぶことで、是非といひ善惡といひ、取捨憎愛正邪曲直可否眞偽等相待すること、吾々衆生界の有様をいふのであります、絶對といふのは、並ぶものゝない無限のことであつて、即ち佛であります、相待の衆生が絶對の佛と一致鎔融するのは何物の働きてあるかと言へば、即ち心の働きてあります、

相待と絶對との融合

善といふも心、惡といふも心、大も小も長も短も、方といひ圓といひ、美といひ醜といひ、何物といへども心を離れて別にあるものではないとせぬ、試みに皆様に問うて見ませうか、皆様如何です、此世の中で一番大いなる物は何でせう、また一番小さい物は何でせう、御答は出來ますまい、此世の中で一番美しいものは何でせう、また一番醜穢しいものは何でせう、分りますまい、たゞこれよりはこれが大きい、これよりはこれが小さい、これよりはこれが美である、これよりはこれが醜であるなどと比較的に定めるくらゐのもので、確に何が世の中で一番大いなる物とか美なるものとかと定めることは出來るものではないとせぬ、話が籠々入つて來ますが、今相待門と絶對門の融合といふ宗教もさうです、矢張これは心の上の産物であつて、心を離れて宗教といふものはありませぬ、さうすれば心から宗教が産れるには、如何なる次第順序を経て成立するものであるかと申しますれば、先づその心なるものから取り調べて見ねばなりません、この心の作用を心理學者は分拆して

宗教は心の産物



智情意の三として居ります、智といふのは識別研究する心の作用のこと、情とは惜しい愆しい可愛い憎いとか、泣くとか恐れるとかの心の作用、意とは果斷遂行分別などの作用をいふたもので、例せばこゝに美しい花があるとすれば、この花は何の花で色は何色であると見て美しいと識別したのは智であつて、急に之れが折りたくなつて自分の案頭にも挿むて見たいと思ふのは情の作用、またその花を折らずに見て遊べ又來る春は何を眺めんとか何とかと言つて果斷をするのは意の作用であります、この通り心に三方面がありますから、宗教が心から起るものとすれば、三通りの起り方がなければなりません、ぬそれを分けて申しますれば

智的宗教

第一智力から起る宗教心は如何なるものかと云へば、智は判別する心の作用でありますから、疑を起すのが本になるのです、その有様は、仰いて天を見れば天は高く、俯して地を見れば地は廣く、日月星辰、森羅萬象、事事物物悉く不可思議千萬て疑が起つて居るのです、雨が降れば、雨は何の爲めに降

情的宗教心

るのであらう、風が吹けば、風は何の爲めに吹くのであらう、水は何の目的あつて流れるのか、山は何故に聳ゆるのか、草が生えた、木が枯れた、これ等は皆疑の種となる、人の生れる、人は何事を爲すがために生れたのであらう、人が死ぬ、人は死んで何處へ行くのであらう、この通りに疑を起せば、宇宙間の事々物々が悉く分らぬことゝなります、この時結局人生と宇宙の關係は如何なるものであるかといふ問題が起つて來ます、これが即ち智より起る宗教心と申すものであります

次に、情から起る宗教心と申すのは、情とは前に申しました通り、喜怒哀樂等の心の作用のことですが、これから起る宗教心といふのは、恐懼の心即ち恐ろしいといふのが本になります、凡そ世の中で恐ろしいといふものの親玉は何でせう、死ぬことほど恐ろしいものはありますまい、然るに吾吾は一旦生れて來た以上は、何うしても死ぬとだけは定つて居るのです、たとひ朝には紅顔あつて世路に樂むといへども、夕には白骨となつて郊原に朽ちねばなら



意的宗教心

ず、昨日までは人の死を吊ひし身も、今日は早や野邊の煙と登り化野の露と消え行かねばならぬ世の有様である、そこで誰れでも、我身の如何にも弱いもの不慥千萬なるもので、生滅無常なることを自覺して來ます、そして何か慥かなるもの常住不變なるものに便りたいといふ心が起つて來ます、そこで常住不變なるものを求めて煩悶する時、無量壽如來の如き、死ぬることのない慥かなる常住不變の對象物を得て満足することが出来るのです、これが情から起る宗教心と申すものであります

次に意志から生ずる宗教心といふのは、望みといふものが本となるのであるがこの望みは際限のないもので、満足するといふことは容易なことではありませぬ、精神上の慾望も、形體上の慾望も、とても満足することの出来るものではありませぬ、この身體にしてもさうでせう、力は猛獸には及ばず飛ぶことは鳥に泳ぐことは魚に、見ることは夜分に不自由なのは狗や猫にも及ばず、またこの現在の世界も考へて見れば不足千萬なるものです、吹かしたく

三方面に安  
慰を與ふ

もないのに風が吹く、降らしたくもないのに雨が降る瓦礫は碌々として居る汚穢物は道路に横つて居る、何れにしても此世界は理想的のものでない、到底此現在の境遇では満足は出来ない、そこで、此世の外に一層美妙なる、一層愉快なる世界はあるまいかといふ考へが起つて來るこれが天國を理想すると申すので、何處かによい國はないであらうか楽しみな土地は見えぬであらうかと思つて居ると、七寶莊嚴の極樂世界水鳥樹林念佛念法の御淨土が見えて來る、これが意志から起る宗教心と云ふのであります

この通り宗教といふものは心から生れるもので、その心に智情意の三方面があるとして、宗教心の起り方を分けて申しますれば右の通りであつて、この三方面に安慰を與へ満足を與へるのが宗教であると云ふことが出來ます、して見ますれば、冷かなる智一方で哲理に合ふとか合はぬとかとのみいふのも間違である、また恐怖の情につけ込んで妖怪變化の不思議談のみするのも間違である、牢乎として抜くべからざる意志の上に立て、智と情とに適當なる



調和をつけて行かねばなりません

### 通佛教根本義(下)

この智と情との三が各々目的とする所のものは、智は眞を目的とします、眞とは偽の反對です、情の目的は美であつて、美は醜の反對です、意の目的は善であつて、善とは惡の反對です、この通り心には智情意の三方面があつてその三つの目的とする所のものは眞善美の三つでありますがこの眞善美も、眞の極點に至れば眞の眞とすべきものはなく、善も善の極點に達すれば善の善とすべきものなく、美も美の極點を言へば美の美とすべきものもありません、この眞善美は極點に至れば、偽惡醜の反對であるところてなく、全く眞善美とも名のつけやうはないのであります

この處が絶対無限といふので、御互佛法を信するもの、方から申しますれば即ち佛であります、眞に對して偽であるとか、善に對して惡であるとか、

眞善美

心生滅門  
に入り  
心眞如門

美に對して醜であるとか、或は悲喜とか苦樂とか迷悟とか憎愛とかと二物相待に渡るのが御互衆生の境界であります、この相待有限の衆生が絶対無限の佛と一致融合するのが、即ち心生滅門より心眞如門に入るのであつて佛教終局的の目的と申すのであります、一度この眞如門に入り即ち佛の境界となつて大悟徹底の眼を開いて見たならば、山を見れば山の突兀として聳ゆる姿は清淨身と現れ、水を見れば水の潺湲として流るゝ音は廣長舌と響き、黃鸝は啼々として法華實相の聲を弄し、柳枝は垂々として觀音微妙の相を染め、大地有情も同時に成道し、草木國土も悉皆成佛となるのであります、それであるから眞如界と申しても、別に奇妙不思議の世界のことではありませぬ、この境界に至れば一切法は悉く眞如の現れたのです、そのことは●大乘起信論の文にも「當ニ知ルヘシ、一切ノ法ハ説ク可ラズ、念ズ可ラズ、故ニ眞如ト名ク」とか、また「此眞如ノ體ハ遺ル可キ有ルコト無シ、一切ノ法悉ク皆眞ナルヲ以テノ故ニ、亦立ス可キ無シ、一切ノ法皆同ク如ナルヲ以テノ故ニ」



とありまして、眞如の眼より見れば、宇宙間の事々物々は一として眞如より顯れたる萬法ならざるものはないのです、歩を進むれば近遠にあらざる、觸向對面菩提場、擧手投足涅槃城とも申すべきもの、他力門ていふ所の有漏の穢身はかはらねど心は淨土にすみあそぶと申されたのもこゝであります、して見ますれば、この世の中は厭ふべきものなく、喜ぶべきものでもなく、淨でもなく、穢でもなく、それ等は悉く向ふの境にあるのではなくて、皆自身の心で相待にわたるのです、美といひ醜といふてもさうです、茲に一人の美人が居るとしても、普通世間の人には美人と見えても、出世の道人には不淨の觀境と見え、鳥が見れば恐れて高く飛び去り、魚が見れば恐れて深く淵に沈み、また猛獸であつたらば餌食にでもしたいと思ふてせう、シテ見れば美も醜も客觀にあるのではなくして見る者の心にあるのです、淨穢というてもさうです◎昔新羅の元曉大師が行脚をして居られた時、撥草瞻風、身には一臺の破笠と一本の柱杖をたよりに、師を尋ね道を訪うて、はるく唐の國ま

新羅の元曉大師

て行かうとせられた時或る日のこと行き暮したる旅の空、宿るに家なき荒村の夕、詮方なくも唯有る卵塔場て一夜を明かす氣になり、襖子を卸して墓と墓との間に靜かに坐禪せられました、折しもあたりは眞の闇、二更三更と聞け行く頃、何しろ六月炎天に一日歩いたものですから喉が渴いてたまらない何か飲むものはあるまいかと頻りに彼處此處を摸索りますと、何か圓い器に一杯の水がある、これ天の賜と手に掬して飲みますと、實に何とも言へぬよい味があるので充分に飲んで眠につきまして、明る朝になつて昨夜の水はと側を見れば、开は如何に圓い器にあつた水は、觸體の中に雨水が溜つて子牙が満ちて居た、それを見て忽ち嘔吐を催して今將に吐かんとする時、豁然省悟して、心生ずれば種々の法生じ心滅すれば種々の法滅す如來大師豈に我を欺かんやと言つて、淨穢不二の妙理を悟徹せられたことがあります、これに由りて觀まして、淨とか穢とかといふものは、皆この心にあるので、心生ずれば種々の法が生じ心滅すれば種々の法は滅するものであります、たゞ



に形に顯れたる物質ばかりではなく、内といひ外といひ右とか左とかといふことまでも心を離れて別にあるものではないのです◎宋の蔡君謨といふ人は非常に鬚髯の立派に生えた人で、其頃評判の鬚男であつたのですが、或時皇帝の内宴に侍つて御酒を頂いて居りましたが、その時、皇帝が蔡君謨に向つて其方の鬚髯は實に立派なものであるが、夜分寝る時はそれを蒲團の内に入れて居るか又は外に出して寝るかと御問ひになると、ハイと言つたばかりで何とも答へが出来ない、何時も寝る時その鬚髯を蒲團の内に入れて居るか外に出して居るかソナナことを思ふたことがないのですから、唐突の御問ひには何と返辭の仕様もなく、何れ今夜試しまして御答へ申上げますと言つて御前を下り、その夜になつて、ヨシ今夜こそ試して見やうと思ひ、先づ寝た處でさてこの鬚髯は平生夜着の内であつたか外であつたかと、それを握つて夜着の外へ出して眠らうとするに何だか氣持が悪くて眠ることが出来ない、ハテナ内であつたかと又夜着の内へ入れてもまた何だか氣に懸つて眠られぬ、

苦樂は心より生ず

イヤ矢張外であつたかと出して見ても穩かならず、また内へまた外へ、とうと通宵寝ることが出来なかつたといふことがあります、平生何とも思はぬときは内も外もないのです、それに一度如何であらうと思ふ心が起れば、直に内と外との差別を生ずるのであります、また、平生路を歩くのに、今右の足を前へ出したから今度は左の足を前へ今度は右今度は左とソナナことを考へながら歩いて居るものはないでせう右といひ左といふのも心の上に差別をつけるのではありませぬか嬉しいといふのも悲しいといふのも、樂みも苦みも皆心であるといふことは申すまでもないことです、花を見て面白いとか月を眺めて悲しいとかといふのも、花や月そのものが面白くも悲しくもあるのではない、爛漫たる花を見ても心に樂みがあれば飲めや騒げやて浮世三分五厘に面白がつて居るであらうけれども、心に悲みのある人の目には何うてせう昨年の今頃は母親と與に面白くこの花を眺めたに、今年は母親は黄泉へ旅立なされて獨淋しくこの花を見ることかと、坐るに涙を流す子も居るてせう、



また、彼の一輪の月を眺めても、何の不足もないものは月見酒ぐらゐを飲んで楽しんで居ても、今滿洲の曠野に露宿して居る兵士が寒風に吹かれたがら、空に牙え渡る月を眺めたならば如何なる感じが起るでせうか、國に残した妻や子や同じこの月を眺めて居るであらうかと、遙かに東の空を望んで恩愛の涙に咽んで居るかも知れませぬ、この通り、月や花には楽しみも苦みもないので、これを見る人の心にあるといふことは明かなることではありませぬか、かくの如く苦とか樂とか、淨とか穢とか、憎愛取捨是非曲直等、總て二物待對に渡るものは心の作用であります、今まで可愛いかつたものが急に憎くなつたり、善いと思つたことが悪くなつたり、「うつりゆく始めもはしも白雲のあやしきものは心なりけり」で、實にあてにならぬものです、この當てにならぬ相待有限の御互衆生が生死輪廻の海原に浮きつ沈みつして居るのを、絶對無限の彼岸に渡すものは宗教の船であります◎これを譬へられた話がある渺々溶々として際限のない大洋に、數百人の客を乗せたる船が澎湃たる怒濤

を蹴て進行して居りましたが、過つて暗礁に乗り上げたものですから、忽ち海水は瀧の如くに流れ、込み、船は傾いて段々と一方から沈みかけました、そこで救助を喚ぶ爲めに煙花を打ち揚げ、乗客は悉く高い處に集つて一生懸命に救ひを待つて居りました、その時數艘の救助船は來ましたけれども、何分風は荒く波は怒つて居るので、餘りその難破船の近くまで行けば、同じやうに岩に乗り上げて諸共に船は破れてしまふものですから、非常に苦しむて居りましたが、一計を案じ出したのです、それは救助船には悉く重い碇を卸して一處に止めて置いて、其中の一船だけ碇の綱を伸べて難破船の丁度下まで行くやうにしておいて、波にゆられて難破船の下まで行つた時、その上に一生懸命に集つて居る客が素早く救助船へ飛び下る、その間にまた波にゆられて一方の止めてある救助船まで來ると客はその止まつて居る方へ乗り移るまた波にゆられて難破船の下まで行けば上の客が飛び下る、そこで止めてある方へ移る、この通り幾回となく往復してその遭難の客を救ひ上げたのに、



たゞ一人の意思の弱い婦人が残つて、救助船に飛び乗ることの恐ろしさに、幾回救助船がその下まで来ても飛び下ることが出来ぬ、最後になつて今度飛び下りねば最早救ひに来ぬといはれて、まだ躊躇して居たが、イヨ／＼救助船が波にゆられてその下を離れかけた時飛んだものであるから、船と岩との間に落ちて遂に無惨の最後を遂げたといふことがあります、これは何を譬へられたのであるかといへば、吾々御互が現在この生死輪廻の大海原に浮きつ沈みつ世渡りする中に、貪慾の風を起して瞋恚の波を擧げ、愚癡迷盲の暗礁に乗り上げて、七顛八倒の苦みをして居る處に、佛陀大悲の救ひの船を浮べて御助け下さるものを、狐疑躊躇して居つて、早くこの大悲の御船に乗り移らねば、冥より冥に入り、苦より苦に沈んで、浮ぶ瀬のなき苦みを受けるぞといふことを言ふたものであります、皆様速にこの貪瞋癡の三毒を退治して相待有限の苦海を渡り、絶對無限の彼岸に到り、凡聖同體淨穢不二の大圓覺界に安住致されねばなりません、この信念が決定したならば、佛前に禮拜し

て、至心正念に懺悔の文を唱へ、身口意の三業を清淨にし、南無歸依佛、南無歸依法、南無歸依僧と三寶の御名を唱へ奉る時は、その冥加を被りこの功德力によりて眞如三昧に入り●正信無常觀の御文にある通り我身は生死無常の浮世に在りといへども、心は高く眞如の都に遊びて、煩惱の塵垢に汚されず、氣は卑く世間の衢に交るも、本覺の靈光を味まさず顯には世人の爲めに愛護せられて、諸願速に成就し、幽には佛神の爲に冥助せられて諸難漸く除き、自利々他圓滿具足して、芽出度二世安樂の素懷を遂るものと、深く信じて安心決定致さるゝが肝要であります

今席は何分通佛教根本義の御談でありましたから、非常に言葉が難解しかつたでせうが、次の座からはよく分るやうに御談申します



第一座

觀念無常(上)

今席からイヨく通佛教の信仰箇條に入つて御話申します、信仰箇條は、前に圖解を御覽に入れて置きました通り、安心と起行の二つに分れて、安心門の方に三信三行四檀の十箇條、起行門の方に四恩六徳の十箇條と、總じて二十箇條に分れて居りますが、只今はその安心門の一番最初の觀念無常の一箇條について一座の御話を致します

無常とは申しますれば、若い方々は直に御定まりのやうに、悲哀的ぢやとか厭世觀ぢやとか難解しい言葉で攻撃せられます、スルト佛敎家の方でも、それを辨解する積りで、イヤ無常とは進取的であるとか、または進化を意味することであるとか、何とか彼とか種々な難解しい語で辨解しやうとするやうですが、攻撃するのも間違ひであるし、またそれを辨解するにも及びますまい論より證據、何時の世何れの場所に、生れた者が死な、いことがありました

無常は事實なり

存覚法語

か、如何に忠勇無雙といはれた楠正成でも、絶世の英雄と稱賛へられたる豊臣秀吉でも、歴山王は豪傑なりといへども、那破拿翁は英雄なりといへども、早や魂魄は何れにか歸して骨は空しく墓邊に朽ちて居るてはありませぬか●存覚法語に「老少不定ノサカヒナレバサカリナル人モオホクユク、生者必滅ノコトワリナレバ老ヌル人ハマシテトマラズ、鳥邊山ノケフリ峰ニモノボリフモトニモタツ、ワレモイツカソノカズニイラン、化野ノツユ朝ニモキエタニモ落ツ、タレトテモヨソニヤハ思フベキ」と仰せられたのは、能くも人間社會の當相を言ひ顯はされたものであります、理屈も議論も何もない、皆様試みに胸に手をおいて靜かに思つて御覽なさい、幼い時に奥に小學校へ通つて居た者や、また一緒に山へ遊んで木にのぼつたり、河へ行つて魚を釣つて居た友達は如何です、或は早時に黄泉の客となつて今は早やその姓名さへ忘れて居るものもありませう、或は何時もか故郷を立ち去つてその行術さへ分らぬやうになつた者もありませうまた、我が一家親類から、町内村裡の誰れ



彼れまでの身の上を考へて御覽なさい、昨日までは酒に酔つて勢よく鬼でも挫ぐ程の大言を吐いて居た人も今日は早や空く野邊の煙となり、去年までは大厦高樓に榮華を極めて居た者も今年には裏店住居で食ふや食はずに日を送つて居る人もありませう悲觀的ぢやとか、厭世觀ぢやなどと言つて笑つては居られますまい、たゞそれを他人事と思つて何の感じもないのは、死ぬことだけは己れに經驗がないからです、こればかりは試験の出来ないものですか、御互はたゞ茫然として居るのであります、十返舎一九の如き人でさへ死ぬ時には、「これまでは他人の事ぢやと思ふたにおれが死ぬとはコイツたまらんと辭世を咏まれたさうですが、コンナ工合に洒落脱瀧に逝けるものなれば、それもよいけれども、とてもさうは行きますまい、他人の葬式には貰ぐらゐ吹かして雑談しながら、野邊送りをして居るであられるけれども、マッサカ自分の最愛なる妻か兒にても死別した時は何うてせう、更に間近くこれが自分の身に及んだならば如何てせう、身は重き病魔に襲はれて、見る影もなく寒れ

他人の死に  
野邊送り

自ら生死岸  
頭に立つ時

果て、親屬故舊は重き枕邊を取り纏ひ、一穗孤燈の影暗く、湯水も最早喉に通らず、醫師からは手を離されて迎も此世に望みはないと言ひ渡された時、この生死岸頭に身を置いた時、その人の心には何物を求めるてありませうか、金であらうか、位であらうか、學問であらうか、理窟であらうか、理窟よりも、學問よりも、位よりも、金よりも、更に大いなる何物かを求めて居るであらう、その求めるものは金や位どころではない、これが實にこの病人の心、靈が血に叫ぶ悲鳴であります、この時に及んでは金も位も學問も理窟も、更にこの苦悶を慰めることは出来ませう、そのことを●「正信無常觀」の中に『無常の殺鬼念々に到り、露の命の旦夕に迫るに及びては國王大臣の威力もこれを支ふる能はず、名醫良藥の効能もこれを維ぐに由なし、平生巧みに巧みし分別も已に竭き、兩の眼漸く瞑み一の息永く絶えぬれば、親族故舊寄集ひ、歎き悔むといへども、更にその甲斐あるべからず』と申されてあります、この斷末魔に臨んでは世の中の權利とか義務とかの總てを打ち棄て、



有限世界の  
無常

と我身の當てにならぬこと、この世の無常變遷なることが感ぜられて、何物か確かなるもの、常住不變なるものに皈依りたいといふ心がムラ／＼と起つてまゐるのであります、この當てにならぬ有限相待の御互が無限絶對の大安心の境界に至り、無量無邊の壽命を得て、永生の愍みに逢ふには、平生に有限世界の無常なることを觀じて居らねば斷末魔に臨んで周章狼狽煩悶苦痛、妻を呼び子を招き、恩愛の情緒に擲められて、迷に迷を重ね冥きより冥きに入て浮ぶ瀬のなき苦みを受けねばなりません、平生にこの覺悟がなく宗教の心もなく信仰の念もなく、大言壯語して澄まし切つて居るのは、丁度あの榮螺が我身の程も省みずして、すまして居つた話と同じことでありますその話は、◎或時、鯛や鱸や種々の魚が、榮螺に向つて言ふに、君は實に結構な生れ合せだ、堅固な殻と丈夫な蓋があつて何か危急な場合には、蓋さへ覆へば矢も楯も及ぶことではない實に幸福ではないかと褒めると、榮螺は高慢らしい顔で、さうだ君達に比べるとまづ結構といはねばならぬ、この通

我身知らずの榮螺

り堅固な家と丈夫な戸締とあるから、ヌワと言ふ時は戸さへ締むれば何物が來ても何りすることも出來るものではないと、自慢最中に上の方からザブツと非常な音がしたので、榮螺は急に蓋を締めた、その間に鯛や鱸は素早く逃げてしまつたのを榮螺は知らないで、獨り考へ込んで居る、おれはこの通り確かな家と戸があるから大丈夫であるが、今音したのは漁夫が網を投げたのであらうが、可愛さうに鯛や鱸等は網で引き上げられたのであらうと、自分こそ網にかゝつて鯛や鱸等はとツクに逃げてしまつたのも知らないで獨り得意がつて居る、餘程久しくして最早大丈夫であらうと思つて、ニユーツと蓋を推し開けると、何ぞ圖らん身は早や魚市の棚の上に載せられて、榮螺十大文といふ札が立つてあつたといふ話があります、今御互が、宗教の心もなく信仰の念もなく、おれは堅固なる家もあり丈夫なる戸締りもあり、倉庫もあり土藏もあり、外には田畑も相當にある、誰れが來ても彼れが來ても矢も楯もつけることが出來ないと、澄まし切つて居ても、無常の網を投げかけ



られたならば、家があつても倉庫があつても迎も禦ぐことも出来ず、妻子眷族も如何ともすることは出来ない、自ら造り作したる業力に引かれてたゞ獨り黄泉に赴かねばなりません、こゝが大切な處です、金銭で安心を得やうとしても、幾等貯へてもこれで最早充分であるといふ時はないでせう、爵位で安心を得やうとすれば如何に人臣を極めてもこれで大安心といふ時はありません、ヨシまたそれ等で安心を得たとしても、金銭で安心を得たものは金銭がなくなれば忽ち失望するでせう、爵位で安心を得たるものは爵位がなくなれば落膽しないでは居られません、それゆゑに、金銭も爵位も、家倉土藏も、天地萬物は悉く無常變遷なるもの、我身は元より朝あつて夕が計られず、吐く息があつて入る息も知れぬといふことを平生に觀念して、すなはち生死の大問題を決定し、無限絶對の大安心の境界に至つて置いて、大いに進んで金銭を儲けもし、また爵位をも求め、更に進んで社會の事業にも力を盡さねばなりません、それゆゑ、佛教で安心の道を説くには一番最初に無常變

遷の理を觀念することを教へるのであります

◎昔、御釋迦様の御弟子の一人が、或城下を托鉢して廻つて居られましたか、或大名の邸の正門からツカ〜と這入りまして、唐突に玄關から上つて、大廣間の真中でゴロリと臥込んで、高軒をかい傍若無人の振舞をせられました、スルト居合はした家扶家令等が口八釜敷罵つて居る、處で奥の間から主人なる、大名様が出て来て、コラ〜御出家御前は何といふ無禮な行爲をするのです、この館は旅宿ではありませぬぞ、何故他人の座敷で唐突に横臥のですか、旅宿ではありませぬと怒りますと、その出家は起き直り、だしぬけにその大名に向つて妙な問答をせられます、貴殿は當家の御主人ですか、大名がそうですと答へると、は、そうかそれでは貴殿がこの家の主人となるその前は誰が主人であつた、それは申すまでもない拙者の親父です、そうかその祖父の前は誰が主人であつた、それは申すまでもなく拙者の祖父です、そうかその祖父の前は誰が主人であつたのか、執拗い御問ひです、ねそれとも言ふまでもなく拙者の曾祖父が主人であつたのです、そうかその曾祖父の前は



誰が主人であつたのかと段々と問ひつめて、十數代も前まで尋ねて主人が閉口するまで責めて置いて、ソコテ坐を改め襟を端して徐かに説法せられますには、そうであらうその通り、幾代前かその數も知れぬ程前の祖先から、この家の主人ぢやなどと申しても、僅か五十年か六十年の間この家に寝たり起きたりして居ては、何處へか逝き、貴殿の祖父も父もその通り、五十年か六十年の間この家に寝たり起きたりして居て、何處へか逝つてしまつたてはなにか、貴殿もまたその通りこの家の主人ぢやと言つて威張つて居ても、矢張り今暫くすると何處へか逝かねばなるまいたゞこの家に寝たり起きたりして居るばかりではないか、貴殿はこの家は旅宿ではないと言はれたが、たゞ寢起きをするばかりのこの家は旅宿でないとは言はれますまい、たゞにこの家が旅宿であるばかりではない、この世は大なる旅宿である、生死輪廻の海原に浮きつ沈みつして居る御互は暫くこの旅宿に起臥をして居りながら、無常變遷の道理を辨へずして、ただ茫然と月日を送つて居て、宗教の心もなく、信仰の念もなく、斷末魔に臨んで煩悶苦痛天に訴へ地に叫び悔い悲しむやう

天地は萬物  
の逆は光陰  
の通

なることがあつてはならぬぞと、千言萬語に例を引いて説法せられたことがあります、この通り、人は一番に無常の道理を觀念してかゝらねば宗教心の起るものではないませぬ、それであるから、祖師様は、無常を觀するの心即ち是れ菩提道心の親きなりと仰せられてあります、佛様や祖師様も初發心は無常を觀せられたのでこれが佛教に入るの門であります

觀念無常(下)

古來、佛様や祖師様方は申すまでもなく、偉人傑士といはれたほどの御方は、皆この有爲轉變の世間に居て、苦樂昇沈極りなき境遇に逢ひながら有限世界の無常なることを觀念し、千古萬古動かすことの出來ぬ眞理を見出して安住不動如須彌山と、その常住不變の眞理の上に腰を据ゑて、一切衆生を濟度せられたものであります、教主釋迦牟尼世尊が發心出家遊ばされたのも、その動機は矢張無常を觀せられたのが本で、御幼少の時王家の宮中では、物



世尊の出家

質的の供給は何一つとして不足なき御身分、七珍萬寶は前に堆く、食前方丈  
 まだその上に絶世の美人に取り捲かれ、美を盡し善を極めて居られたのであ  
 りますけれども、これ等總ての物質的の供給は一として、太子の御意に適は  
 ず、太子は常に何物かを求めて止む時はなかつたので、その時門を出られ  
 て、老人の憐れな姿や、病人の痛ましき様や、死人の悲しむべき状態を御覽  
 遊ばされ、深くこゝに意を留めて、シミムと世の無常なる道理を觀ぜられ  
 て、種々なる考へが胸に浮んだのです、是日已過。命亦隨滅。如少水魚斯有  
 何樂とか、我觀是身。極為虛偽。要當成辨。如來身とか、無量無邊の感が起つ  
 て、相對世界は斯くも無常變遷にして當てにならぬものであるのに、億兆の  
 人々はこの夢の如く幻に似たる身を、何時までも生存ふべきものゝやうに思  
 ひ煩惱妄執に纏れて、終日竟夜たゞ目前の名利に齷齪して、生涯惡業を造り  
 に作つて居るが、未來はこの業力に牽れて惡趣の街に迷うであらう、如何に  
 もしてこの苦患を脱し、この惑むべき多くの人々を苦みより救ひたいと思召

見眞大師の  
出家

承陽大師の  
出家

して、一天萬乘の王位を弊履を脱ぎ棄てるやうに打ち棄て給ひ、最愛なる妻  
 子までも見捨て、宏大壯麗なる王宮を通れ出て、人跡絶えたる檀特山に攀  
 ぢ登り、山海の珍味嘉肴を召し上つた御口に、木の實や草の芽て飢を支へ、  
 冬暖く夏は冷しき羅衣輕裘を纏はれし玉體に、樹の皮や蓮の葉て寒を禦ぎ、  
 限りなき難行苦行遊ばされて、遂に無上正等正覺を成ぜられたのであります  
 その發心出家の本はとりもなほさず無常を觀念遊ばされたものではありませぬ  
 か、其後の祖師様方も、正しく發心せられたのは皆この無常を觀ぜられたの  
 であります、我朝て見眞大師の如く高貴の御家に御生れ遊ばされた方が、物  
 質的の供給は元より何不足もなき御身分でありながら、御父君を喪はれた時  
 世の無常を觀じて御出家遊ばされ、また、承陽大師も此の通り、久我内大臣  
 の御家に生れ、藤原攝政關白の養子と定つて、榮華を極め得らるゝ御身を持  
 ちながら、七歳の時御母君を失ひ、その骸骨の前に立てられたる線香の煙が  
 絶えては登り絶えては登る様を見て、有爲轉變の世の中は是の如きものであ



る、高位高官に登るも須臾の夢も同じこと、何卒して常住不變の眞理を發見したいと思召して御出家遊ばされたのであります、是くの如く古來大宗教家といはれた御方々は、皆世の無常變遷なる道理を觀じて、自ら此の境遇に支配せられず、大安心の立脚地を得てこの無常變遷の世を支配して行かれたのであります、たゞ御互は前にも申しました通り、自分の身に親しく生死無常を経験したことがないから、他人事のやうに思つてウカ／＼として居るので、それを他人事のやうに思ふのは餘りに遠方に見るからです、丁度、御互が無常に支配せられて居るのは、人が汽車に乗つてその汽車に移されて居るやうなものであります、その汽車でもこれを他人事に遠方から見たならば餘り迅速いものではありません、高い山の絶頂から遙かに隔つて、紆餘蜿蜒として走つて居る汽車を眺めますれば、實にその速力は鈍く遅々として居るやうに見えるでせう、決して之の迅速いことの感ぜられるものではありません、ぬこれに遠方から他人事に見るからであります、若し自身が正しくその汽車

死は經驗な

に乗つて窓を推して外を眺めたならば、山轉じ谷移り目が舞ふ程に迅速いことが知れるのです、その迅速いことが知れたならば、停車場へ着ない内に目的を定めねば、着いて後にまだ自分の行くべき方向に迷ふやうなことはなりませぬ、今御互は無常迅速の汽車に乗つて、轉々々々念々々々、死出の停車場に向つて進行して居るではありませんか、悲哀的でも厭世觀でもない何と言つても彼と言つても狂げること通れることも出来ぬ事實ではありませんか、これ程明瞭なる事實を無視して、無常の事變に支配せられて居る現世界の總ての物に執着して、何時までも變らぬものと思ひ、當てになるものと考へて居るから、眞理に外れた行爲を仕出かすことがあるのです度々申すやうですが皆様よく／＼考へて御覽なさい、現世界の物事に何一つとして變らぬもの當てになるものはありますまい、大海の水は盡きてもアノ家の財産はなくなくなるまいといはれて居たほどの大家でも今は跡形もなく毀れた練堀が空しく時雨にうたれて居るのもあるでせう、昔は飛ぶ鳥も落すといふ程の勢



自心の無常

て乘輿に乗つて、往來の人を叱咤しながら通つた人が、今は跨躡して車夫となり、前の輿舁を載せて氣息奄々と大道を走つて居るものもあるてせう、たゞに社會の狀態が無常變遷であるばかりではありますまい、人の心も矢張無常變遷なるもので、當てになるものではありませぬ、親の心も子に知れず、姉の心も妹には分らず、また、設ひ太陽が西から昇つても變らないとまで、堅く二世を契つて居ても、七人の子があつても妻に心を許すなといふ諺がある處を考へて見るとなかく、女子の心も當てにはならず、油斷の出来ないものかも知れませぬ、意中の美人理想の妻君が變心したたが爲めに、失望落膽の極人生は不可解と叫んで遂に華嚴の瀧に身を投じて飛ぶ泡沫と共に果敢なく消え果てた青年もあります、こゝが大切な處です、この時眞實に無常を觀じて宗教に入りさへずれば救はれるのであるけれども、實に危険な處で、この青年の如きは己れが身命を獻げて、絶對の愛を注いで居た、その當てにして居た、ものが當てにならなかつたが爲めに、人生の矛盾なる様人心の不懺

なることを感じホト／＼世が味氣なく思はれて人生を見捨てたのです、その人生を見捨てた時が大事なので、その時信仰の橋を渡つて宗教の岸につきさへすれば救はれるのでありますけれども、この青年は惜しいことには信仰の橋に踏み込まないで、人生の岸から絶望の淵に落ちたのです、かゝる場合に眞實無常を觀じて佛道に入つた因縁は、男女の別と事情の相違はありますけれども、昔の佛御前でありませう

◎昔、平清盛が全盛を極めた時、祇王と祇女の二人を侍女として居りました、この二人が少しく色の衰へかけた時、絶世の美人なる佛御前が目に留つて、それを寵愛して祇王祇女の二人を見捨て、しまはれました、スルトこの二人は世を味氣なく思ひ、人の心の當てにならぬことを感じて

佛も本は凡夫なり、我等も悟れば佛なり、三因佛性具しながら隔つる心のうたてさよと今様を咏んで發心し、緑の黒髪を剃り落して草の庵に閉ぢ籠り、心靜かに念佛三昧の身となられました、佛御前はこの二人の



成行きを見て、熟ら思ふには、今こそ自分は容色が美麗であるから公の寵愛を一身に集めて、榮華を極めて居るけれども、關守なき月日にやがてこの色が衰へたならば、また公の眼には外に新しく増す花が咲くであらう、その増す花を手折られたならば、その時は自分も今の祇王祇女と同じく、秋の扇子とふり棄てられるに相違ない、有爲轉變の世の中に、一時幻の如き榮華に迷ひの夢を見て何かせん

萌えづるも枯るゝも同じ野邊の草、何時かは秋に逢はて果つべき

と發心し、祇王祇女と同じ庵に念佛三昧の身となられたことがあります、この通り、眞實宗教に入るには無常を觀念するのが正しき信仰の門であります併しながら、無常を觀するのは徒らに世を厭ひ身を捨てるのではなく、前に申し置きましたる通り、有限世界の無常なることを觀じてこそ、無限絶對の大安心の境界に至り、無量無邊の壽命を得て、永生の慰みに逢ふことが出来るのであります、それゆゑ『正信無常觀』には抑も佛陀の説かせたまひし正信

無常の觀念は、たゞ徒に世を厭へ身を疎せよとの教にあらず、この無常の世に處して、眞實に無常の理を覺れよと宣ひしなり、已に無常の理を覺りしならば、無常固より怖るゝに足らず、無常已に怖るゝに足らざるときは、其心や常住不變なり、其心常住不變なれば身も亦常住不變なり』と申されてあります、この身と心と共に常住不變なる境界に至れば、即ち絶對無限の大安心が得られたので、この大安心の地に腰を据ゑて世に處し生を渡るのが、眞箇に佛教信者の本分と申すものであります

## 第二座

### 三世因果(上)

今席は、三世因果の箇條に就いて御談申す順序であります、この因果の道理は佛様が拵へられたものでもなく、また神様が作つたといふ譯でもなく宇宙間にありとあらゆる事々物々は、悉く皆この因果律の支配を受けぬものはあ

因果は佛の  
所造に非ず



りませぬ、御互が如何に権利ぢやとか、義務ぢやとかと云つて、自分勝手な理屈を並べて居ても、天地間の原則たる因果の支配を免れることは出来るものではありませぬ、それがたゞこの現在の一世だけに就いての因果即ち順現業なれば誰にでも分りますけれども、過去世の因が現在世に果を結ぶとか現在世の因が未來世に現れるとかと云ふ順次業や、また二世三世乃至百世萬世を隔つて果を感じる順後業などに至つては、到底御互が普通の智慧分別を以て、測り知ることは出来ませぬ、それゆゑ、佛様は「過去ノ因ヲ知ラント欲セバ、現在ノ果ヲ見ヨ、未來ノ果ヲ知ラント欲セバ現在ノ因ヲ見ヨ」と仰せられてありますから、吾々は推理の力に因りて善惡因果の空しからぬことを信ずるのであります

凡そ、生きて居る者で、既往を懐ふたり將來を考へたりすることの出来るものは、餘程高等の動物であります、極々下等の動物で、蚯蚓や蛙や蜻蜓や蟬のやうなものが、マサカ既往や將來のことを考へは致しますまい、おれは何

處から生れたので、此世に於ける義務責任は如何なるものである、死んだ後の靈魂の歸着は如何であるかなどと、蚯蚓や蛙がそんなことを想うて居る筈はありますまい、それが少しく進んで、蟻ぐらゐの動物になると、夏の間には冬のことを考へ、ナニマサカ考へるのではあるまい、生々發育の原則で無意識に働いて居るのかは知らないが、兎に角將來のことを考へたもの、やうに夏の内には冬の食物を貯へることに孜々として務めて居ります、段々進んだ動物になればなるほど、既往や將來に思ひを廻らすやうになつて、昨日撃たれた人に恐れて逃げる猫もあれば、三年前に受けた恩人に尾をふる犬もあり、半哺の孝を盡す鳥や、三枝の禮を知れる鳩ツツト進んで人間になると、併しまたその人間でも、昔の昔のおほ昔、原始時代なんぞといふ時の、極々野蠻の人々は決して既往や將來のことを考へたものではありませぬ、身には樹の皮や草の葉を編み合はした物を着て都合のよい窟室に枯草を敷いて、起臥閑漫、空腹になれば其時々に、柿でも栗でも、木の根でも草の葉でも、自然



文明人

に生じた物を取つて飢を支へて居たので、明日のことも明後日のことも思はないのであるから、來月や來年のことまで考へる筈はありません、それがおいしく進化して開明になるに随つて、今日の内に明日のことまで想ひ、明後日明後々日、來月來々月、來年來々年と段々將來のことに考へが及んで來るので、人の智慧が進むに従つて既往のことや將來のことを想ふやうになるのは發達の順序なので皆様は愛子を御育てになつた御方は知つて居られるので、兒童は二歳や三歳で、まだ漸く覺束ない呂律で、言葉を使ひ出した時、昨日や明日のことを親に向つて尋問は致しますまい、それがおいしく智慧が發達して四歳五歳となれば、既往とか將來とかの考へがついて來るからその兒童が、慈母さん今幾つ寝たら御正月でせう、嚴父さんいま幾日すれば御盆が來るのですかと尋ね出すもので、その今幾つ寐たらとか、今幾日経てばとかいふのは、とりもなをさず兒童の智慧が發達した將來といふ考へが起つたからであります、總躰に人間社會の發達は皆その通りです、前に申

兒童智慧の發達に發す

したやうに、野蠻未開の人々には、明日といふ觀念もなかつたのであるけれども、智慧が進歩するに随つて、明日明後日、來年來々年と將來のことに思ひが及ぶのです、この順序を推して行けば、今日の内に來月のことに思ひ及ぶものは、明日だけのことを考へるものよりは智慧が進んで居るといはねばなりません、來月のことを考へるのが智慧があるとすれば、今日の内に來年のことを考へる人は一層智慧が勝れて居るといはねばならず、それよりは十年もさきのことを考へる人は猶一層文明人といはねばならぬ、それよりは百年、それよりは千年、千年よりは萬年、萬年よりは十萬年と次第に將來のことを考へるのが文明人であるとすれば、更に百萬年千萬年よりも猶ほさきの此世のさきの未來世のことを考へる人であるならば、文明人中の文明人といはねばならぬ道理であります、併し未來と申せば矢張未來で、文字の如く未だ來らないのであるから、ハッキリと知れる筈はないのです、それで「未來ノ果ヲ知ラント欲セバ現在ノ因ヲ見ヨ」と示されてある通り、推理の力に



來年の曆は  
今年中に作  
製す

因つて知るのであります、御互凡夫の身を以て己れの智慧が淺くて知ることが出來ないからと言つて、未來世がないなぞと疑ふとは以ての外と申さねばなりません、皆様まあ能く考へて御覽なさい、早い話があつた曆です、曆には一年中のことは、月の大小から、氣候の替り、彼岸も祭日も、また何月何日何時何十分何十何秒には日蝕があるとか、月蝕があるとか、餘さず漏さず悉く記載してあります、その曆は今年の曆は今年になつて出來たのでもなく來年の曆は來年になつて作るのではありますまい、來年の曆は今年の中に作り、今年の曆は昨年の内に出來て居たのは疑ひはないでせう、その昨年の内に今年の日蝕や月蝕の月日を明かに、指したのが、分秒までも違はないのは何故でせう、推理の上から言へば數理上少しも不思議はないのです、今年の内には來年の曆を作ることが出來るばかりではない、推理の上から言へば十年でも百年でも、何百億萬年先の曆でも作ることは出來るのであります、それを數理に達せない人が不思議に思つて、百萬年も先の日蝕や月蝕が知れ

木戸孝九先  
生の未來談

るものかそれは虚偽ぢやなぞと言ふ者があるならば、その言ふものが自分の愚を白狀するので、笑ふべきこととせう、現在目前のこととす、喜ぶべからざることを喜び、悲むべからざることを悲み、樂みも怒りも皆其當を失ふたことばかりして居る、御互のやうな智慮の淺いものが未來のことがどうして歴然と容易に知れるものか、それが知れないからというて、佛様が三世通貫の御眼を以て洞觀遊ばされた上、説かせ給ひたる道理を何とか彼とか信ぜられぬとか、疑はしいとかといふのは身の程を知らぬ愚人と申さねばなりません、古から智慧の勝れた人々は、假令未來が分らぬとしても、未來の有無に對する考へが面白い處があります、昔の話を翻案したのはあるのですが◎加藤咄堂氏から聞いたのに、未來の有無に就て木戸孝九先生が甘く昔話を應用せられたことがあるさうです、木戸先生の養子に正次郎といふ御方があります、或時先生の留守に正次郎君の知友の宮城時助といふ人が訪問せられます、正次郎君と互に舊を談じ新を話して菓子を食べ茶を飲んで居られ



たが、談が不圖未來有無のことに移ると、大いに兩人の意見が違ひ、正次郎君は未來はないものといひ、宮城君は有るといひ、負けず劣らず互に論戦を開いて、覺えず高聲に論鋒を交へて居る時、木戸先生が外から歸つて玄關へ來ると、内の一間で盛に議論して居る聲が聞える、僕は有ると思ふ、イヤ僕は無いと思ふ、ハテ妙なことを論じて居るなと思ひ乍ら先生がツカ〜とその間へ行かれると、兩人共は驚いた、コレハ〜御歸宅も氣が附かず出迎へも致しませぬで甚だ失禮で、イヤそれはよいが全躰貴公等は何事を喋々と議論して居るのか、恐れ入ります實はこれ〜の次第、未來の有無に就いて宮城君と意見を異にしまして、私は未來は無いと言ひ宮城君は有ると申しますので、覺えず聲が高くなりました、ウンさうかそれは面白い問題ぢや、それでは正次郎御前は未來は如何しても斷じて無いものであると言ふのか、イヤさう御詰責になりましたは聊か閉口致します、私もまだ未來へは行つたことありませんから確に無いと斷言は出來兼ねますが、まあ無いだらうと思ひ

ます、さうかそれではダラウか、それでは宮城君尊公は未來は如何しても斷じてあるものであると言ふのかイヤそれには私も大いに閉口致します、實は私もまだ未來へ行つたことはありませんから、確に有るとも言ひ兼ねますがまあ有るだらうと思ひますので、さうか尊公も有るダラウか、ヨシソコデ貴公達に問ひたいことがある、今五六里も隔つた處へ行かうと思ひ立ち外へ出かけて空模様を見ると何だか雲行きが變だ、サテ今日は雨が降るダラウか、降らぬダラウかと言ふ時は如何だ、降るとして仕度をするか、また降らないものと極めて出るか、サヤウです何れとも分らぬ時は、降らないものと極めて出て若し降られては大變ですから、如何ダラウと言ふ時には降るものとして仕度を調べて出懸けます、さうかそれで知れるではないか、今未來の有無もさうである、有るダラウか無いダラウかと言ふ時には、無いだらうと極めて何の仕度もしないで居て、若し有つた時には大變であらう、何れとも分らぬならば、未來は有るだらうと定めて置いて、この現在世で仕度を調べてお



かねばならぬではないかと言つて、懇々とこの兩人を誡められたことがありますが、この通りヨシ分らぬとしても、智慧の勝れた人は未來のことに就いての考へが面白いではありませんか、それで御互が此世を終つて後の未來世のことはかりでなく、假令この現在世だけのことにしても、たゞその時々、今日主義の日送りをして居たのでは、如何にも單調な無意味な窮屈なもので、八十年生きても九十年生きても、また百年の壽命を保つたとしても醉生夢死で蚯蚓や蛙の生きて居るのと擇ぶ所はないでせう、人は常に過去現在未來を通じて、即ち三世通貫の生活をして居らねば、人間としての義務責任を盡すことも出来るものではありません、況や未來の安心などの得られる道理はないでせう、これから三世通貫の生活より因果業報の御談を致します

## 三世因果 (下)

三世通貫の生活

三世通貫の生活をせねばならぬなどと申せば、何だか非常に難解しいことの

やうに聞えるでせうが、何も過去世と未來世とを繋ぎ合はして生きて居るといふのでもなく、また過去世には何處の御宮の椽の下の鼯鼠であつたとか、未來生では小夜の中山の蛇身鳥になりはせぬかとか、ソナナことを考へて生活して居らねばならぬといふのでもありません、たゞこの現在世の生活だけについて言ふても、其時々の外に何の考へもなく、今日主義で日暮をして居たのでは、如何にも無意味で、單調で、窮屈千萬なものであるから、過現未を通じて既往のことを懐ふたり將來のことを考へて生活せねば、九十年生きても百年活へても、人としての壽命は如何にも短命であると申さねばなりません、併し、既往のことを懐ふと申したからとて昨日食つた御馳走のことと幾等思つても腹の膨れるものでもなく、また將來のことを考へると申しても、來年儲ける金を當てにしても今年の用にたつものでもありません、將來のこと、申しても矢鱈無性に先きへくと手廻しをしても、事によつては却て失敗することがあるものです◎或る家に使はれて居る下婢が非常に能く氣

輕躁なる下



の附く者で、朝でも早く起きて、臺所では朝餉の仕度をしながら、庭も箒けば板場も拭く、その内に主人の眼が醒めて、便所に行つて居ればその間に、洗面の水から齒磨きの用意をする、洗面中に座敷の掃除して煙草盆の仕度、神棚に燈明から佛壇に線香を立てる何から何まで先きへくと如何にも氣が利くので、主人も非常に氣に入り奥様も度々譽めて、御前のやうに何事もさきへくと能く氣をつけて手廻しをして呉れると、妾の世話をやくことがなくて結構ぢやと言つて居られたさうです、所が或時主人公が風邪に襲はれて少し頭痛がするやうだと言つて居られると、下婢の姿が見えない、ハテ何所へ行つたか知らんと思つて居ると、氣を利かした積りて下婢は得意顔で御醫者を迎へて歸つて來た氣を利かせるも程がある命令るのも待たないで醫師を迎へるとは餘りに早や過ぎるとは思つたけれども、仕方がないから主人も其日は診察を受けられたさうです、その後主人の病氣も少しく重くなつて枕につかねばならぬやうになつた、スルト下婢は止せばよいのにまた命令も待た

ないで何所へか出て行つた、程經て歸つて來たから、御前は何所へ行つて居たかと問ふと、下婢は得意顔で、ハイ私は檀那様の御容體が如何も御悪いやうですから御醫者の所へ行きましたさう申しては何ですが檀那のあの御様子では逆も御健全におなり遊ばすことは覺束ないと存じまして、序に桶屋へ行つて棺桶を誂へて葬儀社へもと存じましたが、遅くなりまますから御寺へだけちよつと寄つて枕經のことを御依頼申して歸りましたと言つたさうです、將來のことを考へるといふても程のあるもので、コンナ馬鹿らしい無意味なことを言ふのではありません、今私が現在世に於て三世通貫の生活をするに申すのは、多くの過去を持つて居る老人達は、過去のことを懐ひ、遼遠なる未來を持つて居る青年者は、希望の光明を未來に認めて、共に大いに進んで意味ある生活をせねばならぬと申すのであります、過去の歴史を繰り返すのは最早其人の末路ぢやなどといひますけれども、さうばかりはまゐりませぬ、西哲も過去を追懐するは樂みの源泉なりと言ふて居られますが、實にさうて

過去の追懐  
は樂みの源泉  
なり



す、今堂々と廟堂の椅子にのさばりかやつて虎鬚を撫しながら、天下を経綸して居る豪傑でも、フット過去に想ひを廻らして、幼い時古癪で慈愛深き父母の家から、破れ鞆を肩にかけて小學校へ通つて居た時のことを思ひ出したならばどうでせう、そこには如何にも無邪氣で何とも言へない樂みが浮ぶてありませう、老人方はさうでせう、過ぎ去つた前のことに想ひを廻らせば、そこに無限の樂みが浮びは致しませぬか、妙なことを申すやうですが、老人方が過去のことを想うて一番樂しいのは初戀が成就して婚禮した時のことぢやと言ひますが、實際さうでせうか、誰か、婚禮の時咏んだといふ歌に「嬉しさをむかしは袖につゝみけり今宵は身にも餘りぬるかな」とありますが、互に思ひ思はれて居る中にも、まだ時機が到らねば、靈犀一點の通ずるあつて満面紅を潮するといふ時でも、笑顔を袖につゝみ嬉しさを忍んで居たけれども、機縁が熟してイヨク今夜は三々九度の杯を擧げるといふ時は、嬉しさが身にも餘つて口にも言へないこととせう、兎に角多くの過去を持つて居

初戀の成就

空想と現實  
適當の調和

られる老人方は既往の歴史を追懷せられる處に、無限の樂みが湧き出るに相違ありません、また、それと反對に多くの未來を持つて居られる青年の方々は、將來の希望の光明をみとめて、清く正しく高く大いなる理想を持たねばなりません、と申したからとて、無暗に捕雲捉風の氣焔ばかり吹きちらすことではありませぬ、それでは空想と申すものです、この空想が現實と適當の調和をするので、意味ある理想といふことが出来るのであります、この通り既往を懷ひ將來を考へて見ますと、こゝに自然と人生の眞意義が了解てまゐります、昨日の因は今日の果を結び、今日の因は明日の果となり、去年の因を知らんと欲せば今年の果を見よ、來年の果を知らんと欲せば今年の因を見よ、この過現未の三を通じて生活してこそ、清く正しく、高く遠く、意味あり光明ある日送りが出来るので、これを私は三世通貫の生活と申したのであります、併し、これ等は現在世一生の上だけで、その意味が狭いやうです、御互はたゞ現在世一生の間に起る出來事を解決して行くだけでは



所詮安心立命することは出来ずまい、抑も此世に生れて来たのは如何なる因縁でせう、また生れて貧富貴賤智愚利鈍等の差別があるのは如何なる道理に由るのでせうか、成程経済的智能の有無によりて貧富の差が出来るとか、攝生上の不注意によりて強弱天壽の別がつくとかいふ理屈もあるやうですが、それでは始めから貴顯の家に生れたり、貧賤の家に生れたりするのは如何なる因縁であるかといふことになれば、何と答へのしやうもない止むなく偶然であるとも言はなければなりません、ソナ薄弱な答へて御互はこの一大事が決定することが出来ませうか、逆もそれでは安心決定することは覺束ないであります、それで佛教には詳かに三世因果業報相續の道理を御説き遊ばされてあります、前世に造り置いたる善悪業がソツクリ其儘現在今生の身心に顯はれたのであるから、また現在今生の身心で造り作したる善悪業はソツクリ其儘未來の身心に現はれることは疑ひのないことで、かりそめにも物の道理を聞き分けるほどの智識ある者ならば、誰れにても呑み込み

今世の身心は過去善悪業の影

のつく筈でありますけれども、闡提と申して因果を撥無して信ぜない者は、到底了解させることは出来ませぬ、佛様もそれを御慨歎き遊ばされて●涅槃經の中に「一闡提ハ因果ヲ信セズ、慚愧アルコトナク、業報ヲ信セズ、現在及ビ未來世ヲ見ズ、善友ニ親カズ、諸佛所説ノ教誡ニ隨ハズ、是ノ如クノ人ヲ一闡提ト名ク、諸佛世尊ノ治スル能ハザル所ナリ、何ヲ以テノ故ニ、世ノ死屍ハ醫ノ治スル能ハザルガ如シ」と御示しになつてあります、この因果業報の道理は、過去や未來を信ぜざる邪見の輩には了解する筈はありませぬ、皆様静かに胸に手をおいて思うて御覽なさい、この善因善果惡因惡果の理法は虚偽であると思はれますか、眞實であると思はれますか、無法な仕向けをして他人を苦しめ他人を泣かせ、他人に血を吐かせる程の苦痛を與へても、その泣いて苦しむ人の恨みは誰れも受けなくてそのまま消えてしまふものでありませうか、面白く愉快に食を求めて遊んで居る動物をムザムザと撃ち殺して、その動物が死ぬる斷末魔の無念の怨みはそのまゝ消えてなくなるもので



ありませうか、庭前の小池に焼々として打ち揃ひ愉快らしく浮んで水を飲むて居る金魚が、人の姿を見ると直に深く沈むのは何故でせう、命が惜しいからでせう、またあの叢で唧々と面白さうに吟じて居る虫が人の足音を聞くと直に聲を止めるのは何故でせう、矢張命が惜いからです、如何に小虫畜類ても己れの生命を惜まぬ者はありませぬ、それを無惨に殺しては如何に思うて見ても、何の報いもないものとは思はれますまい、それと反對に死に瀕して最早生命のなくなる時救はれたならば其悦びは如何でせう、其悦びもまたそのまゝに消えてなくなるものとは思はれませぬ、善因善果惡因惡果の道理は疑ひも理屈もない、靜かに胸に手を置いて考へて見たならば、よもや虚偽とは思はれますまい、この因果業報が三世に渡つて申すから過去世や未來世のことを知ることの出来ぬ御互は何とか彼とか理屈をつけますけれども、自分に知ることが出来ぬからと言つて幽冥界のことを疑ふといふのは、前にも申した通り愚の至りてあります◎皆様は現に本年三月四日、奉天附近の會戰

に雄々しき働きをして敵弾に中り、遂に名譽の戦死を遂げられたる歩兵少尉杉本秀造君のことは御聞きでせう、君は兵庫東出町一丁目杉本秀三郎氏の長男で、昨三十七年七月に召集せられて入營し、同十月に出征の途に上り、諸所に轉戦して少なからざる勳功のある人ですが、至つて孝行の心が篤く且つ友誼の深い方でありまして、戦地から弟の英三郎といふ方に宛てられた手紙を讀みましても如何にも温厚で而も自信の深い人といふことが知れます、その手紙は「孝行が第一ですよ、余は 天皇陛下の股肱の臣なり、滿洲の野に於て 陛下の爲め満身の勇を奮うて、此の名譽なる懲露の軍に盡さん」と認めてあります、君が戦死せられたことは、去る三月七日に第〇聯隊補充大隊からの電報で知れたので、その時同家の人々、殊に君の夫人きく子は豫て期したること、言ひながら、其驚きは一方ならず、何時まで悲んでもそれであるべきにあらねば、曾てより奥の間に飾つてあつた寫眞に香華を備へ、毎日その寫眞に手を合せては「貴郎は何して敵の彈丸に中りました、何處を撃た



れたのです」と生ける人に物言ふやうに歎いて居りましたが、同十日即ち少尉が戦死の日から一週日に當る日の午前八時過ぎ、例ものやうにきく子は寫眞の前に端坐し合掌して、先きの語を繰り返し涙の顔を振り上げて、不圖寫眞の表を眺めると、不思議や少尉の軍服を着たる寫眞の三つ目の釦のところから、血汐が浸み出て、タラ〜と帯革の邊りまで流れて居るから、きく子は大いに驚き且つ怪しみよく〜見れば全く血汐のやうであるから、今更涙も禁めあへず、家内の人々に語り一同寫眞について仔細に見れば血汐に相違ないやうであるが、念の爲め船大工町の開業醫齋藤氏を招いて鑑定を乞ふた處、全く血痕に相違ないといふことで、聯隊區からも區員が出張して實驗したと申すことですが、何と不思議なことではありませぬか、これは昔話といふのではない、現に征露戦争の眞最中、本年三月のことではありませぬか、幽冥界のことは凡夫の御互に知れないからと言つて、三世因果業報相續の道理を疑ふことは出来ませぬ、前の席に觀念無常の箇條で、眞實に無常の理を

本年は三十  
八年

覺つたならば、無常は固より怖るゝに足らず、無常已に怖るゝに足らざる時は、身も心も常住不變であるといふ道理を演べて置きましたか、この身心共に常住不變なる上に、善因善果惡因惡果の理は歴然として違はぬものであります、そのことを●「正信無常觀」には「身と心と共に常住不變なるが故に、善惡因果の理に由りて、過去現在未來の三世に亘り、三界苦樂の身を受けて、生々世々相續不斷なることを疑はず」と申されてあります、御互は推理の力に由りて、三世因果の理法が了解たならば、今生に造り作る所の善惡の業因によりて、未來に苦樂の果を感じるものであるといふことを確信して今日の行業を慎んでまゐらねばなりません

### 第三座

#### 十界依正 (上)

澄み濁る流れの末はかはれとも 心一つの法のみなもと



業報相續の  
時間空間

前座では、三世因果の箇條に就いて御話申して置きましたが、今席は十界依正の御話を致します。この三世といひ十界と申すことは、當時の語ていへば時間空間とでもいへば能く分るかも知れませぬ、業報相續の道理を時間的に解釋しますれば三世因果といひ、また是れを空間的に説明すれば十界依正と申すのであります。十界とか依正とかといふ語は、皆様は餘り聞き馴れない語ですから、御分りにならない方もありませうから、少しく話が複雑になりませうけれども、ザット一通りだけ名目を擧げて説明致します。この十界は大別すれば、迷の境界と悟の境界との二つで、迷の方を六凡といひ、悟の方を四聖といふのです。六凡とは地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、四聖とは聲聞、緣覺、菩薩、佛、これを合せて十界と申すのであります。この中間界が定位となりまして、心一つから其行ひに善惡邪正の別が出来て、上つては天上より菩薩にも佛にも至り、下つては修羅界より餓鬼にも地獄にも落ちるので、現在人間界で造り作す所の因業に依つて種々の果報を受けねばな

正報  
依報

まりせぬ、その果報に二種があつて、依報正報といふのです。正報とは正しく受くる所の果報で、人間で言はゞ四肢五官の具つて居るこの身軀、畜生なれば羽毛や鱗介や利爪や鋭牙などを持つて居まゝの身軀のこと、つまり十界の有情を正報といふのです。依報とは正報なる十界有情が依り止る處で、天地國土衣食住などをいふのであるから、依報が器物ならば正報は品物と言つたやうな道理で、その依報は必ず正報に相應してこれを感じるのです。王公貴人は金殿玉樓に居り、鄙夫野人は茅檐竹床に住し、獸は山を走り、魚は水に泳ぐといふやうな有様で、依報と正報とは必ず相應して感受るのであります。斯様な次第で依報正報が十通りに現れるのを十界と申すので、この十界は理の十界とか事の十界とか種々に説明も出来ませぬけれども、結局は前に申したやうに心一つから現れ出るので、一念悟れば四聖の境界に上り、一念迷へば六凡の境界に降るので、少し複雑になりますけれども一應順を逐うて御話申ませう。第一に地獄界と申すのは、二萬由旬も大地の底に八寒八熱

第一地獄界



の地獄があると説いてあります、皆様まあ責めてその名目丈けても聞いて御覽なさい、八寒地獄とは、一に頰部陀、二に尼刺部陀、三に頰嘶吒、四に臘々婆、五に虚々婆、六に嗚鉢羅、七に鉢特摩、八に摩訶鉢特摩、まるで陳文漢でせう、それから、八熱地獄とは、一に等活地獄、二に黑繩地獄、三に衆合地獄四に號叫地獄、五に大叫地獄、六に炎熱地獄、七に極熱地獄、八に無間地獄、この通りの八大地獄が順々に重つて居て、罪の輕重に随つて落て行くのです、一番のドン底が無間地獄で、こゝは大悪人の生れる地獄で、常に炎々と燃え上る火の中に無量の苦みを受け、口からは熱鐵を注ぎ込まれ、鼻には何とも言へぬ惡臭を嗅ぎ、五躰は爛れ、骨肉は搥け、毒蛇に咬まれ獄卒に責められ、山に押され、石に打たれ、劔につらぬかれ、熱湯に煮られ、無量無邊の大苦惱を受け、一日に入萬四千の生死があると申すこととてす、聞いたくても身の毛が卓立つてはありませぬか、これは何も遠き地の底にあるばかりではありますまい、皆様の心一つでそのまゝ地獄の苦みを受けます

ぞ、そのことを葛城慈雲尊者は「人間ノ中ニテモ、一切凡夫ノ有様トシテ僅ニ心ニ適セザルコトアレバ、父母三寶等ニモ瞋恚ノ心ヲ起シテ、罵詈毀謗スル者アリ、甚シキハ之ヲ毆打シ之ヲ殺害ス、此心直ニ是レ地獄ナリ、此心アレバ其形コレニ從フ、故ニ銅炎猛火ヲ出現シ來ル」と申されてあります、御互が無明長夜の夢覺めずして、瞋恚の火は胸を焦し、煩惱の焰炎々として盛に燃え上り、世を怨み人を憎み、終日竟夜やすき心がなき時は、此身此處地獄の苦みを受けて居るのであります、これが即ち自業自得で、無量壽經に「善惡報應じ、禍福相承け、身自ら之に當る誰れも代る者なし」と御示し遊ばされたのはこの道理です、よくよく慎まねばなりません

第二餓鬼界

第二の餓鬼界は、閻魔王が棟梁で、無量の種類があります、有財餓鬼、無財餓鬼、有威徳餓鬼、無威徳餓鬼などと言つて、非常に多くの差別があるので、相應の食料はあつても自ら慳んで食ふことの出来ないのは有財餓鬼、百千歳を經ても食を得ず飢に苦むのは無財餓鬼、威徳勢力があつて餘の諸の鬼



神を驅り使ひ、通力自在なのは有威徳餓鬼、又福德が薄くて常に大力の鬼神に驅り使はれて居るのを無威徳餓鬼と申します、また天正理論には九種の餓鬼を説き、正法念經には三十六種の餓鬼を列べ、いろ／＼に區別はありますけれども、これもまた、鐵圍山の谷間や閻浮提の地の底ばかりを探さないでも、御互と惜しい慾しいといふ慳貪の心が止まなければその心が直に餓鬼界であります、それを慈雲尊者は●「一類アリ、朝ヨリ暮ニ至ルマデ、只管自己ノ資具ハ之ヲ惜ミ貯ヘ、他人ノ財物ハ之ヲ得ンコトヲ貪リ、一針一草トモ人ニ惠ムコトナシ、此心直ニ是レ餓鬼ナリ、心ノ在ル處ハ形コレニ從フ、乃チ餓鬼界ノ生ヲ感ズルナリ」と申されてあります、御互に此世ながらの餓鬼界には落ちたくないではありませぬか

第三畜生界

第三の畜生界は、これは皆様にも能く御分りになつて居るでせう、禽獸虫魚は悉く畜生です、鳥は多く虚空及び樹木に棲み、獸は大抵山や野に居り魚は水の中に、虫の居處は定りはありませぬ、形には大小あり、壽命には長短あり、委しく演べることは出来ませぬ、が併し此畜生界も鳥や獸ばかりをいふのではないので、慈雲尊者は●人間ノ中ニモ至ツテ愚痴ナル者アリ、父母師長に恭敬禮事スルコトヲモ知ラズ、世間ノ是非善惡ヲモ辨マヘズ、男女大小ノ禮儀ヲモ知ラザル者アリ、此心直ニ是レ畜生ナリ、此心アレバ必ズ之ニ相應セシ形アリ、之ヲ畜生界トイフ」と御示しになつて居られます、よく世間で「コン畜生」といひますが、上の御示しのやうに、長上の人に事へることも知らず、道理の善惡も辨へず、禮儀作法も知らぬやうなものはコン畜生といはれても仕方はない、眞箇にそれは畜生界の人と言はねばなりません

第四修羅界

第四の修羅界は、海岸や海底や又は深山などに住處があつて、女子は容貌が美麗て天女の如く、男子は身形が鄙醜うて、常に害心を懷き、合戦闘争の事のみを思つて、怖れ畏るゝ心のやむ時がないと説いてありますが、世間でも修羅界といふことは随分つかふ語で、戦争場のことを修羅場といふてせう、骨の山血潮の海の修羅場裏とか、轉戦奮闘阿修羅王の怒るが如くなぞとはよ



く言ひますが、如何にもその通りで、日輝上人の佛法大意抄にも●「人アリ、仁義五常ヲ形ニ行ヒ、種々ノ善根ヲ修行スト雖モ、唯他ニ勝ランコトヲ欲シ嫉妬、見慢、自大、高擧ノ心ツヨキ者此道ニ落ツルナリ」と御示しになつて居られますが、御互が無暗に高慢邪慢で、何も彼も他に勝つことばかりをつとめて居れば、何時もく心の中に嗔恚の焰の燃えぬ時はないでせう、皆様まあ論より證據です、他の怒つて居る時の顔を見られたならば御分りになるでせう、どうですあの怒つた顔は、ソツクリ鬼ではありませぬか、怒つて眞赤になつたのは赤鬼です、眞青になつたのは青鬼です、他ではない皆様自身で怒つた時の心は如何です、よもや圓滿なる平和の人心はありますまい、怒つた後心が靜に和いた時、考へて見ると變なもので、前に怒つた時のことは夢中でせう、そこで、その怒つた時は全く修羅界の人ではありませぬか、皆これが高慢邪見の心から起るのです、「さがるほど人の見上げる藤の花」、慎むべきは高慢の心であります

第五の人間界は、これは前に御話申した通り十界の中の定位で、この人間の心一つから十界を造り出すので、私の此座で御話致すのもこの人間界のことを申すのが主意でありますから、これは後廻しとして置いて、序に他界のことから順に説明しませう

第六の天上界は、須彌山説に依りますれば、須彌山の半腹に四天王天があつて其絶頂に忉利天あり、こゝに三十三天あつて帝釋天が其中の王となつて居り、その上に須彌を離れて虚空の中に夜摩天あり、その上に兜率天あり、その上に化樂天、その上が他化自在天と、この六つを欲界の六天といひます、此中で四天王天と忉利天とはまた須彌の地にあるので地居天といひ、その餘の四天を空居天といふのです、この欲界の六天を過ぎて遙か上に色界の十八天があつて、そのまた上に無色界の四天といふものがあります、この通り天上界の二十八天は、何も須彌山の上に重つて居るといふばかりではありませぬ、御互が執着心を離れて行く精神状態を示されたものです、先づ欲界の六



天だけに就いて申しましたも、この六天で男女の間に慾を行ずる状態を申しますれば、これには歌がありますか

四切利は形を交え夜摩は抱き兜執り樂笑み他化は眼で見ると言ひまして、四天王天と切利天では男女が互に形を交え合ひ、夜摩天では抱き合ひさへすれば濟み、兜率天になれば男女が手を握ればそれでよし化樂天では相逢うて互にニッコリ笑へば濟み、他化自在天ではたゞ男女がチヨツと見るだけで行することが出来ると言ふので、これは次第に上に行くに従つて肉慾を去つて精神的になる状態を明したものであります、この上が色界と無色界であつて、何時も三界といふのはこのことです、これだけの三界を出てしまへば、立派に迷の境界を離れて悟の境界に入ることが出来るのであります、處が三界を出離すると申しても別のことではない、三界は唯心の所造で、この心から作り出したのです、この心の迷の本たる貪瞋癡の三が三界を生み出したのであるから、貪欲は欲界、瞋恚は色界、愚癡は無色界に配

してあります、この貪瞋癡さへ棄てることが出来れば、そのまゝ三界出離の身の上となるのです  
これまでの地獄界から天上界までの六道は六凡と申して迷の境界であります  
これから悟の境界なる四聖の話を致しますから、前に御ことわりして置いた通り今席は少しく面倒ですけれども、今暫く御辛抱を願ひます

六凡は迷の境界

四聖は悟の境界

十界依正(下)

これまで御話申しましたのは、十界の中の迷の境界なる六凡のことでありましたが、今からは悟の境界なる四聖のことを御話申します、四聖とは前にも申して置きました通り、聲聞、緣覺、菩薩、佛の四つで、この中でも聲聞と緣覺とは小乗、菩薩と佛とは大乘、また聲聞に四念處四諦四果、緣覺に十二因緣、菩薩に六度、佛に三身などといふことになれば、非常に箇條が多くなつて、その中の一箇條だけの説明でも委細しく申せば、二席や三席で濟むも



のではありませぬ、それですから、とても今こゝで一々御話申して居る譯には  
まゐりませぬが、たとひ一々御話申したにしても、難解くもあるしまた皆様  
も到底それを記憶へて居られるものでもありませぬけれども、せめては因縁  
の爲めにその名目だけなりとも擧げますゆゑ、ホンの十分か十五分かの間  
ですから、辛抱して御聞き下さい

第七座開界

第七の聲聞界と申すのは、四念處の法を觀じ、四諦の道の修し、四果を悟る  
といふのですが、四念處とは一には身は不淨なりと觀ずと申して、衆生の身  
は眼からも、鼻からも、耳からも、口からも絶えず不淨のものが流れ出て、  
大小便は言ふまでもなく、全身悉く不淨を以て満たされて居るものを、之に  
惑りて煩惱を起し、五欲に耽り愚痴を起して、修行を怠つて佛の教に背いて  
この不淨の身に執着してはならぬと觀ずるのです、二には受は苦なりと觀ず  
といふて、眼耳鼻舌身の五根に色聲香味觸の五法を受けるのは樂みのやうに  
見えるけれどもその實は悉く苦の種であると觀ずるのです、三には心は無常

四念住

なりと觀ずと言ふて、出る息は入る息を待たず、歳たち月うつり、日かはり  
時馳せ、心は息に随つて念々無常なりと觀ずるのです、四には法は無我なり  
と觀ずといふて、我身を始め一切の法は、我といふて常一主宰の主人らしい  
ものはないといふのです、「ひき寄せて結べば柴の慮なり解くればもとの野原  
なりけり」たゞ暫く因縁によりて現れて居るだけのものであると觀ずるので  
す、この四つが四念處で、次の四諦とは、此世の中の有様は悉く苦である  
といふことを深く觀じて、三界六道を見たのが苦諦、この苦は煩惱が集め招  
いたものと觀念するのが集諦、涅槃の悟に入れば煩惱生死の苦を滅し盡して、  
安樂無爲の境界になるのが滅諦、この生死を離れる道は、戒を持ち定を修し  
慧を研く、この三學が涅槃を得るの道であると觀ずるのが道諦、この苦集滅  
道の四を四諦といふのであります、次の四果は、煩惱を斷じ生死の迷を離れ  
る順序を四通りに分けたので、一に須陀洹果、二に斯陀含果、三に阿那含果  
四に阿羅漢果、この四で結局阿羅漢果を得るのが聲聞界の目的であります

四諦



第八の緣覺界は、大體は聲聞界と同じこととありますが、悟を開く道具建てが違つて居るので、此界では十二因縁の觀法を修するのでありますがこの十二因縁を一々講釋して居る時間はありませんから、たゞその名目だけを申しますと、一に無明、二に行、三に識、四に名色、五に六入、六に觸、七に受、八に愛、九に取、十に有、十一に生、十二に老死、これだけの十二です。この中で初めの無明と行の二つは過去の煩惱の業、後の生と老死の二つは未來の苦、中の識名色六入觸受愛取有の八つは現在の苦と煩惱と業とであります、この十二が互に因となり縁となり、煩惱に依つて業を造り、業に依つて苦を受け、また苦に依つて煩惱を起すといふやうに、止む時なく展轉して、居るのを十二因縁と申すのであります、この十二の相生する道理を觀じて、十二因縁の起らぬ様に次第に滅して行くのが緣覺界の修行です、どうです皆様あまり分らぬことばかりで御退屈になつたてせうまあ暫く辛抱して名目だけでも聞いて貰ひたいものです

この聲聞と緣覺との二つは、正しく三界六道の迷の境界を離れて、悟の境界に入つたものには相違はありませんけれども、その悟がまだ淺劣であるから小乗といふ名が付き、またその志す所が自分の悟を開くだけのことで一切衆生を濟度するといふやうな利他の心がないのです、それゆゑ、佛様は二乗外道などと仰せられて、自分さへよければよい他人はどうでもかまはぬと言ふやうな根性を痛く呵責して、回心向大といふてその二乗の心を回らして利他の大乘に向はしめるやうにせられたのであります、佛法は慈悲を以て體とするので、自分が悟を開いた上は多くの人々を濟度せやうといふ心懸けにならねばなりません、まだくその願を起すといふ上は、自分が悟を開いた上どころではない、自未得度先度他といふて、自分はたとひ悟を得ないでも先づ他を濟度したいと願はねばならないのです、それゆゑ次に菩薩界を御説きになつたのであります

第九の菩薩界とは、四弘誓願を起し、六波羅密を行すると申すのであります



四弘誓願とは、一には衆生無邊誓願度、これは一切衆生の数は實に無量無邊であるけれども、必ず濟度して生死の苦を免れしめたいと誓ふのであります。二には煩惱無盡誓願斷、これは衆生の煩惱は數限りなく多けれど、誓つてこれを斷せしめやうと願ふのです。三には法門無量誓願學、これは衆生の得道すべき法門は無量なれども、必ず誓つて之を學び、一切衆生をして皆法門を得せしめたいと願ふのです。四には佛道無上誓願成、これは佛の道は上なき悟の法なれども、必ず衆生に悟らしめんと誓ふのであります。この四の大願を成就するが爲めに六波羅密を行するのであります。六波羅密のことは、後日この信仰箇條の中で一箇條を一座として御話申すことになつて居りますから、こゝでは畧して置きます。

四弘誓願

六度

第十佛界

第十の佛界、これは申すまでもなく悟の極つた境界で、何と説明の致しやうもありませんが、難解しい語で申せば、究竟不思議の境界を悟り、圓妙の三身を得て、三德秘密の涅槃に至り、常寂光の淨土に住すといふのであります。

三三三徳

けれども、圓妙の三身とか、三德秘密の涅槃などといふことを解釋致しますと、一日や二日に濟むものではありませんが、解釋は止めましてその名目だけを擧げますと、三身とは、法身、報身、應身の三つ、三德とは、法身、般若、解脱の三つです。この三は三にして一、一にして三、三一相即無礙圓妙の道理は甚深不可思議であります。兎に角吾々御互は相待有限の迷の境界を離れて、絶對無限の悟の境界なるこの佛界に到着するのが目的であります。前に迷の境界なる六道は人間の心から現れ出るといふことを委しく申して置きましたが、この悟の境界なる四聖もまた人間の心を離れたものでないことは申すまでもあります。要するに十界は人間界を定位として、御互の心一つで下つては修羅界にも地獄界にも落ち、上つては菩薩界にも佛境界にも至ることが出来るのであります。心一つから此世ながらの地獄界に落ちた話は、これは餘り古いことでありませぬから、皆様も或は新聞で御覽になつたことがあるかも知りませぬが、今こゝに十界法談の中の話借りて御話



申しますると◎陸前の仙臺に一人の石工があつて、夫婦の中に一人の男児を設け親子三人いと睦しく暮して居りましたが、思ふにまかせぬ世のならひでその子が八歳の時に妻は病氣に懸つて、始めはホンの風邪の心地であつたのが、次第にそれが重くなり、とうと枕も得上げぬ大患となりまして、飽きも飽かれもせぬ中を、無常の風は時を嫌はず、終に歸らぬ旅路に行きました、夫は疾痛惨怛、野邊の送りを濟ませても、其當分は目も泣きはらして居たけれども、それでは稼業も出來ず、殊に又た男の手一つでは小兒の世話もし兼ねるので、他の勧めに随ひ或る者の世話するまゝに後妻を娶りました、處が此女は所謂毒婦の性格とでもいふべきか、内心には夜叉の如き刃を含んで居りながら、外面には菩薩の如き粧ひをして、夫の居る時は先妻の遺児を可愛がりますけれども、夫が居らねば少しの事にも手厳しき責め折檻、あはれにも年齒もゆかぬ幼兒が繼母の手にかゝつて泣く泣く其日を送つて居りましたが、夫はさういふことは露知らず、表面のまめくしきを見てこよなきこ

と、思ひ、一切の家事を托して、自分は陸中の國へ家業の爲めに出稼ぎに行きました、さうすると彼の女は追々に本性をあらはして、ソロソロ姦夫を家に引き込んで、夜晝なしの不義姦樂、それにつけても邪魔になるのは小供であるから、無理非道の責め折檻は日にく甚しく、近處の者も見るに見兼ねてこれを宥めますと、繼母は妻が此子を折檻するのに他人の御世話にはなりませぬと取つてもつかぬ挨拶に、誰一人も宥める者もなくなると責め折檻は益々甚しく、或時姦夫を引き入れて傍若無人にふざけて居るのを小供が何か言ふたとやら言はぬとやらで立腹し、あらうことかあるまいことか、石臼を其子の頭の上へ冠せました、わづか八歳の幼兒の頭の上に大きな石臼を冠せたのですから、何條以てたまるべき、暫くもだえ苦んで居りましたが、呼吸はそのまゝ絶えて無惨の最後を遂げてしまいました、餘程苦しかつたと見え何卒かして石臼を取り除けやうとあせつたのか、手の指には爪が悉くはがれて血潮に染んで死んで居たさうです、死んだと聞いては流石に繼母も一旦は



驚きました、何しろ根が大膽不敵の毒婦ですから、これを病死の如くにつくろいまして本夫の許へも通知し、形の如くに葬りました、本夫はかゝる不義の女とは知りませぬから、非常に小兒の死を悲んで二ヶ月程経て歸り、小兒の墓詣りも済まし、女房に向つてうちとけて話をしながら、幸に五六十四の賃金を剩して歸つたから喜んで呉れと語りつゝ酒を呑んで居りますと、姦婦は金に目がくれて本夫に無理野理酒を侷め酔ひ倒れるを待つて、姦夫と謀し、合せ手拭を以て絞め殺し、其翌日家財道具を殘らず賣却なし、本夫の汗水流して儲けて持ち歸つた金までも奪ひ、姦夫と共に手を取り人のみちのく後に見て東京まで逃げてまゐりました、そして東京の下谷に住居をして居る中に、姦夫の胤を宿して生み落したのが女の子であるが、不思議なことには其子の左右の手には一つの爪もありませぬ、夫婦の者は小氣味悪く思ひました、子のことであるから仕方なく月日を送つて居ります中に、下谷の大火があつて全焼となり、大混雑の中に其子は迷ひ子となつて行衛が知れず

になりました、その後ば爲る事作す事が思ふに任せず、ますく貧苦に通つてその日くも送り兼ねる有様、かゝる貧苦の中にもまたもや一人の女子を産み落しました、これも矢張兩の手に一本の爪もありませぬ、かゝる不思議を見るにつけ無惨にも石臼を以て推し殺した子のこと、さては手拭で絞め殺したる本夫のことなど思ひ出して、痛く神經を痛めて居りましたが、搦て、加へて今日此頃のこの貧苦いと憂ひの増鏡、心にうつる罪業の消さんとすれど消えやらず、爪をはがれて泣きかなしみし、幼兒の顔はありくと心に映り、首を絞められて苦し本夫の姿は目を去らず、さすがの姦夫も日夜おのが心に責められて病の床にうち臥して、もはや枕も得上げずなりました、すると姦婦は不人情にもこれを振り棄て、女子を伴ひ東京を後に見て、東海道へとかゝりました、もとより旅費の用意もあらぬ身の詮方盡きて人の軒端に立つ乞食の身となり、川崎の宿で狂犬の爲めに咬みつかれ、それがもととなつて、とうと路傍の並木の下でのたれ死に、姦夫も東京でたゞ獨り苦



しいくと叫びながら、くるひ死にをしたといふこととあります如何てすか  
 皆様、何萬由旬の地の底に地獄を求めには及びませぬ、これ等は皆自分の  
 心から地獄の苦を招いたのではありますまいか、修羅でも餓鬼でも畜生でも  
 遠く他界をさがすには及びませぬ、皆自身の心から現れ出るものであること  
 を思はねばなりません、それであるから二萬由旬といふ里程は日本から測量  
 したのか亞米利加から測量したのか、一體那處を起點としていふたものかと  
 問ふ者があるならば、御互の心を出發點として測量したと申すの外はありま  
 せぬ、十萬億土の極樂世界と申してもさうである支那から十萬億里か英吉利  
 から十萬億里かと問へば、それも御互の心からであると答へるの外はありま  
 せぬ、御互が貪瞋痴の三毒を離れて佛の心なる慈悲を體し、一切衆生を濟度  
 しやうといふ心を引きさへすれば、そのまゝ菩薩界なり佛界の人となること  
 が出来るのであります、そこに至るには次の三行の箇條が必要ですから、そ  
 れは次の席から御話申します

十萬億土は  
心を出發點  
とす

#### 第四度

##### 至心懺悔(上)

信仰箇條の安心門の中で、三信の箇條に就ての御話だけは前座までに済みま  
 したから、これからは三行の箇條にうつるのであります、今席はその三行  
 の初めの至心懺悔に就て御話申します、前の觀念無常、三世因果、十界修正  
 の三箇條が充分に會得が出来て、確乎たる信仰が起きさへすれば、元より立  
 派な佛法信者であつて、外道でもなく邪解でもありません、併しながら、そ  
 れは理論の方のみですから、實際の方が缺けては眞箇の味は分るものではあ  
 りませぬ、丁度、水の酸素と水素と化合して出来て居ると言つたやうなもの  
 です、化學の原則からいへば少しも誤つては居りませぬ、理論はそれに違ひ  
 はないけれども、實際に水を飲まねば水の味を知ることの出来ぬやうなもの  
 であります、それと同じく前の三信の理論は如何に巧みに、無常變遷、朝あ

三信の理論



つて夕がはかられぬ解釋から、過現未の三世、因果業報の道理より、十界依正、上は佛界の頂より下は無間地獄のドン底までのことを、縦横自在に説き立てることは出来ましても、この三行の實際の方を修めねば眞實に佛道に入ることは出来ませぬ、眼だけあつて足がないのも同じことで、漫々として流るゝ水や突元として鋒ゆる山を見ても、足が實地に至ることが出来なくては何の所詮もありませぬ、皆様は最早三信の箇條で信仰の眼は御開きになつて居られるのですから、今からは三行の箇條で足の運びを進めて行かねばなりません

三行の實際

懺悔

この懺悔といふ語は、只今では普通の語となつて、何か罪を犯してそれを白状することを懺悔するといふてせう、基督教なども罪を悔い改めるといふことを懺悔するといふやうになりましたが、この文字の意味を一應解釋致しますと、懺悔の懺とは梵語即ち天竺の語であつて具には懺摩といふのですが支那の語に翻譯して悔過と申します、悔はクイル過はトガであるから、造り

作したる罪過を悔い改めることです、これを前懺後悔とも申しまして、あゝ悪るかつたと既往の罪過を悔い改めて善心に立歸り、是れから後は心を正しくして誓つて悪事はなさぬと深く將來を誠むるのを至心懺悔と申すのであります、斯様に懺悔の字義を解釋して、佛道に踐み入るには至心懺悔が初入の門であると申しますと、誰れでも直に思はれるてせう、吾々は青天白日の身である、竊盜も強盜も詐僞も殺人も犯した覚えはない仰いて天に慚ぢず、俯して地に愧ぢず、神様の前でも佛様の前でも懺悔せねばならぬ覚えは露塵ほどもないと、併し皆様、理屈も講釋も要りませぬ我慢や邪慢をふりすて、心靜かに思つて御覽なさい世の中の事々物々は自然天然に放任して置いて、罪を犯さないで居るてせうか、法爾と善い方にのみ趣いて居るてせうか、皆様の手にも足にも體にも自然に任して置けば垢塵がつきはしませぬか、机の上の塵は何時の間に積んだのでせう着て居る衣服も何時の間に垢づき破れ住んで居る家も自然に壁も落ち雨も漏り出す、それのみならず河の堤も次第



に毀れ、山の巔もおのづと潰えるてはありませぬか、御互が若しも、佛様とも祖師様とも思はず、道も教も辨へないて、法爾自然に放任して置いたならば善い方に傾けてせうか悪い方に趣けてせうか、如何に已惚の強い者でも、心静に越方のことに想ひを廻らしたならば、誰の前でも言へぬことのないことばかり行うては居りますまい、随分恥づかしいことを爲たことも思ふたこともあるてせう、貪瞋痴の三毒が本となつて、身と口と意の三つて、道ならぬことを行ふたり、言ふたり、思ふたことは數限りはありますまい、「水ノ滴リ微ナリト雖モ漸ク大器ニ滿ツ」とありますが、それ程とも思はずして、覺えず知らず造り作す罪過は恐ろしいものであります、或る博士が妙な勘定をせられたことがあります、それは皆様の宅で毎日御用ゐになる榎木です、あの榎木を毎日々々味噌も摺れば胡麻もする、豆も摺れば糊も摺るといふやうにゴリ／＼摺つて居りますが、摺る毎に必ず少しづつは減るに違ひないのです、その減るのを先づ一日に十家で一分づつ摺り減らすとして勘定する

三番 三樂

榎木の勘定

呼吸の力

と、これを日本全国の戸數に當て、見ると一日に八百丈づつ摺り減らして居る、それで榎木一本の長さを一尺四寸とすれば、五千七百拾四本の榎木が味噌汁の中へ摺り込まれて居る譯ですが、これを一ヶ年に勘定したならば大なる森林を汁にして啜つて居ることにはありませぬか、些少の物でも積つて見れば驚くべきものです、同じ博士が人の呼吸の力を研究して言はれたのに、一人の息で平均十匁の物を吹き飛ばすことが出来るとすれば、全國四千八百萬人の一呼の力で、一時に四億八千萬匁を吹き飛ばすことが出来る割合となる、若し一人の目方を平均十貫目としたならば、一時に四萬八千人を吹き飛ばすことが出来ます、この割合で勘定すると千回の呼吸では日本國民を一人も残らず吹き飛ばすことが出来る道理であります、この勢で行けば、元寇の時國民の精氣が天候を變じて神風を起し十萬餘人の敵兵を吹き飛ばしたくらゐではない、波羅的艦隊の四十隻や五十隻を吹き飛ばすのは何の雑作もないてはありませぬか、實に蟻の穴から千丈の堤も潰える道理で、少



人間の相場  
附け

しのことから如何なる大事を惹き起すか知れぬものです●「小罪ヲ輕ンジテ以テ殃ナシトスルコト勿レ、水ノ滴リ微ナリト雖モ漸ク大器ニ盈ツ、刹那ノ造罪殃無間ニ墮ス」と涅槃經に御戒めになつてありますが、これが大切な處です、この小罪が人々の運命を支配して居るといふことを知らねばなりません、凡そ人間の價値の定まる標準即ち相場附けの目印にする點は、長處を以て定めるでせうか、短處を以て定めるでせうか、これは人間に限る譯ではありません、總ての物の相場をつける標準は必ずその物の短處を取つて定めて居るやうです、問屋が麥や米を買ふ時でもさうらしいではありませんか、この麥は乾燥が足らぬから相場が幾等、この米は粃が多いから相場が幾等といふでせう、また、この陶器は龜裂があるからとか、この反物は汚點があるからとか、屹度その物の弱點を指摘して價値をつけますが、人間の相場をつけるのは殊にさうです結婚の世話でもする媒介人ならば相手の長處だけを擧げるかは知りませぬが、通常では決して他人の長處を擧げは致しませぬ、あ

鎖の弊

の人は如何な人かと問はれると、目尻の下つた人であるかと、鼻の曲つた人であるとか、口が扁擔ぢやとか、頸が天氣を見て居るとか、イヤ顔色が黒いの、脚が短いのと屹度那邊かの弱點を取つて答へるやうですが、その弱點で物の相場が定まるといふ例を引いて言へば、こゝに一連の鎖があるとして、その鎖が假りに五拾貫ならば五拾貫の重量を釣るものと定められてあるとすれば、その五十貫釣りといふ相場は那處を標準に取つたのであるかと言へばその鎖を以て五十貫までの物を釣つた時は切れないで、釣れたのに、一貫目でも増して五十一貫目の重量を載せた時、持ち耐へないでブツ、リと截れたから、この鎖は五十一貫の重量は釣ることは出来ぬ、五十貫釣りであるときツチリ相場が定つたのです、その定つたのは截れたからでせう、截れたのは那處でせうか、その鎖全體で一番弱い鐵がたゞ一個あつて、その一個だけが截れたのです、外には六十貫でも七十貫でも釣る程の強い鐵は繋がつて居ても、その強い方で相場をつけなくて、一番弱い鐵の一個で截れたが爲めに鎖



全體の相場を定めたのであります、皆様の相場もさうです、一生涯の間には善い行ひは澤山にあり、長處も多くありましても、その善い方では他人の相場をつけて呉れないで、たゞ一つでも人目に留る悪い行爲があつたならば、その一つで當時の相場をつけられますぞ、即ち御互は罪の爲めに一生涯の價値を定められるのであります、シテ見れば御互は自らその弱點を見出して、第一着に罪から解脱することをつとめねば宗教の門に入ることは出来ませぬ然るに自分で自分の弱點を見出すと申しましても、妙なものて誰でも罪の中に居て、罪に包まれて居たのでは自ら罪の中に居るといふことが氣の附くものではありませぬ、丁度、空氣の中に居ては自ら空氣の中に居るとも氣の附かぬと同じです、さうてせう今現に皆様をグルツと包んで居る物は何てすか空氣ではありませぬか、その空氣を皆様は朝から晩まで晩から朝まで、呼吸して居られるてせう、三度の食事は一日や二日は食べなくても直に死ぬものではありませぬが、この空氣を僅少の五分間でも呼吸しないで居たならばそ

空氣に包まれて自ら知らず

れきり生命はないのですそれ程大切な空氣を呼吸して居ながら、今呼いたとも今吸ふたとも氣が附かず、覺えず知らず呼吸して、空氣の中に居るといふことすら氣のつかないのは、すなはち空氣に包まれて居るからてせう、今御互が從晝至夜惡事を造り通しにして居たならば、罪に包まれて居るのですから、自分で罪の中に居るとは氣の附くものではありません、この罪の中から踏み出して正義公道に踏み込み、美事に罪を離れた處で越し方の我身我行ひを顧みた時に、始めてあゝ今までは罪の中に居たものぢや、淺間しい行ひをして居たものぢやといふことが氣附くのであります、臭い物の中に居る虫は臭いといふことは知りませぬ、罪に包まれて居ては罪とは知りませぬ、さうすれば悪るかつたと氣のついた時は即ちそれだけは罪を離れて居るのです、この道理から推したならば、吾は青天白日の身である懺悔せねばならぬ覺えはないなどと言つて威張つて居る時は、罪を造つて居る眞最中であるのですそれについて難有い話があります



◎大和の奈良に法相宗の總本山の興福寺といふ大刹があります、此寺に昔眞興といふ大徳の御方が住職して居られました、或日この眞興大徳が裏の椽側で靜に書物を讀んで居られると、後の山から鹿が一頭逃げて来て、大徳の法衣の袖の下に隠れて、何か物怖れしたのがビリ／＼と顛へて居る大徳は憫然なものと思召して覆隠つて居られると、一人の獵夫が鐵砲を持ちながら追うて来て、聲荒らげて大徳に向ひ、これ和尚尊公は拙者が撃ち殺さうとして居る鹿を隠着すとは不都合ではないかその鹿を此處へ出さねば尊公も一緒に撃ち殺すと、無法にも怒鳴りつけると、大徳は靜かに御答へなされるやうに御前は心得違ひをしては居らぬか、この鹿は佛性と言うて佛の種を持つて居るぞ、無暗に撃ち殺すのは不心得であらうと仰せになると、獵夫は猶も聲を荒らげて、その鹿に佛の種があるといふその證據は那邊にあるか「それは分つて居るではないか御前の鐵砲を避けて解脱幢相の法衣の袖に隠れるのが證據ではないか、成程それで少々分りかけた、然らば更に尋ねるがその佛の種

を持つて居る鹿を一撃ちに殺してしまふといふこの拙者は恐ろしい心を持つて居るであらう、この恐ろしい拙者にても佛の種があるであらうか、「御前も奇麗な佛の種を持つて居る」これは怪訝しい、拙者に佛の種があるとは合點が行かぬ、自分に持つて居て自分に知れぬといふ筈はない、この五尺の身體に何處に佛の種があるのか、あるならば面前へ出して見よ、その時大徳は一首の和歌を以て答へられました、その和歌は

年毎に咲くや吉野の山櫻樹を伐りて見よ花のありかを

この歌の意味は能く分つて居るでせう、春三月彌生の頃には、吉野の山の一目千株の山櫻は、雲か霞と見まがふ程に爛漫と咲き揃つて居ても、春過ぎ、夏去り、秋を経て、嚴冬雪降る寒空になると、満山枯木の如く、花も葉も何もありませぬ、その枯木同様の時に、來年の春咲く花の種は那邊にあるのかと謂つて、その櫻木を一寸截りに截つて見ても何處にも花の種は見えはせぬけれども、一陽來復の時が來て春風春雨の縁を借るとまた爛漫と咲き揃ふて



はないか、今御前もその通り、その身體に花の種ではない佛の種を持つて居るのであるけれども、この鹿を撃ち殺さうといふやうな恐ろしい心の起つてをる時は、丁度山櫻が冬の空に枯木同様になつた時と同じく、佛前の身體を一分截りに截つて見ても佛の種は見えはせぬ見えはせぬけれども御前もまた今から惡の方を漸次に去つて善の方に趣きさへすれば、客塵煩惱が何時しか去つて佛の種がアリくと光明を放つのであるぞといふ歌の意味でありますそこで獵夫は忽然に懺悔の心が起きて、鐵砲を棄て、剃髮し、大徳の弟子となつたといふ話がありますが、これが即ちその獵夫が罪から離れたのであります、けれどもこの獵夫が毎日殺生ばかりして居る時は、罪を造りついでて罪に包まれ罪の中に居るのですから、自分で悪いとは氣が附かないのです、その罪の眞中に居る獵夫を、眞興大徳が手を引いて罪の中からひき出されたものであるから、獵夫は罪を踏み出て後振り向いて越し方を眺めた時、あゝ今までは悪い行爲をして居たものぢやと氣がついて、身の毛も卓立つ程に恐

ろしく感じたのであります、この通り罪を自覺した時に始めて罪から解脱することが出来るのであります

至心懺悔(下)

罪を造つて居る眞最中は、罪に包まれて居るのであるから、自ら罪の中に居るといふことも氣のつくものではない、その罪の中から踏み出して、罪を離れた時始めて罪を自覺することが出来るのであると申しましたが、それでは御互の本性は本來罪の凝固でもあるのかと申せば、決してさうではありませぬ、各々如來の智慧徳相を具有へて、清淨なる本性を持つて居るのです、尤も人の性が善であるとか、惡であるとかいふことについては、古來から學者の説が區々になつて居りまして、孔子や孟子、また、セネカ、ルーソーなどといふ人は、人の性は善であると説き、荀子や、ホッブス、シヨッペンハッセルなどは、人の性は惡であると言ひ、揚雄や董仲舒、パスカルなどは善



悪混淆の説を立てまして、なか／＼やかましいのです、佛教でも性善性悪なぞといふ説があつて、難解しく論じますれば際限もないのですが、兎に角佛様は「一切衆生悉有佛性」と仰せになつて、御互は佛菩薩と寸分違はぬ清浄なる本性を具有て居ることを御證明遊ばされてあります、佛菩薩と同じやうなる本性を持つて居りながら、何故忌はしき種々の悪事を働いて、世にも恐ろしき罪を造るのでありませうか、それが准南子にも▲「日月明カナラント欲スレドモ浮雲之ヲ掩ヒ、河水清カナラント欲スレドモ沙石之ヲ穢シ、人性平カナラント欲スレドモ嗜好之ヲ害ス」とある通り、御互の心性は本より一點の汚れもなき清浄なることは日月の如きものであるけれども、客塵煩惱の爲めに染汚されるのであります、佛性と煩惱、本心と私慾、理性と感情とは何時も／＼吾々の心の中に激しい戦争をして居るのであります、兎角、煩惱の爲めに佛性を暗まされ、私慾の爲めに本心を覆はれ、感情の爲めに理性をあやまられるものですから、種々の悪事を働いて怖るべき罪を作り出すので

本心は水の  
澄へたるが  
如し

あります、皆これは本性の自然に背いて居るのです、その本性の自然は譬へて申せば丁度あの水の澄み切つて居る姿のやうなものであります、その澄清瑩潔たる水の如き本心に、何故罪惡の浪風を起すのでありませうか、私は山陽道の者ですから、水の景色を語る時には、往復の道で度々眺めて居る須磨や舞子の濱あたりの景色のことを話しますと、鐵道唱歌を聞くやうぢやなどと御笑ひになる方もありますけれども、實際那の邊の水の景色は如何です、筆にも口にも盡されずまい、夏猶寒き布引の瀧の響を後にして神戸の里を立ち出て、兵庫鷹取と過ぎて、一方には平家の若武者教盛の頸をとられた一の谷、一方には九郎判官義経が敵陣目懸けて逆落をした搦越を見て、月は白し須磨の灣又灣といふ月の名所の須磨の浦、ほの／＼と朝霧に包まれたる明石の浦から島かくれ行く舟を眺め、白砂青松の舞子の濱の松の梢の間から雲煙縹糊の中に淡路島を見た處、浪なく風なく水に綾なす漣の形、實に得も言はれぬ風光です、この澄み切つた姿が吾々御互の本心本性が、我慢や邪慢の



悪念を離れた時の佛性の姿であります、これほど澄み渡つた水でも、俄かに風が怒り浪が驚き、暴雨また襲ひ來たならば、今までは紫瀾穩かなる處白鷗眠り、火輪煙を吐いて天外より來るといふ景色も忽ち變じて船は傾き楫は折れ、人々悲鳴をあげて救ひを求めるといふやうな一大叫喚地獄を現出するてはありませぬか、御互もその通り、澄み渡つた水の如き清浄なる心を持つて居る時は、義理も人情も明かに分つて道ならぬ行爲はせぬけれども、一朝忿怒の風が起り私慾の浪が湧き出したならば、忽ち本心を失うて、殺生、偷盜詐僞、姦通、無量無邊の罪惡を造り出すのであります、皆これは自然に背いて居るのです、この自然に背いた即ち不自然の行爲が罪と名がつくのであります、この不自然の罪を犯したならば速に懺悔せねばならぬのです、丁度御互が毎日食べて居る常食物でも、米なり麥なり蘿蔔なり胡蘿蔔なり乃至魚なり菜なりは、皆人の常に食ふべき自然の食物でありますけれども、何か不自然なる毒の物を食つたならば如何てせう、過つて毒でも呑み込んだならば、

毒を嘔下す  
れば吐く

自然に背いて居るのであるからそのまゝにはして置けますまい、是非吐劑でも服してその毒を吐き出さねばならぬ、一旦呑み込んだ物を吐くのは非常に苦しいものですけれども、吐いてしまひさへすれば後は實に氣持のよいものです、若しこれを吐き出さないでそのまゝに放棄して置けば、毒は次第に全身に及んで遂に身を亡ぼすに至るのであります、吾々が本性の自然に背いて不自然なる罪を犯したのは毒を食つたやうなものであるから、是非共吐劑即ち懺悔の儀式に依つて罪を吐き出してしまはねばなりません、若し懺悔をしないで放棄つて置いたならば、罪は漸次に重つて遂にその身を地獄の底までも沈めるのであります、その懺悔も餘り罪の積み重ならぬ内に、油断なく拂ひ除けねばなりません、一言に罪といへば何の雜作もなく一口にたゞ罪と申しますとその罪を引き舒ばせば何處まで長くなるかも知れぬ、誰か勘定したことがありますか、一億圓といへば、字に書けばたゞ三字、口で云へば一口だけであるが、一圓紙幣で數へて二年要り、縦ぎ舒ばせば横濱から桑港を

一億圓の延



通り越し、積めば三重の富士山を凌ぎ、擴げると千疊敷が六百五十も出来る  
さうですが、實に恐ろしい勘定になるものではありませぬか、御互が日夜造  
つて居る處の罪もその通り、積み重つたならば無間地獄でも通り越す程の罪  
業を作りつゝありはせぬか、能く／＼反省せねばなりません、世には愚か  
な者も居るもので、濡れぬ内こそ露でも厭へとか、毒を食へば皿までもなぞ  
と妙な理屈を附會て、自暴自棄に罪を重ねる者も居ります、懺悔さへすれば  
罪の帳消しになるのならば、意で思つて口に言ふた程ならば序に身にも行へ  
といつたやうなことで、同じ懺悔するならば重いも軽いもあるものかなぞと  
無法な罪の造り増しをする者がありますが、そのやうな亂暴者を佛様は「百  
喻經」の中に例を引いて御誠になつてあります◎昔、愚かな人がありまし  
て、その人は七人の子を養育して居りました、處が不幸にしてその中に一人  
が死にますと、親は非常に悼んでその死骸を何時までも家に停めて、座敷中  
に蛆が這ひ出してはまだ同床して居るものですから、或人が無常の道理から

愚人我子  
殺す

生死の異なることなどを陳べて、早く遠方へ埋葬するがよいと申しますと、  
愚人はそれを聞いて思念ふには、人は必ず死んで何時までも家に停めること  
の出来ぬものなれば、同じ埋めるならば一人でも手数は同じであるから、荷  
物の片寄らぬやうに序に今一人の子を殺して兩方に擔荷て行かうと言つて、  
また一人の子を撃ち殺して埋めたと申すことでありますが、何と馬鹿氣たと  
云つても御話にならないではありませぬか、吾々が罪を懺悔するのにも、意  
て悪事を思つて口に言ふたのであるから、同じ懺悔する程ならば一層のこと  
に身にも行つて、序に合せて懺悔すれば手数が省けて便利だなどと言つて、  
罪の作り増しをするやうな者は、擔荷ふに便利がよいからと言つて子を撃ち  
殺した愚人の所爲と一般で實に淺ましい考へと申すものであります  
雪降らば積らぬうちに拂ふべし、風ある枝に雪折れはなし  
御互に大罪を犯さぬ内に、油断なく小罪から懺悔して行けば日々に消滅して  
清淨の身となることが出来るのであります●増一阿含經に「極惡ノ行ヲ作ス



モ過チ悔ユレバ轉々微薄ナリ、日ニ悔イテ懈怠無クンバ罪根永ク抜ク可シ  
 と仰せになつてありますが、實に難有い御教へてはありませぬか、御互が清  
 浄なる本性の水に、煩惱妄想の風を起して種々様々罪惡の浪が湧き出るの  
 ありますが、その湧き出た罪を懺悔する方法に就て、心學の大家の鳩翁先生  
 が、天の命これを性といふ、性に率ふこれを道といふ、道を修むるこれを教  
 といふの三句を講釋せられるのに、煙管の喩を上げて通俗平易に話されてあ  
 るのが如何にも親切で能く合點が行きます、その話は、此あたらしい煙管の  
 やりなものぢや、此煙管も天が陰陽五行を以て萬物を化生する中に、眞鍮と  
 なり篠竹となり、已に煙管の形が出来るとチャンと、天理が具つて煙草が飲  
 めるやうになる、其煙草の飲めるのが煙管の性ぢや、これが直に天理で天の  
 命であります、しかも天理はどのやうなものぢやと吸口から覗いて視れば、  
 雁首の中も羅字竹の中も吸口の中も、奇麗にして何もない、唯天氣の通ふば  
 かりぢや、此天氣の通ふ處が即ち煙管の生れつきのこゝろ、丁度赤子と同じ

煙管掃除の  
譬喩

事てわだかまりのない奇麗なものぢや、しかしながら奇麗なはいが、煙管  
 も煙草を飲まずさらぎせるで置けば、何時まで経つても煙管の用はない、人  
 も何時までも赤子で居ると腸は奇麗なれども、オギャ〜では間に合はぬ、  
 そこで性に率ふこれを道といふて新煙管で煙草を飲めば煙が通つて工合がよ  
 い、煙草の、めるが煙管の性に率ふ道ぢや、赤子も次第に成人して親に事へ  
 主につかへ、身を立て名を後世に揚るが人の道ぢや、煙管も天の一物、人も  
 天の一物、非情を以て有情に譬へるのは異なものなれども、何も變つたもの  
 ではありませぬ、扱道を修むるこれを教といふは、彼の新煙管で煙草をのめ  
 ば、始めの程はよいが煙草をのむに従ひ、後には脂がつまつて天氣が通はぬ  
 やうになると、吸うても吹いても煙草はのめぬ、これが赤子が成人して交際  
 場裏に立て働くうちに、後にはおれが〜の氣隨氣儘がかたまつて、天理を  
 塞ぐやうになる、丁度煙管の脂でつまつたと變つたものではありませぬ、  
 見れば立派な煙管ぢやが取上げて見れば用には立たぬ、さればといふて煙管



の形をして居るから捨て、も仕廻れぬ、ソコテ據なく煙草盆の中でゴロ／＼とごろついて居る、人もこれと同じく人欲のかたまつて天理を失ふた人は仕方がない、見れば立派な男でも取上げて見れば役には立たず、人の形をして居るものを殺しても仕まはれず、親兄弟に勘當せられて、あちらこちらとごろついて居る、これ等は脂のかたまつた煙管の仲間ぢや、處が、煙管の脂のつまつたのは小捻か藁すべか又は銅線でも通して中を掃除すれば、本の通りに煙草が飲める、これが煙管の道を修むる教であります、人もこれと同じ事で氣隨氣儘のかたまつた人でも聖人の教を聞いて腹の中を掃除すれば、本の赤子と同じく腹の中が奇麗になり本心に立ち戻られます、何と能く似たものではないか、天の命これを新煙管といひ、煙草の飲めるこれを道といひ、掃除をするこれを教といふ、合點がまゐりましたか、或人の道歌に「きせるさへ心のやにを掃除せず、雁首ばかりみかく世の人」とよく／＼心得ねばなりませぬ、皆様如何ですこの鳩翁先生の煙管の掃除談は如何にもよく分るては

ありませぬか、煙管は吸口の穴から銅線でも通して掃除が出来ますが、御互に煩惱妄想の脂のつまつたのは耳の穴から御佛の道を注ぎ込み、その教が五臓六腑にしみ渡つて、あゝ今までは悪かつたと合點の出来た時、罪惡の脂がスバリと消殞たのであります、この罪を離れさへすれば「佛祖の往昔は吾等なり、吾等が當來は佛祖ならん」て、清淨なる佛性がそこに現はれたのであります、昔から辻切強盗までもした程の悪人でも、高德の御方に逢うて改心し立派なる信佛者となつた例は數限りもなくあります◎現に先年遷化なられた高德の七里恒順師の教へによりて改心した強盗もあります、七里師は誰れも知らぬ者はありますまい、九州博多の萬行寺に住職して居られた眞宗本願寺派の碩徳です、或時萬行寺へ強盗が三人這入つて、白刃を閃かして師を嚇しますると、師は少しも騒がず泰然として有合せの金子八拾圓を出して、此金は御前達に與へるから、禮の辭を陳べて歸れといはれて賊等は各々御禮を言うて立ち去つたさうです、その後間もなく賊等は捕縛せられて、七里師も



證人として裁判所に召び出されて、彼の三人の者等は予の金を奪ふたのては  
 ない與へたのである、其證據は三人の者等は各々禮の辭を陳べて立ち去りま  
 したと申し立てられたので、強盜罪は不調となり三人は無罪となりまして、  
 眞箇に改心懺悔して無二の信佛者となつて居ります、このやうな惡人ですら  
 懺悔さへすれば立派に佛教信者の資格を具へることが出来るのであります、  
 今皆様は別に法律に觸れるやうな罪を犯して居らぬことは勿論でありますけ  
 れども、日々夜々身口意で覺えず作る罪業を悲智圓滿なる御佛の前に懺悔し  
 て、大清淨なる佛教信者と御なりなさらねばなりません、そのことを●正信  
 無常觀には「朝夕佛前に焼香禮拜し、合掌恭敬して、至心正念に懺悔の文を  
 唱へ無始生死の罪過を除滅して、身口意の三業を清淨にし」と申されてあり  
 ます、その懺悔の文とは、我昔所造諸惡業皆由無始貪瞋痴從身口意之所生、  
 一切我今皆懺悔と申すのであります

無始生死の  
罪過を除滅す

### 第五度

#### 歸依三寶(上)

今席は歸依三寶の箇條に就いて御話申します、前座で至心懺悔のことを申し  
 陳べて置きました、皆様は最早佛法の儀式に依て、身口意の三業を消除し  
 て大清淨の身となられた御方々ばかりです、皆御自分の罪を自覺して居  
 られるでせう、己に己れの罪を自覺したならば、自ら完然な者であるとか、缺  
 目のない者であるなどは考へられますまい、己れが不完然なる者であると  
 氣が附けば、是非何か完然な者に歸依りたいといふ考への起るのは自然の  
 理であります、丁度足を痛めたならば、杖に依りたいと思ひ、眼が不完然な  
 らば眼鏡に依り、身に病氣があれば醫師に便るの外はないやうなものです、  
 今三界六道の間、生死輪廻の海原に浮きつ沈みつして居る御互の歸依るべき  
 ものは佛法僧の三寶の外はありませぬ、處が吾々は兎角身勝手な者で、まだ

人は完然な  
るものに便  
らんとす



年齢の若い血氣壯んな時には、何も身に不足がないものであるから、何かとすれば大言壯語、高樓傾け盡す三杯の酒豪氣呑まんと欲す五大州なぞと、トシデモない豪傑の口真似なんぞ爲たがるものでとても、佛とも法とも思ふものではありませぬ、かく申して居る私なぞもさうです、御耻かしいことですから、今思ひ出してもゾットするやうですが、自分の経験談も懺悔になるてせうから御話申しますが、私がゾット若いころです、まだ未丁年の一介書生で或る學校に居る時でした、夏期の休業を機として、大膽にも獨立獨行で一個の靴と一本の蝙蝠傘を手にして、關東布教に出懸けたことがあります、追々巡回して上州へ行きました、この國には皆様も御存じの通り、三山と云つて妙義、榛名、赤城の高山がありますが、中でも頼山陽が九州の耶馬溪を見ない前に天下の名山であると云つて絶稱したとかいふ妙義山を踏破したいと思ひ、北甘樂郡の宇田の神守寺の教場を濟まして、道を丹生村の方面に取り替

原を過ぎて御嶽神社を登りかけた時、その時です、皆様の中にはあの邊の地理を御熟知の方もあります、が、「中の嶽」へ出る道に小さな祠があつて、その祠の後に形ばかりの瀧があります、私は何と申しましたも六月炎天の獨旅談相手はなし暑くはあるし、その瀧の下で汗を拭いて一休み、サテ「中の嶽」へと志して歩を進めると困つたことには道が左右に分れて居つてどちらへ行くとも合點が行かぬ、こゝで迷つたのです、左の道へ行けばよいものを過つて右へ踏み込んだものですからサー大變、段々山を躋りますると始めの内は可なりの道がありました、が、やがて樹木は森々として天を覆ひ、荆棘は離々として地を隠し、一步々々と道は分らなくなつて、漸く山の中腹まで登ると噴火山の周圍にもあるやうに一面の焼石で、たゞ此處彼處に茅茨が生て居るばかりで、人の足跡などは絶えて全く鳥道玄路、後で聞けばこの山は猿も通はぬといふ金鷄山であつたのです、爾ういふことゝは知らないものですか、ら、絶頂まで行けば必ず何れへか通ずる道があるであらうと、仰いて見れば



眞ッ急に板をつツ立てたやうな山で絶頂に劔のやうな岩が空を摩して居る、私も此時はウンザリとしてしまつたけれども、兎も角も絶頂まで登れば道があらうと思つたものですから、道でもない道をかきわけて、茅では手を切り石では足を傷け、息もきれ〜一生懸命で漸く絶頂まで攀ぢ登つて、やれ嬉しやと岩角に取り付きこれにて安心と足を踏み止めて立つて見れば這は如何にその絶頂といふのは眞の絶頂で、立つて居る場は一尺方の平地もない、一歩進めやうとすれば脚下は千仞の巖頭、半歩を躓れば身は七裂八破となるのである、千仞の谿谷の底から吹き上げる風は氷の如くに肌を刺す、定めし自分の唇は紫に顔は血色を失うて土の如くになつたてせう、手は殆ど感覚を失うて取りついて居る岩角を離れさう、足はブル〜頭へて居た〜まれず、巖峻しい岩は何れも同じこと、登ることはドーカコーカ出来ても、降ることはなかく〜容易なものでない、今も攀登つた後の道を振り廻つて願れば、眞ッ急な岩と焼石に茅、前を見れば千仞の壑、進退全く谷つて千思萬考、やう〜

心の奥より  
三寶の光明  
を生み出す

のことに眸を放てば、太陽は早や西に傾いて、遙に見渡す萬頃の桑畑は蒼然として暮色に包まれ、蝸は山腹の森の彼處に鳴き渡つて一層の寂寥を加へるのです、夢か現か、御恥ケしいことですが私はその時こそは全く身も世もあらぬ心地がして、自分で自分の身が保ち切れず何物かに使つてこの身を救はれたといふ氣持ちが致しました、その時私が便るべき者は金でもなく學問でもなく親戚でも朋友でもなく、心の奥の奥底から眞實眞箇に使つたのは尋常自分が念じて居たる御佛でありました、一度この御佛に便り己れが心の奥底から三寶無礙の光明を生み出してからは、百萬の同行者を得たやうな心持がして、この峻しき山を而かも薄暮無人の路を辿つて妙義町まで出たことがあります、これは私が年齢が若くて情火猶ほ熾んに意志未だ鍛錬せざる時のことで、平素の修養が足らなかつたのは實に慚愧の至りてあります、が併し私はその時程自ら三寶の光明を深く感じたことはそれまでなかつたので、その時深く〜私の腦裏に印象したる三寶の光明は從劫至劫私を救ひ、穢惡充



左右の道が迷悟の分岐

満の迷雾を破つて、私の前途を照し給ふのであります、その特別に大いに感  
じましたのは、前に瀧の側の祠の處で道が左右に分れて居た時、その左右の  
道が迷悟正邪の分れ路であつたのです、之れを正道に入らないで過つて邪路  
に踏み込んだものですから、煩惱の荆棘や妄想の茅茨に搦められて、殆ど惡  
道に墮落して長時の苦みを受けねばならぬ處を、幸ひに三寶の名號に依つて救  
はれたのであります、私共は決して邪魔外道や山神鬼神等によりて救はれる  
ことは出来ませぬ、必ずこの三寶の名號に依りて罪より解脱して菩提の道に  
入るのです、それを祖師様は「徒に所逼を怖れて山神鬼神等に歸依し、或は  
外道の制多に歸依すること勿れ、彼れは其歸依に因りて衆苦を解脱すること  
なし、早く佛法僧の三寶に歸依し奉りて衆苦を解脱するのみに非ず菩提を成  
就すべし」と御示しになつてあります、皆様は幸ひに受け難きこの人間界に  
生を受け、遇ひ難き大乘佛教に遇うて、已に佛法の儀式に依つて至心に懺悔  
し、身口意の三業を消除なされたのであるから、速に三寶に歸依して清淨の

南無の釋

信心を起さなければなりません、未だこの歸依とか三寶とかいふことを解釋  
して居りませぬが、順序として一應御話を致しますと、歸依と申すことは天  
竺で南無といふ語を漢語に譯したので、歸命とも譯するのですが、兎に角歸  
の字はトックと訓せて、女子が嫁入りして身も心も總べて夫に打ち任せるや  
うな意味、依は依止などと言つてそこを依り止り處とすること、即ち佛の  
仰せに従ひ、法の指圖に任せ、僧の心に背かず、この三寶にヨリソレ三寶と  
離れず一致不二となることです、ソシテこの佛法僧の三寶は佛教の根本思想  
ともいふべきものであつて、何宗何派でも三歸戒を受けない宗旨はありません  
ぬ、無戒の宗旨といふ眞宗でも得度の時は必ず歸戒だけは授けます、日蓮宗  
も戒壇と云ふことは日蓮上人が三秘の隨一として立てられてある、外の宗義  
には異義はありません、この三歸戒だけは各宗共に違はないので、三寶に  
歸依せぬ者は佛法信者といふことは出来ませぬ、日本佛法の總開山ともいふ  
べき聖徳太子が十七條の憲法を制定せられたその御文にも「篤ク三寶ヲ敬ヘ



三寶ハ即チ四生ノ終歸、萬國ノ極宗ナリ」と仰せになつてある通り、如何なる宗旨、如何なる宗派でも三寶に依らぬものであるならば、佛法と名けることは出来ませぬ、この三寶には三種の功德と云つて、一體三寶、現前三寶、住持三寶の三通りに分れて居りますが、この解釋になりますとなか／＼難解しくなりますけれども、一應御話申しませう

歸依三寶(下)

この三種の三寶の功德を順を逐うて御話申しますと、少々難解しくなりますけれども、前にも申した通りこれが佛教の根本思想ともいふべき大切な箇條でありますから、繁を厭はず一應の解釋だけを致しますと、皆様も辛抱なされて順を違へないやうに御聽きを願ひます、總て何を聴くのもさうですけれども、取り分け宗教の談は能く信じて聞かなければ何の所詮もありませぬ、殊にこの歸依三寶の如きは、感應の上に成り立つ功德ですらか、たゞ論理一

佛法の大機は信を以て能入とす

水泡を以て華鬘を作らんとす

片の冷かな頭腦で、理屈的に考へたならば何の益もある筈はありませぬ、皆様も全く御自分で自ら三寶の願海に投入して、その手を以て三寶の體を捕へてその本性を吟味せられたならば、別物では無いといふことが眞實に分るのです、何につけても實際自身で經驗せねば悟徹ることが出来ないといふ實例は●出曜經にも面白い漸を以て示されてあります、天竺の或國のことです、王様に一人の王女があつて、王は非常にそれを愛して、何時も膝下を離さないで、王女の言ふことなれば如何なる無理でも聞くといふ有様でした、一日宮殿で遊んで居らつしやる時、雨が降つて潦水が溜り、其上に点滴が落ちてツブ／＼の水泡が幾つも出来て浮んで居るのを王女が見て非常に面白がつて王様に向ひ、アノ水泡を取つて華鬘を製作つて下さいとソロ／＼我儘を言ひ出しました、王は水の泡は取つても華鬘は製作することは出来ないと言へられましたが、スルト王女はその道理が分らぬものですからなか／＼聞き入れないで、華鬘を作つて呉れなければ死んでしまふなどと没分曉をいひ出された、



仕方がないから王は多くの細工師を召び出して、其方達は何とか工夫して、水泡を取つて姫に華鬘を製作つて與へよ、出来ぬと言へば殺してしまふと随分無理な命令を致されました、細工師等は皆驚いて、此事ばかりは御免を願ひたいものでありますと言つたきり今にも殺されるかと膽を潰して居りますと、其中の一人の老細工師が自分に巧計があると見えて、前んで王に白し上げて、拙者が御請け申して華鬘を製作りますと言つたので、王は甚しく打ち喜び王女に向ひ、御前の望み通り泡の華鬘を作つて呉れるさうだから、姫も行つて見て居なさいと申されますと、姫は王の語に随ひ外に出て見て居ると、彼の老細工師は姫に向つて、拙者は老眼で水泡の好醜を見分けることが出来ませぬから、恐れ入りますが姫様に手づから泡を取つて拙者にお渡し下されませと申すと、姫は潦水まで行つて自分で泡を見分けて、手に取ると直に破壊れるものですから、一生懸命になつて手に取らうとして終日それにかかりましたけれども、とうと一つの泡も取り上ることが出来ませぬ、ソコデ

姫は疲れ果て、泡を取るのを止めて、王に向つて、泡は直に消えて仕舞つて逆も髪を作ることには出来ませぬ、妾には萎んだり消えたりしない金の髪を作つて下さいと言つたさうです』面白御示してはありませぬか、誰ても實際に自分で経験しないことは、心の奥のドン底まで成程と合點の行かないものであります、今三寶のこともその通り皆様が最も厚い信仰を以て、眞實に歸依して御聞きになれば、正しく御佛の慈悲を感じる事が出来るのであります、この三種の三寶とは前にも申した通り、一體三寶、現前三寶、住持三寶の三つですが、先づ一體三寶から御話を致しませう、これは同體三寶ともいふのですが、早く申せば道理の上から云ふたので、佛様が御出世なされても一分も増さず、また御出世なさらなくても一毫も減らず、三世十方に充滿彌論して居る所の佛法僧の道理を申したのです、佛とは梵語では佛陀といふのを支那では覺と翻譯してありますが、更に日本の言葉にすれば「サトル」といふことになり



ます、法とは梵語で達磨とかといふのを支那の譯語で法といふので法は規則の義ですから「キマリ」とてもいふべきです、僧は矢張梵語で僧伽といふのを支那では和合と譯するのですから「ナカヨクハタラク」といふやうな義になります、一體三寶の上から申せば、宇宙間に有りと有らゆる事々物々は皆この佛法僧の現はれならざるものはないのです、第一の佛寶の姿は如何様なものかといへば、佛とは「サトリ」のこと、サトリとは「マコトの姿」である、マコトとは「カハラヌ」ことですが、宇宙間の事物は佛の相ならぬものはありますまい、日は朝々東より出て月は夜々西に沈み、春來れば百花爛漫秋來れば千山紅葉、皆これは「サトリ」の現れ「マコト」の相ではありませぬか、火は熱いのが「マコト」の姿で、九重の大奥にあつてやんごとなき御方の御膝下の埋火も、賤が伏屋の圍爐裏の火でも、寒天に辻待ちして居る車夫が股を炙つて居る火を、佛前の燈明も竈の焚火も、熱いといふことは千古萬古變りはありません、水の濕ふのもその通り、澄んでも濁つても、雨でも

雪でも霜でも霰でも、また大洋の浪でも草葉の露でも、物を濡すといふことだけは、昔も今も變りはないでせう、總ての物の本性の變りなきマコトの姿がそのまゝ佛です、これを近く吾々御互の身に引き比べて見ますれば、吾々は本來成の佛の性を立派に具備へて居りながら、いつしか本覺眞如の都を迷ひ出て、煩惱の縊縷を纏ひ妄想の薦をかぶり、五欲の缺椀を提げて六塵の巷に彷徨うて居た者が、一念懺悔の心を起して無量の罪障を消除して大清淨の身となつたのが、即ちマコトの相が現れたので、これを佛といふのであります、次に法寶といふのも、天地間の事物は悉皆法の現れてあつて、キマリのないものはありますまい、驚は白いのがキマリ鳥は黒いのがキマリ猫はニヤント鳴き狗はワント吠え、天井は上に床は下に、帽子は頭に下駄は足に、杓子で耳も堀れないが大鼓は枕になりもせぬ、御互の身の上でも手では握り足では歩み、鼻では嗅ぎ耳では聞き、齒では噛み胃では消化し何から何までキマリのないものはありますまい、如何に口が理屈を言つても口で聲は聞えず



鼻が幾等威張つても鼻で飯は食へない、親は親、子は子、男は男、女は女、總てあるべきやうにして行くのが法の現れであります。次の僧寶といふのは一切萬物のナカヨクハタラクことをいふのです、柱は堅に立つて居て横の梁と和合し、上の天井は下の床と和合し、この身體も四肢五官が都合よく和合して居ればこそ生活することが出来るのです吾々の心の中でもその通り、迷つて居る時は八萬四千の煩惱が、各々六塵の衢や五欲の辻に陣取りして、七離七合無二無三の大戦争をして居るのですが、一念悟つて至心懺悔の號令が出ると、悉く本覺眞如の宮殿に歸來つて、六識の總理大臣も前五識の百官まで悉く皆忠臣無二の善良の人民となつて、一身の國家を美事に保護するのが和合の義であります、この通り一體三寶の道理から申せば、天地萬物有りとならゆる物は悉く佛法僧の現れて、吾々御互始め蠢々たる微少の動物まで、生とし生ける者は、皆かたじけなくも一體三寶の中に在て生活して居るのであります、して見ればこの一體三寶の上の佛法僧は、一にして三、三にして

一、佛は眞如の本體、法は眞如の現相、僧は眞如の妙用であると申すことが出来るのであります

次に現前三寶といふのは、前に申したサトリの道理を自分の身の上の明かに具へて、人間の身軀の上に實行して顯はれて來られたる釋迦牟尼佛は佛寶でその御佛が一切衆生を御自身と同じ悟の境界に至らせやうとして、横説堅説遊ばされたのが法寶で、その法を直接に聞いて實行せられたる迦葉、阿難、舍利弗、目蓮等の方々を僧寶といふのであります

次に、住持三寶と申すのは、已に釋迦牟尼佛が御入滅になつて、現前三寶を拜むことも聞くことも出来ないから、御佛の姿を繪に畫いたり木像や銅像などに作つて、その御姿を拜むて居るのが佛寶で、佛の御説きになつた教法を結集して折つたり綴つたりしてある黄卷赤軸が法寶で、その教法を弘められる僧侶方を僧寶といふのであります、併しその偶像を安置するのは、偶像にあらざる佛の眞身を知らしめる爲めの標準、法寶もその紙墨以外に存する眞



理を知るが爲め、またその佛寶法寶を護持して絶えざらしむ所の僧寶を尊ぶ  
 のてあります、御互は一體三寶の道理を圓滿に具備して居りながら、何故に  
 別體の三寶に歸依せねばならぬかといへば、前にも申した通り、いつの間に  
 か本覺眞如の家郷を迷ひ出て居るので、言葉を換へて言はゞ自の三寶が不完  
 全であるから、完全無缺の三寶に歸依してその加被力を蒙るのです、それを  
 正信無常觀に、「次には三寶の名を唱へ奉りて、今身より佛身に至るまでその  
 冥加を被るべきものなり、この功德力能く我等を濟ひて鎮へに惡趣の輪廻を  
 出てしめ、迥に菩提涅槃の妙果を獲得して今世安穩後生善處の身となること  
 諸佛の已に證明したまふ所、諸祖の正しく信受したまひし所なり、我等如何  
 ぞ信受奉行せざらむや」と申されてあります、今御佛の加被力を蒙つて救は  
 れた例を御話申しますと、近頃のことですが◎東京日本橋區久松町廿番に田  
 川トシといふ御方がありますが始めは天台宗であつたのが、因縁があつて眞  
 宗に歸依してつね々彌陀の本願の尊さを喜びつゝ、日暮しをして居りました

田川トシ女  
 の深信

が、去る明治廿二年に不圖俗に所謂乳癌といふ難病に罹り、始めの程は差し  
 たることもなかつたのがおひくゝ重くなつたので、その年の五月三日に佐藤  
 病院に入て治療を乞ふことになりました、全體乳癌と申す病は婦人に取つて  
 は難症で、大概十中の八九は全快は覺束ない位のものですから、本人も充分  
 その覺悟をして、入院の際には親戚縁者の人々に死後のことまでもこまゝ  
 と遺言して入院した程であつたのです、イヨゝゝ胸部を切斷せねばならぬこ  
 とゝなつて、當日になり醫師から魔薬を用ゐて睡らせやうとすると、トク子  
 が申しますには、妾は命は醫師に任せ心は彌陀に任せて居りますから、魔睡  
 劑には及びませぬと言つて、平氣で手術臺に上り、見る目も怖ろしい大手術  
 を受け胸部をワリくゝと截斷せられつゝ、苦しい息もつかないで、靜かに念  
 佛を申しながら始終麗しい顔して居たので、佐藤國手もその精神の確かなる  
 ことには大いに感心せられたさうですが尤もなことです、その治療を仕遂げ  
 全快の上、六月の廿六日に退院しましたが、是れ全く佛祖の加被力であつた



と打ち喜び、橘町の眞宗説教所の女人講の當日に、全快祝ひとして或る高僧を請して説教を開き、會員一同男子へは盃を一個、女子へは自作の歌を

五月三日病の爲め入院して六月廿六日全く快く退院なしたるも日頃信じ奉る御佛の御恵とかたじけなく思ひつゞけて

ありがたやいきながらへて世の中に

田川とく子

またもみのりをきくぞ嬉しき

と書いた扇子を一本宛贈つて、自他共に佛の慈悲を喜んだことがあります。何と美談ではありませんか、この田川トク子の如きは實に今の世に多く得難き篤信者で、深く三寶に歸依して己れを忘れて三寶と一體になつたのであります。今御互も本来自分に一體三寶の性徳を圓滿に具へて居るのを打ち忘れて、感應道交せぬから淺間しい凡夫の境界となり、我れと我が手に苦んで居るけれども、一度懺悔滅罪した上に、身口意の三業を清淨にして一心專念に南無歸依佛、南無歸依法、南無歸依僧と口に唱ふる時は歸依する衆生の吾々

と、歸依せらるゝ三寶とが一致契合して一ともいはず二ともいはず、かのつと眞如の妙體に歸入して其身其儘絶對平等の大解脱界に歸順するのであります

### 第六座

#### 受持五戒(上)

前座で歸依三寶の御話を致しましたが、皆様は最早至心悔懺も済んで滅罪清淨の身の上となり、佛法僧の三寶に歸依なされたのでありますから、佛教信者としては圓滿に資格を具へられたのである、イヤ信者としての資格など申せば、何だか他人のやうに聞えますが、信者どころではない、已に三歸戒を受けたならば直に佛の子なのです、佛の子とはいふものゝ其實そのまゝ佛であります、その佛も始めて佛となつたのではない、本来具足の佛性が顯れたのです、併しこゝて注意を願ひたいのは、私がこの連座説教の始めの通佛



教根本義の條下で御話申した人位成佛と法位成佛の差別のことを能く御辨へ下さらないとトんだ間違ひになります、今私が三歸戒を受けた當處が直に佛である申すのは、これは法位成佛の上から言ふのですから、この差別を辨へないと變天古來な佛様が出来て始末がつかないことになります、殺人罪を犯す佛様もあれば、強盜を働く菩薩もあり、酔ひ潰れの泥佛もあれば、詐偽や喧嘩までする佛様が數知れぬほど出来て来るやうになります、これ等を果滿圓成の御佛様と比べては、それこそ破れ圓頓滅汰大乘の空見解と申すもので非常な間違ひになります、それで人位成佛といふことを説かねばならぬことになるのです、人位成佛の上からいへば三歸戒を受けたのは初發心の時でイヨ／＼佛の弟子となり安心歸着の本家郷に安住したのであります、已に弟子としてこの社會に處するには如何様な道徳をせねばならぬかといへば自行としては先づこの五戒を持つて行かなければならぬ、これが即ち人間としてこの世に處する道徳と申すものであります、五戒とは、第一不殺生、第二不

佛子の自行

偷盜、第三不邪淫、第四不妄語、第五不飲酒、この五つを五善とも申して、一切の戒律善法の根本基礎となるのです、この五戒は誰れの身の上にも本來具備はつて居るのであるけれども、煩惱業障が深厚いので暫く現れないので、それが眞實に三寶に歸依し奉つた時には我身ばかりではない宇宙萬象天上天下はソツクリ五戒の姿となり切つて居るのであります、併し今こゝではそのやうな道理の上の御話よりは、人間世界の實踐道徳として、一應この五戒を順を逐うて御談申すことに致します

第一不殺生

第一の不殺生戒、これはいふまでもなく生ある者を殺すなといふことです、處が御互人間の姿は大體に不殺生戒の相が顯れて居るので、頭に角もなければ、口にも尖つた牙もなく、手足に猛しい爪があるといふのでもなく、起居動作から衣服の有様まで、自然に忍辱柔和に出来て居つて、獅子や、虎や犬や猫などのやうに殺生の武器を身に具へて居る者とは非常な相違でせう、この身このまゝ、不殺生戒の露現てはありませぬか、この人間の身を以て殺生



するといふことは天理にも人道にも背いたことであるといふことは申すまでもないことです、それに往々心得違ひの人は、無惨にも樂みとして動物の生命をとり、また他に言ひ附けて殺させたり、他の殺すのを見て喜んで居る者があるやうですが實に淺ましい料簡ではありませぬか、皆様まあ能く々々考へて御覽なさい、何が大切と言つても生命ほど大事なものはないでせう、どんな小虫畜類でも殺されることを恐れない動物はありますまい、日外も申しましたが、アノ小さな可愛げな虫が叢の中で面白さうに、すゞやかな聲を張り上げて鳴いて居るのが、人の足音を聞くとピクツと鳴を止めるのは何故でせう、矢張生命が惜しいからです、アノ小さな魚が庭前の小池で、樂しげに浮んでアツプ〜と水を吞んで居るのが人の影を見るとサツト底に沈んでしまふのは何故でせう、矢張生命が惜しいからです、それにまた親子の關係を辨へて居る動物などであつて、その子が殺されるとかまた親が殺されるとかした時の彼等の悲しみは如何ばかりでせう、そんなことには古から憐れな

話は數知れぬほどありますが、中にも名高い祖師の出家の因縁があります、◎支那で嵐山の惠遠法師と申される御方がまだ出家なされない前には、弓を射ることの名人でしたが、或時一羽の鶴の雛を射殺して、復たその母鶴までも射殺さうとして居ると、その母鶴はチツト立て今殺された雛鶴を見詰めた切りバツタリ倒れて死んでしまつたものですから不思議に思ひその母鶴の腹を解剖して見ると、その肝腸が寸々に断絶れて居つたさうです、母鶴が雛鶴の殺された無惨の姿を見て、疾痛慘怛の餘りとうと自分の腹が寸断して死んだのを見て、あゝ恐ろしい罪惡を作つたとまた自分の腹が寸断れる思ひをして大いに悔悟し其場で弓矢を折り棄て、出家せられたのが有名な惠遠法師であります、鳥でも獸でも我子の可愛いのと同じこと、それをムザ〜と殺されては怨めしく思はずには居りませぬまい、何時であつたか新聞に出たことがあります◎武州の北足立郡堀の内村に人見某といふ人の妻で、その名をタチといふ者がありまして、その年の三月二十九日に、玉のやうに奇麗な男の



子を産みまして、夫婦の中の總領息子のことですから、蝶よ花よと下にも措かぬやうに可愛がつて、寒い風にも當てぬやうに生長きくし、目出度五月の端午も済まして、その九日朝のこと、其家に六七年も飼ひ居る女猫が四疋の子を産みました、スルト其内儀さんが傍に居て、面倒臭い嫌やなものを産みくさると、小言を言ひながら、一疋産めばオ、能く産むだと言ひながら、取つては前の泥溝の中へ投げ込み、また産むとオ、能く産んだと取り上げては投げ込み、とうとう四疋の子猫を残らず殺して仕舞ひました、親猫は之れを口惜く思つたものと見え、其後は間がな隙がな狙つて居て、その十三日の晝の頃、妻は奥座敷に小兒を寝かしておいて、少頃裏へ出て洗濯をして居ると、小兒が消魂しくキヤツと泣いたから、急いで駈け込んで見ると、妻は驚いた小兒の咽から鮮血が淋漓と流れて居る、オヤドと言つたきり開いた口は塞がらず、やうくのこと近寄つて見ると、可愛や最早息は絶えて居る、何者の仕業であらうと不審かしながら近傍を見ると座敷の端で例の母猫が、よい

蠅を撃つて  
傷くの頭を

氣味と言はぬばかりに、一聲叫んで何れへか逐電てしまひました、その内に夫も還つて来て、仇の猫を探索しても見當らず、死んだ愛兒を抱き上げて涙にくれて居たといふことがあります、猫でも犬でも産むや否や我が子を殺されて怨めしく思はぬといふ道理はありません、全體佛教で一番最初にこの殺生を戒めてあるのは、一切衆生を平等に憐むからであることは申すまでもないことですが、第一御互が本来具有へて居る所の佛心なる慈悲心を傷けるからです、皆様能く考へて御覽なさい、向ふの動物を殺さうと思ふた時に、自分の慈悲心を傷けないで殺されるものではありません、他の動物を殺さぬ前に自分の慈悲心が自殺を遂げてしまふのです、昔嘶にある通り◎那處かの老爺さんが禿げた薬罐頭に蠅がとまつて、その蠅が老爺の禿げ頭の膏をペロ／＼と甜めて居る、スルト老爺さん大いに怒つてこの不埒な小虫奴が、乃公の大事なお頭をペロ々々甜めるとは無禮極まる仕打である、待て成敗して呉れうと、持つて居た大きな煙管を振り上げて、自分の頭の上の蠅を撃つ



であるからこの邊であらうと見當をつけて思ひ切りピッシャと打つと、蠅は  
憚りさまと言つたやうにブーンと飛び遁げて、氣の毒にも老爺さんは自分で  
自分の頭を酷く撃つたものですから、非常に傷をしたといひますが、この斬  
は他の者を殺さうとすればそれと同時に自分に傷を受けねばならぬといふこ  
とを示したものです、この通り殺生する時は必然の道理として自らの慈悲心  
を毀りその犯した罪は屹度報いて來るものであります、それは持地經の中に  
「殺生ノ罪衆生ヲシテ三惡道ニ墮セシム、若シ人中ニ生ズレバ二種ノ果報ヲ得  
一ニハ短命、二ニハ多病」と御説きになつてありますから能く／＼慎まねば  
なりませぬ、併し斯様に生ある者を殺すなとばかり申しますと、戦争するこ  
とも出來ねば、惡黨を死刑に處する譯にも行かず、作物に害のある虫を殺す  
こともならず、國利民福を計ることは出來ないが如何するかといふやうな難  
問が起らぬとも限らぬが、こゝです、佛教は決して不自由な戒法は説きませ  
ぬ、佛陀は開遮持犯の道理を説いて居られますから、殺生は大罪とは申しま

開遮持犯

戰戰の功徳

しても、時によりてはその殺生が却て大功德になるのです、そのことは、大  
涅槃經弟子品の中に、或時弟子の方が佛に向つて、三十二相八十隨好金剛不  
壞の境界を得玉ひたるに何が原因でありますかと問ひますと、釋尊が我れ過  
去世に於て國王となり、正義を守り道理ある戰場に立て、天下の惡人を對治  
せし其功德に由りて今は佛境界を得たりと御答へになつたことがあります、  
シテ見れば道ある戦争をして惡人を對治するのは決して不殺生戒を犯すので  
はない、却て功德を積むのではありませんか、丁度あの警官が劔を持つて居  
るやうなものです、劔は何をする物かと云へば即ち斬つたり突いたりするも  
のである、さうすれば警官の劔は人を斬る爲めや殺す爲めに持つて居るか  
と云へば、さうではないでせう、あの劔は人を斬らせぬ爲め殺させぬ爲めに持  
つて居るのではありませぬか、斬らせぬやうにするが爲め、殺させぬやうに  
するが爲めには、或は斬らねばならぬこともあり、殺さねばならぬこともあ  
るけれどもそれは罪にはなりません、日露戦争の如きも、清國を屠り韓國



を虐げて東洋の平和を破る露國を撃つて、清國を助け韓國を救ひ東洋の平和を維持するが爲めに起された仁義の師でありますから、我忠勇なる兵士諸君が敵を對治すればするほど大功徳を積むの道理であります、これ等は別の問題として、佛弟子たる御互は、無益の殺生をして罪を犯さないやうに、生々世々大慈悲心を起し、不殺生戒を持つて佛の慧命を相續して行かねはなりませぬ、これは不殺生戒の條を非常に長く御話致しました、次に移りませう

受持五戒(中)

第二が不倫盜戒であります、これはヌスミナスルナといふことですが、凡そ此世に生きとし生ける者は、自分の生命を保護するが爲めに種々の必要品があります、人間て言へば先づ衣食住を始め、田畑土藏諸道具の類を悉く所有せねばならず、畜類でも食と住處がなければならぬやうに、各々それ相應の物を持つて居るものであります、それを己れの分限を犯して他の所有に屬

佛の壽命相

第二不倫盜

泥棒の語

する物を盗むなどといふことは、天理にも人道にも背いて居ることは申すまでもありますまい、何が嫌なと言つても、他から泥棒とか盗人とかいはれるくらゐ氣持の悪いことはないでせう、どんな幼い小兒でも東西を辨へる程の者であるならば、それに向つてこの泥棒とか盗人とか言つて御覽なさい、必ずその小兒は眞ッ赤になつて怒るに違ひはありませぬそれほど嫌な思はしい泥棒や盗人が、濱の眞砂が盡きても世にこの種が切れないとは何と淺間しいことではありませぬか、盗むといへば大抵金錢のやうですが、世に金錢ほどよくゴタ／＼を惹き起す物はありますまい、貧乏人の夫婦喧嘩は多く臺所から起り、内閣の騒動も大抵財政問題からす現に今回の日露の講和談判でも一番やかましかつたのは償金問題でせう露國には以前に土耳其に向つて不當な償金の要求をしたことや、また北清事件の時も列國にも過ぎた償金を清國に要求したことなどは言はないで、戦敗國といふことも省みず、我露國は建國以來未だ曾て土地の割讓償金支出等のことはしないから、今に至つて軍費



の拂戻しなぞしては國威を失墜するとか何とか愚にもつかぬ文句を並べて金を出さないとか言つたといふやうな噂があるやうですが、無理非道を慫慂を逞うすれば際限もありますまいけれども、それ等は別物として、人は自分の所有てない物を盗むといふやうなことなく、不偷盜戒を守るのが當然で、不偷盜戒の相は前の不殺生戒の相と同じやうに立派に身に備つて居るので、この相が人の身に備つて居るばかりではない、天地萬物は悉く不偷盜戒の顯れてあります、そのことは私が日頃最もありがたく拜讀して精神修養の資と致して居る●慈雲尊者の十善法語の不偷盜戒の下に懇に御示しになつてあります、その御辭は『日月星辰ノ行度ヲ見テ古今ニ條理ノ亂レヌコトヲ知ル、山崩レ川竭ルヲ見テ成壞ノ數アルコトヲ知ル、雷震ヒ地動クヲ見テ常ト變ト相依ルコトヲ知ル、月盈レバ虧ケ物盛ナレバ衰フヲ見テ世相ノ當然ヲ知ル、鳥獸ノ羽毛ソナハルヲ見テ此身アレバ此服アルコトヲ知ル、蚯蚓ノ土ヲ食トシ蝶ノ花ヲ吸フヲ見テ此口アレバ此食アルコトヲ知ル、蜂ガ巢ヲ營ムヲ見テ此

慈雲尊者の御示

衆アレバ此屋宅城邑アルコトヲ知ル、蜘蛛ガ蜂ノ毒ニ中ツテ芋畑ニ走ルヲ見テ此病アレバ此藥アルコトヲ知ル、乃至、要ヲ取ツタイハハ目ニ觸レ耳ニ聞ク不偷盜戒ノ行相ナラヌコトハナキチヤ、生レ來リシヨリ死シ去ルマデ不偷盜ノ行相ナラヌハナキコトチヤ、天地開闢ヨリ世界壞滅マデ不偷盜ノ行相ナラヌコトナキチヤ云々』と御示しになつてありますが、實にさうでせう、御互に果報分限といふものを明めて見れば、松に古今の色なく竹に上下の節あり、鶯は白いもの鳥は黒いもの、豆腐は白くて角である、炭團は黒くて丸い物、何の不思議もありますまい、悠々たるこの天地間、何の盗むべき物がありますまい、何の奪ふべき物がありますまい、蕪東坡が言はれたやうに、「江上ノ清風ト山間ノ明月ト、耳之ヲ得テ而シテ聲ヲ成シ、目之ニ遇ツテ而シテ色ヲ成シ、之ヲ取テ禁ズルコト無ク、之ヲ用テテ竭キズ」て實にこの萬物は造物者の無盡藏と申すべきであります、これにこの因縁果報といふことを明ぬな



にこの不偷盜戒を犯すやうになるのです、皆様まあ能く考へて御覽なさい、世間に己れの分限を超えて金を儲けやうとする人々の心の奥はどのくらゐ苦しいでせうか、一生懸命に智慧袋を捲つて、他を欺き他を詐り、一切の利益を壟斷して自分一人で占めやうとする心配は一通りではありますまい、假設また金錢を儲けたにしても、不義で集めた財産を以て大厦高樓を造り、山海の珍味を口にして居ても、よもや内心に少しの疚しき處もなく清く潔く一生を送ることは出来ずまい、必ず日々夜々良心に責められて居るでせう私はさう思ひます、世に何が苦しいと言つても己れに心を責めらるゝくらゐ苦しうことはないであらうと思ひます、外から責められるのは其場を逃げさへすれば免れるけれども、己れの心の呵責に逢うては逃げる事が出来ないては何處まで行つても心の呵責からは免れる時はありますまい、世に分限を犯して果報を明めず不義の金錢を儲けた人達は、斷然なく自分の心に責められて煩悶苦惱の裡に一生を終るので、處が己れの果報を明め分限を知り取るべ

學校生徒明  
友の筆を盜

き因縁に由りて儲けた金錢を以て、生活して居るのはどのくらゐ楽しいでせう、假令その日々に儲けた金錢で漸く細い煙を立て居るにしても、心は實に光風霽月で疚しい處はありません、アノ労働者が晝間定めの間だけ側目も振らず眞ッ黒くなつて働いて、仕事を終つたならば浴にでも入つて着物を着替へ、一家團樂和氣霽々として、夕顔棚の下に妻君の酌で一杯傾けたならば、それこそ甘露の味がするでせう、自分の果報を明め因縁に由つて儲けて行くほど愉快なことはないものを、儲けるだけの因縁を造らないで分限を犯すものですから、盗みをするやうになるのであります、この盗みも始めはホンの些細の心得違ひから大事を犯すやうになるのです○何處かの母親がその兒が小學校へ通つて居る時、或日學校で他の生徒の筆を一本盗んで歸ると、母親は非常に喜んでオヤク能く盗んで來た、今度は隙を覗つて墨を盗んで御出で、と怒らないで却つ喜んだものですから、その兒はよいことにして隙さへあれば他の物を盗むやうになつて、生長の後には殺人強盜まで働く



やうになり、とうと捕縛せられてイヨ／＼死刑の宣告を受けた時、自分の母親を召び寄せて、母さんに言ひ遣したいことがあるから近く寄つて下さいと言つて、母親の耳に口をつけて言ひますに、母さん貴方は私が幼い時小學校で他生の筆を盗んだ時に、何故怒つて下さらなかつたか怨めしいと言ひながら、母親の耳朶を噛み切つたといふことですが、成程さうです、如何に石川五右衛門でも熊坂長範でも、幼い時には可愛らしい紅葉のやうな手ていたづらをしながら、母の乳房に吸ひついた天真爛漫の佛様であつたものが、一念の迷ひから臭を萬世に流すやうな大罪を犯すに至つたのであります、幼少の時の家庭の教育は實に大切なものではありませぬか、またこの不倫盜戒の上から申せば、直接に他の所有を盗まないでも、例へば官吏や教員のやうな方でも、俸給を貰つてそれに相應するだけの職を勤めなかつたならば、俸給の不倫盜です、その日／＼の日雇人でも貰つた／＼の仕事を怠ればそれだけの不倫盜罪を犯したのです、そのみでは無い、自作、教人作、見作隨喜といつて、

偷盜の報

自分で偷盜を作したのは元よりのこと、人を教へて盗ましても、また他が盗みをするのを見て隨喜して居るのも、この三つは重いと輕いの別はあつても皆罪になるのであります●華嚴經に「偷盜ノ罪ハ亦衆生ヲシテ三惡道ニ墮セシム、若人中ニ生ル、モ二種ノ報ヲ得、一ニハ貧窮、二ニハ其財自在ヲ得ズ」と御示しになつてありますから、能く／＼慎て偷盜戒を犯さぬやうにせねばなりません

第三不邪淫戒

第三が不邪淫戒であります、これは夫婦の間でなくて、他の夫や他の妻に戀想して不義の行爲をしたり、また夫婦の間でも非時非處非度の交りをしてはならぬといふ大切な戒法であります、佛様はこの戒を説く時若し笑ふ者があれば追ひ出せと仰せになつてあるのです、元來男女の道は至つて正しいもので、男子は天の徳を全うして其性剛なるもの、女子は地の徳を全うして其性柔なるものですから、若し閨門の内に男女の道が正しからず剛柔其當を得なければ、天地の氣候も自ら亂れ、天下國家に災難が起るとまで説かれてあ



夫は船長  
は機關士

ゲスレリー  
夫人

ります、總て人倫の根本は夫婦であつて、夫婦の間に子が生れると親子の關係が出来、従つて兄弟姉妹から伯父叔母、甥といひ姪といひ、皆夫婦が本になるものです、この夫婦は船でいはいは、夫は船長で婦は機關士のやうなものではありませぬか、船長の夫と機關士の婦とが志を合せて内と外とに働けばこそ、世の荒波を渡つて行くことが出来るのです、夫が外に出て大いに活動することの出来るのは、婦が家庭の整理をして内顧の憂がないやうにするからではありませぬか、名高い話です◎英國の總理大臣であつたヂスレリーの夫人は、夫より先きに伯爵の位を受けたほどの賢夫人であります、或日夫と共に馬車に乗つて議院に行く時、馭者が過つて馬車の戸を締めるのに夫人の指を戸に挟んだのです、定めし痛かつたてせう、それに夫人は夫が議院で演る演説の腹案中であることを察して、痛いからと言つて叫んで手を引いては、夫の心を亂すからと思つて指を挟んだまゝ、靜に忍んで居つて、馬車が着いて馭車が戸を開いた時始めて筋に指を引き取り、其日夫が演説を終ひて夕

邪淫の報

第四不妄語戒

方歸るまで口外しなかつたといふことですが、妻たるものが夫を助けるものこのくらゐ注意すれば、夫も活潑な運動をすることが出来るてせう、これの反對で邪淫を行して不義の所爲をする者は、今の世にも元より多くあるてありませうけれども、それを擧げるのは何の益もありませぬから申しませぬが、たとひ夫婦間の交りでも、佛様は非時というて時ならぬ時や、非所というて所ならぬ所やまた非度と申して度を越えるやうなことがあれば不邪淫戒を破ることになると御示しになつてあります、華嚴經には「邪淫の罪亦衆生をして三惡道に墮せしむ、若し人中に生るれば二種の報を得、一には妻貞良ならず、二には隨意の眷屬を得ず」と仰せになつてあります、能く慎んで天地陰陽の徳を全うして行かぬばなりません

第四は不妄語戒であります、これは眞實語と申して、嘘や偽りを言はないてアリノマ、を言ふことです、この戒も前の戒と同じやうに道理の上からいへば、宇宙間の現象は何も彼も皆不妄語戒の相を全うして居るので、嘘も偽も



天竺同は此戒の露現

ありませぬ、太陽は朝々東より昇り、太陰は夜々西に沈み、春來れば百花爛漫、秋至れば千山紅葉、少も時を違へたこともなく、犬は嘘を言はずにワンと吼へ、猫は偽を吐かずにニャンと啼き、鳥がチウーと啼いたことなく雀がカーと啼いたこともなく、何一つとして不妄語戒の相でないものはありますまい、御互の姿もさうです、鼻が物を言ふたこともなければ、耳が匂を嗅いだこともなく、眼は何時も色を見、口は何時も物を言ひ、手では握り足では歩み、身口意の三業はこのまゝ、不妄語戒の露現ではありませぬか、そのことを慈雲尊者は◎「元來箇々圓成人々具足、其身一切世界に徧滿シテアルチヤ、此徧滿したる身業ハ取りモ直サズ人タル道ヲ守ル人ノ五尺ノ形チヤ、元來箇々圓成人々具足、其聲一切世界ニ徧滿シテアルチヤ、此徧滿シタル口業ガ取りモ直サズ妄語ヲ言ハヌ人ノ語言チヤ。元來箇々圓成人々具足、智三世ニ入テ悉ク平等ナルチヤ、此平等ナル意業ガ取りモ直サズ此法ヲ憶念スル人ノ今日現前ノ一念心チヤ、唯ワルク意得テ及バヌコト、思フ者ガ、イ

智的宗教

ツガイツマデモ迷ノ凡夫トナルチヤ、外ニ向テ求メテ自己ノ光明ヲクラマス者ガ、イツガイツマデモ本然具足ノ佛心ヲ見ルコトナラヌチヤ」と御示しになつてをられますが、今は暫く口業だけに就いて御話申すこと、致しまして、皆様まあ能く考へて御覽なさい、口業の力といふものはなかく、豪氣なもの、古人も「利口の邦家を覆へすことを惡む」とか云はれたことがあります、實際口先きて國を覆へすことが昔からその例の多くあることは、能く分り切つたことではありませぬか、國と國と戦争でもした時に、如何に軍人は國の爲めに身を鴻毛の輕きに比して、連戦連捷美事に敵地を占領したとしましても、講和談判といふ時になつて、全權委員の三寸の舌頭で折衝の間に一言の失策があつたならば、ソレこそ一大事です、軍人諸君が血を流し骨を曝して占領した土地でも、ムザくと敵に還附して無念の涙を吞まねばならぬやうなことがないとも限りませぬ、實に口ほど大切なるものはないてせう、絶世の英雄といはれた豊臣秀吉公でも、曾呂利新左衛門の口に懸つては



胡瓜が甜瓜  
を喰ふ

度々翻弄せられたことがあるやうです◎或時新左衛門が秀吉公の御前へ罷り出で、唐突に申し上げますのには、只今登城致しまする途中に於て、不思議にも胡瓜(キウリ)が甜を食つて居るを見て参りましたと申し上げますと、秀吉公も、成程それは如何にも不思議千萬なる観物なり、新左衛門案内致せ、此方も一見せんと仰せられますと、新左衛門は委細畏まりましたと言つて、直に先導して城門の外に出て暫く行く内に、一人の老爺が荷擔うた薪を側に措いて息みながら、甜瓜を嚙つて居るのを指して、彼れを御覽遊ばせと申上げますと、秀吉公は不審の面もちてコレく新左衛門は薪を賣る老爺が甜瓜を食つて居るのではないかと言はれると、新左衛門は抜からぬ顔で、仰せの如く木賣(胡瓜)が甜瓜を食つて居りますと答へたので、流石の秀吉も怒るにも怒られず苦笑して歸られたことがあるやうですが、何と口の力もたいしたものではありませんか、御互が日々社會に處して人と交るには如何しても言葉をかはし合ふの外はないでせう、そのかはし合ふ言葉の使ひ方一つで、

睦しくもなり不和合にもなり、摺つた揉んだのゴタくも出来るのです、皆様の家庭の裡でもさうでせう、姑の言葉に骨があつたとか、嫁の言ひ方に角が立つたとか、兄が怒つたの、弟がコクつたのといふやうに、言葉からやかましくなることが随分ありませぬか、佛様がこの妄語を厳しく御戒めになつたのは實に深長なる意味のあることで、口から罪を造ることは夥しいものです、古人の語に「車は三寸ノ轄ヲ以テ千里ノ路ヲ遊行シ、人ハ三寸ノ舌ヲ以テ五尺ノ身ヲ破損ス、口ハ是レ禍ノ門、舌ハ是レ禍ノ根」といふことがありますが、過日も聞けば、何處かに縁組の相談が出来上り、最早結納の取りかはしも済んでイヨく何日には結婚の式を擧げるとそれまでも定まつて、雙方の親を始め親類縁者の端まで喜んで、花嫁も何から何まで用意の上樂み切つて居る時に、その娘に怨みを含んで居る人が、あの娘は品行が脩まらぬとか放蕩書生と關係があるとか、全く無根の妄語を吐いたのが、段々と傳つて男の方の人の耳に入つたものですから、とうとうその縁談は破れてしまつて、今



の今まで喜び勇んで待ち構へて居た嫁の方では、互に顔を見合せて無念の涙を呑んで居るといふことですが、恐ろしいものではありませぬか、世間にはこのやうなことは數限りもなくあることでせうが、皆様まあ能く考へて御覽なさい、その嫁の方で一家親類の人までが無念の腸を挫つて出る怨みの涙は誰れの身に浴せらるものと思はれますか、爾より出るものは爾に歸るで、屹度妄語の罪人に報いまするぞ●華嚴經に「妄語ノ罪ハ亦衆生ヲシテ三惡道ニ墮セシム、若シ人中ニ生スレバ二種ノ報ヲ得、一者多ク誹謗セラレ、二者佗ノ爲メニ欺カル」とありますが、御互に妄語は慎まねばなりません、處がこの身と口と意の三業は元來同一なるもので、身の上に意業を造ることもありまた口業を造ることもあり、口に意業や身業を造ることもあり、意に身業口業を作ることがあります、それゆゑ、御經の中や律文の中には、口業の妄語のみならず、身心の妄語といふことが説いてあるのです、身の妄語と申すことは、烏が鶯の眞似をするやうに、貧乏人が財産家のやうな風をしたり、判

三業の妄語

妄語の報

延陵季子

任官が奏任官の服を着けたり、兎角身分に相應しない偽りの身装をするのが身の妄語といふのであります、併し孔子が微服して宋を過ぎられたことなどは君子が變に處する權と申すもので身の妄語にはなりません、又忠臣が君の服を着けて敵を欺いたことなども、忠義から出た軍中の計畧であるから、身の妄語となる譯でもないです、心の妄語といふことは自分の心で一旦斯うと定めたことや、神佛の前に心で誓つたことを時に因て勝手次第に變へるのは心の妄語と申すものです、名高い事蹟で人の能く知つて居る癖があるでせう◎彼の吳の國の延陵の季札といふ公子が、中國に使ひに行く途中徐の國を過ぎた時、徐の君が季札の佩びて居た劔を見て、其色に求め欲する意が顯れたのを季札は心の内で見て取つたが、役目を帯びて中國の使ひする時であるから、用事を済して後に與へる考へて、中國の使ひを終へて徐を過ぎる時に、徐君は最早卒せられた後でありましたけれども、季札は一旦心の内にその劔を與へる決心をして居たものですから、徐君の墓所に往て樹の枝に劔を掛け



て去られたことがあります、是等は即ち心の不妄語を全うしたと申すものであります、併し如何に一旦心に定めたことでも、それが悪事であつたならば是非改めねばなりません、それを懺悔するのを妄語といふのではありませんから、よくく氣をつけて自ら罪惡であると覺つたならば速に改心せねばなりません、またこの不妄語戒の上で能く御心得置きが願ひたいのは、見たこと聞いたことを偽らす飾らずアリノマ、を言はねばならぬと申しましても他の悪事をアリノマ、に發き出すやうなことがあつてはなりません、誰は貴公の悪口をついて居たとか、誰は何時このやうな悪事をしたとか、他の不利益になることまでアリノマ、に饒舌りちらかすことではありません、昔葉公といふ人が、孔子に言ひますのに、我黨に正直な者が居りまして、父が羊を攘んだので、その子がこれを證明して訴へ出ましたが、何と正直な者ではありませぬかと誇り顔に申しますと、孔子はこれに答へて、「吾黨ノ直キ者ハ是ニ異リ、子ハ父ノ爲メニ隠シ、父ハ子ノ爲メニ隠ス直コト其中ニ在ト」と言

葉公の正道

はれたことがあります、この父子の間に互に相隠すのは天理人情ではありませぬか、元來佛教で説く所の戒法は慈悲心を本とせられたものですから、眞實の慈悲心から出た妄語なれば、所謂誠から出た嘘であつて、決して不妄語戒を破ることにはなりません、御互の心さへ慈悲に住して居れば、口に言ふことはそのまま眞實語となり、身に作すことは悉く身の不妄語となり、心の欲する所は距を踏えず、宇宙間の現象は残らず不妄語戒の現成なのであります

受持五戒(下)

第五は不飲酒戒でありますこれは文字の通り酒を飲むなと戒められたのですが、私は性來酒を好みませぬので、をりく諸子から御酒を侷められることがあつてもその厚意を受けることが出来ないくらゐの無調法者ですから、酒を飲むなといふやうな戒めは、私自身には餘り感じが深くない方です、けれども無明の酒即ち煩惱の悪酒に執著迷醉することがないとは申されませぬ、

第五不飲酒戒



これは實に御恥かしい次第であります、が併し煩惱の酒などといふことは別な問題ですが、兎に角私は普通の酒でアルコールの毒に中てられるやうなことはありませぬから、不飲酒戒は幾等厳しく那んなに無遠慮にても、説けば説けないこともないやうなものですけれども、多人數御揃ひの皆様方の中には、酒を御好みになる方が随分御在てなさるでせうが、私は高座に居て皆様の御顔を見ると、失禮ながら酒の嗜好な御方と嫌ひな御方は直に分ります、酒の好きな御方は、最前私が不飲酒戒のことを言ひ出してからは、何だか氣が濟まぬやうな腹が立つやうな眼で、憎くげに私を睨んで居らつしやるてはありませぬか、ナニ眞逆さうでもないでせうけれども、御好きな方はそれくらゐのものではないか知らぬと思はれるのです、が戒法には先日御話申しましたやうに開遮持犯といふことがあつて、酒を好む人の爲めには、また變則に夫れく都合の悪くないやうに許される法も説いてありますから、それを後に御話申して好きな方々の御安心の出来るやうに致しますけれども、先づ

始めには不飲酒戒の正面から、どこまでも飲酒の害を説いて禁酒せねばならぬやうに申しますから、好酒な御方は暫時耳を塞いでイヤく能く耳を浚へて御聽聞を願ひたいものであります

諸經の戒め

佛様が飲酒を御戒めになつたことは、なか／＼殿しい御文言が數限りなく御經の中に見えて居ります●涅槃經には「酒ハ不善諸惡ノ根本ナリ、若シ能ク是ヲ除斷セバ、則チ衆ノ罪ヲ遠サク」とあり●梵網經には「若シ自カラ酒器ヲ手ニシテ人ニ與ヘ、以テ酒ヲ飲マシムル者ハ、五百世ノ中ニ手ナカラシ、何況ンヤ自ラ飲ムチヤ」とまで御誠めになり、善惡所起經には飲酒に三十六の過失あることを説き、また三十五の過失あることを擧げられた祖師様もあり、中には十失を説かれたこともあり、過失の數は限りもありますまいけれども、中で一番數の少いのを參考の爲めに擧げますと●善生經に六失を御説きになつてあります、一ニハ財ヲ失ヒ、二ニハ病ヲ生シ、三ニハ鬪諍シ、四ニハ惡名流布シ、五ニハ恚怒暴生シ、六ニハ智慧日ニ損ス」といふのですが



酒を好めば自然に財を失ふことも、智慧が暗むことも申すまではありますまい、鬨諍するといふのも免れないやうです酒宴の場ではどうも自然に気が荒くなるに随つて、聲も大きくなり、何か少しく感情を害するやうなこともあつたならばそれこそ大變、口角に沫が飛ぶくらゐならばよいけれども、腕が舞ふやら拳が躍るやら徳利は空に飛び杯盤は欄干に毀れ、最終には血の雨を降らすやうな騒動を惹き起すことは珍らしくはないやうです、御茶を多量に飲んだからと言つて亂暴するものでなく、團子を食ひ過ぎたからと言つて喧嘩するものでもありませんが、誰様でも御酒が過ぎると、平生は温順な人でもツイ間違ひの起り易いものです、理屈も何もないこれは實際問題です、●釋迦牟尼佛御在世の時にその問題が解決せられたことがあります、或日佛様が多く弟子に向つて、飲酒の誠めをして居られますと、其當時の外道一外道と申すと何だか妙に聞えるてせうが、今日ていへば異なつた説を立てる哲學者のことですーがそれを聞いて、高慢にも佛様の前に行つて、頻りに酒

外道酒の功徳を説く

各宗の安心

の功徳を説き立て議論を吹きかけますと、佛陀は少しも理屈を言はれません我心には道業に妨げがあると思ふから禁ずるのであるが、議論よりは證據、兩方の弟子等を一座に並べて其徳を試験せやうではないかと、言はれますと外道も賛成して遂に雙方の弟子を一座に立て分けて試めました、スルト佛弟子の方では元より飲まぬ酒に酔ふた例なく、終日威儀作法を亂さないで如何にも靜肅であるのに、外道の方の弟子達は、追々に酔が廻ると飲めや歌へて袒裼になるやら裸形になるやら後には如何はしい物まで出して、踊る舞ふ擲つ叩る、杯盤狼藉牛飲馬食、笑ふもあれば泣くもあり御話にならぬ亂暴を始めたものですから、流石の外道も平身低頭して佛陀の前に詫び入つて、とうと佛道に入門したことがあります、皆様如何です理屈も議論もありますまい酒が不善諸惡の根本で罪を作るの因縁となることは申すまでもないでせう、それゆゑ前に擧げましたやうに、佛陀は善生經に「鬨諍シ」とか「悲怒暴生シ」とか仰せになつたのであります、また「病ヲ生ス」と御示しになつたの



は、御好な方には随分経験のあることとせう少しく度を過しても二日酔ひとか言つて頭が重いことがあるさうではありませぬか、宿酔に爛酒で迎へ酒なんぞはと言ふに至つては沙汰の限りですが何にしても酒の爲めに身體を傷める者は夥しいものでせう、假令直接に酒の毒に中てられないでも、酒が媒介となつて酒に浮かされたが爲めに受くる病氣、例へば花柳病のやうなものは子々孫々にまで患を遺すてせうたとひ花柳病でなくても、今日の生理學者は暴酒家の子には不具の者が多くまた兎角短命な者が多いと言ふてはありせぬか立ち入つたことを申すやうですが、日本の人が醸造なアルコールの多い酒の爲めに身體を傷り、また起きる時に起きず寝むる時に寝むらず、不自然極まる生活をする爲めに、年一年に身體が弱くなりまた従つて壽命が短くなることは非常なものであるさうです、併しそれが強ちに酒の爲めばかりといふ譯ではありますまいけれども、只今は不飲酒戒の上で悪いことは皆酒の爲めとして、罪を悉く酒に負はせるのですから、好酒家は悪しからず御推量あつて

飲酒の爲め  
壽命を短く  
する

動物の發育  
期限と生命

御聞きを願ひます、併し不自然な生活をする爲めに壽命が漸次短くなつて行くとすれば、酒が七八分の罪は如何しても負はねばなりません、人ばかりではない總ての動物が自然的生活さへして居れば、發育年數の五倍は壽命を保つのが當然であるさうです、例せば發育年數が五年であるから二十五年の壽命があると云ふ道理です、佛國の學者のフルーロンといふ人が人類に近い動物の、發育年數と生命期限とを研究して擧げられたことがありますそれが

動物	發育年數	生命期限
駱駝	八年	四十年
馬	五年	二十五年
牛	四年	二十年
犬	三年	十年乃至十二年
猫	一ケ年六ケ月	九年乃至十年



といふやうなことになるさうです、そして人類の發育年数は

羅馬法——廿五年 英米習慣法——廿一年 日本民法——滿廿年

となるさうです、さうすれば日本人の發育年数が滿廿年ならば、生命期限はその五倍で百年といふ道理ではありませぬか、それに日本人が百年の壽命を持つ者は全國中て數へるくらゐしかないとせう、百年どころではない、人生七古來稀ナリ」といふ語があるてはありませぬか、その人生七十云々と言つたのも昔のこととて、今日ではまた短いさうで、世界の人の壽命を比較して平均數を擧げますと

英國人——五十五歳 獨逸人——四十八歳 日本人——三十七歳

斯ういふことになるさうですが、何と心細くなるてはありませぬか、この通り人の壽命まで追々に縮まつて行くやうな大罪の、大部分が酒であるとするば恐ろしいものです、夏の桀王や殷の紂王が天下を失ふたのも、酒に智慧が昏んで淫樂に耽つたからとせう、實際に於て酒が不善諸惡の根本といふ佛語

の意義は明了てはありませぬか、何れの方面から考へましても酒は飲むべきものでないといふことは御分りになつたてせう、慎んだ上にも慎まねばならぬは酒飲であります

以上に演べたばかりでは、現在酒を賣つて居る商人や酒造家は、佛法に歸依することも出來ず、また酒を飲んでも別に量を過さず精神も狂はず、却て營養になるといふやうな人でも、酒を飲めば佛戒に背くかといふ難問が起るてせうがこゝで、最初に御約束申して置いた變則を御話申さねばなりません、佛法は元來慈悲を離れてはないので、慈悲を以て本體として一切衆生を濟度するのですから、衆生の機根が多種あれば、それを救ふの法も従つて多種てなければならぬ道理です、それゆゑ●舍利弗問經に「佛ノ曰ク、酒ニ多失アリ、放逸ノ門ヲ開ク、飲ムコト帶蔗ノ子の如キモ、罪ヲ犯スコト已ニ積ム、若シ病苦ヲ消スルニ用フルハ先ノ斷ズル所ニ非ス」と御示しになつて居られます、世には隨分酒を飲むと自然に善心が起るとか、また何かのこととて怒つ



優婆塞尊者  
病僧の爲め  
許に飲酒の趣

中島喜法居  
士

た時酒を飲まねば解けぬといふやうな人がないとも限りませぬ、また病氣に  
より酒を飲めば快癒るといふやうな人には酒を與へても破戒になりませぬ、  
分別功德論に出て居ります、優婆塞尊者が或時に一人の病僧の望みに依て、  
釋迦牟尼佛に酒を以て薬と致したう存じますから御許しを願ひたいと申しま  
すと、佛陀は我が所制の法は病苦の者を除くと言つて御許し遊ばされたこと  
があります、また戒を受けるには全分持一分持といふことがありますから、  
祖先傳來酒を賣る家に生れた人は、酒を賣つても他の戒を持つとか、また飲  
む人でも量を過さずに、病苦の爲めとか或は善心が起るからといふので飲む  
ならば、酒は飲むても他の戒を持つやうにすれば一分持といふことは出来る  
のです、併し酒を飲んで怒りが解けるとか善心が起るといふ人はなかく少  
いやうであります、私が知つて居る人の中で感心な御方があると思つたのは  
●常陸國の土浦町で、神龍寺の檀家に、佛教篤信家で中島喜法居士といふ老  
人が居られます、この仁は神龍寺の副住職とまで他から言はれるくらゐ、昔

森勝次郎の  
話

提寺の世話をする感心な者で、其風采を見ても濃厚篤實の君子人なることは  
分ります、この人は非常に酒を好まれるので、三度が三度でも苦しくない方  
であるさうですが、それに決して度を過すこともなく、飲めば如何にも衷心か  
ら言ひ知れぬ樂みがあつて、自然と慈悲仁愛の心が起つて來るといふことで  
他の人々も皆賞讃して居ました、私も酒を飲んでも佛制に背かぬ信者といふ  
は此人であらうと思つたことがありますが、這のやうな人は容易に得られぬ  
人で、大抵の者は酒を飲めば善心が起るどころではない、前に擧げた善生經  
の文句にあるやうに、財産も無くし智慧も昏み鬪諍も好み病も得るといふや  
うなことになるものです、其例を引きますと、新聞に出て居りましたから皆  
様も御存じかも知ませぬが◎東京麴町區紀尾井町三番地に、森勝次郎といふ  
者が居つて、女房トクとの間に二人の子供もある程の中であるのに、勝次郎  
は性來酒と賭博に餘念がなく、毎日毎夜打つと飲むとにたわひがないので、  
僅かばかりの財産 忽ちの内に蕩くしてしまひ、今は妻子がその日の食事に



も差支へるものですから、トクは幾度か言葉を盡して意見をしても、勝次郎は空吹く風と聞き流し、更に相手にせぬのみならず強て言へば踏むたり蹴つたり、手荒な所業をするものゆゑ、トクも今は我慢も出来ず、據なく生き別れ同様に、里方なる北豊島郡日暮里村の千草川四郎方へ、二人の子供を連れて立ち歸りましたが、里方とは言ふものゝ、今では養子に嫁であるから他人も同様なれば、何をするにも氣が置いて居るにも居にくいけれども、幸に養子夫婦は極めて氣立てのよい親切な者で萬事姉さんくと骨肉のやうに親み少しも迷惑の風もなく始終手厚く世話をして呉れるので、トクも今までよりは却て氣樂なやうなものではあるけれども、流石に他人同士の間ですから、斯く大切にせられるとせられる程なほ氣の毒に思はれて、我身ながら肩身も狭く暮して居りましたが、夫れにつけても朝夕に別れた夫の事を思ひ出し、彼の人が堅氣にさへ働いて居て呉れたならば、今頃はどうして暮らして居るであらうかと、案ぜぬ日としてはありませぬ、それに彼の勝次郎は、女房や子

供に別れてから厄介者を拂つた氣になり、それから後は尙一倍放蕩にうつゝ、を抜かし、遂にはその家にも住み兼ねて世帯をたゞみ、所々方々と安宿を泊り歩き、破落戸同様の姿となつてしまひました、四月の廿五日には不忍の池端で戦死者の追吊會が行はれ、種々餘興があると聞いて、トクは二人の子供に餘所ながら其の賑ひを見せてやらうと、お晝前から出掛けたのに、生憎不忍へ行くと、ポツ／＼雨が降り出たので、ソコ／＼にして引き返し鶯谷の邊まで来た頃は、雨は益々強くなり據なく稍暫し、森の木蔭に雨宿りをして居る所、丁度其時向ふの方から三三人の破落戸と共に、一杯機嫌の好氣持、濡れるを厭はず來掛るのは、日頃心にかゝつて居た夫の勝次郎、流石に子供は目が早く、ヤア阿爺が來たくと我を忘れて喜ぶのを、見るにつけても女房トクは先づ早や胸さへ塞つて暫しは言葉も出ぬ様子、勝次郎は夫れと見るより忽ち親子の身形に目をつけ、無事であつたか丈夫であつたかと尋ねることばさて置き、ヤアこれは好い處で出逢つた、實は此頃は廻りが悪くて旨い酒



も飲むことが出来なかつた、幸ひに手前は好い羽織を着て居る、この羽織を借りて行かうと理不盡にも、着て居るトクの羽織に手をかけ、引き剥がさうとしますると餘りの仕打に女房は呆れながらも其手に縋り涙と共に掻き口説いても、勝次郎は耳にも入れず、エ、其様なこと聞いて居る暇はない羽織を脱がせば用事はないのだ愚圖々々せず早く渡せと争へば、二人の子供はホロ／＼涙、阿父堪忍してお呉れと可愛らしい手をのべて左右から取り縋ると傍て見て居た同伴の破落戸も流石に氣の毒と思つたものと見え、色々勝次郎を説き宥め、羽織を脱かせることだけは思ひ止まりましたが、エ、此奴等の顔を見るのも穢らはしいと女房を降りし切る雨の中に蹴飛ばして、鼻唄交りてぶらくと何所ともなく立ち去りました、跡におトクは漸くに起き上りは上つても、泥塗れの此身装では今更里家へも歸られず、餘りといへは邪慳な非道な胸慾な、斯んな夫を持つたのが此身の因果とはいひながら、可愛さうに二人の子供は、何んにも知らず朝夕に慕ひ焦れて居るものを、不憫とも

思はずまた其上に、この往來で着て居る着物迄脱がさうとは、餘りといへば無慈悲な心、エ、口惜しい腹か立つと夫の去跡を睨み詰め、暫しは涙に暮れて居たるが、餘りの口惜しさ哀しさに自と氣分も取り逆ほせて、モッ此上は死んで夫に面當せうと、そのまゝ二人の子供を引き連れブラ／＼と立ち去り何處を如何に彷徨うて居たが、その夜の十二時過ぎ、目白停車場の脇なる鼠山添ひの鐵道線路に出て、親子三人鐵道往生を遂げる覺悟の處、幸ひ此處へ北豊島郡練馬村の瀧川熊次郎といふ人が、親戚の病人方へ見舞ひに行つた歸路、線路傳へに來掛りつゝ早くも此體を見て不審に思ひ、先づ兎も角もと我家へ連れ歸り、段々心を落ち着けさせて仔細を聞けば右の次第、マアノ短氣は起さぬがよいと充分意見を加へた上、その夜は自宅に一泊させ、翌朝日暮里の千草川方へ連れて行くと、同家では昨日親子が不忍へ出掛けた儘歸つて來ないので非常に案じ、諸方を搜索して居た處であるから、殊の外打ち喜びそれから一層に氣をつけて、親子の者を親切に世話して居りましたが、



勝次郎もそのことを聞いて忽ちに改心し、斷然酒を禁じて元の通りに職業を勵んで居ると申すことでありますが、酒が財を失ふことも、智慧を損ずることも、鬭争を好むことも、惡名を流布することも能く分るてはありませぬかこの飲酒が悪いといふことが分りましたならば、速に禁酒をせねばなりませんまい、急に禁酒することが難いならば節酒でも致さねばならぬでせう、處が佛法で教へる不飲酒は常に物質上の酒ばかりではありませぬ、前にも申しました通り、御互は曠劫の昔から無明煩惱の惡酒に迷醉して三界六道の闇黒裡に輪廻し居りはしませぬか、物質の酒は肉體を害するに止まりますけれども無明煩惱の酒に迷醉したならば、佛祖の慧命を失うて生々世々の不具者とならねばなりません、皆様がこの五戒を御持ちなさるならば常に人身を失はざるのみならず、遂には佛菩薩の位置に進むことも出来るのであります

## 第七座

## 社會悉檀(上)

信仰箇條も、追々座を累ねてまゐりまして、皆様は最早、安心門の中の三信の箇條で通佛敎の正道を御信仰なされ、次に三行の箇條で佛敎信者としての修行の方法から、人道履踐の戒法までも御心得になりましたが、さてこれからは那樣行持をせねばならぬでありますか、已に皆様は御自分で立派な佛弟子であるといふことを自覺なさらねばなりません、佛弟子であるならば佛陀大悲の誓願を己が身に體して、一切衆生を濟度せなければならぬは申すまでもありません、衆生濟度などと申せば何だか非常に難行しいことのやうですけれども、何も不思議はないでせう、別に佛敎でなくても通常社會の一員としても、君の爲め國の爲め、社會公共の爲めに衆人の利益を計らねばならぬことは、普通道德の上からでも申すことでせう、況や佛敎を信奉する御